

---

愛しさ故に ~ Las palabras de una princesa ~

愛埜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛しさ故に ~ Las palabras de una princesa ~

### 【Nコード】

N7367P

### 【作者名】

愛埜

### 【あらすじ】

真央霊術院に鬼道の講師として、私たちは久しぶりに院へとやって来た。さっそく授業に取り掛かるが、想像以上に出来が悪い。どうしてそんな事も出来ないのかと思っていた矢先、何やら違和感を感じる。もしかして、院生の霊圧が暴れている・・・？ “愛しさ故に”シリーズ第三弾となります。前作同様に捏造あり、原作と異なる点が沢山あります。

1 No puedo pero lo reconozco

わたくしとした事が、新たな隊長の就任の瞬間を見逃してしまうなんて…。

奏恵かなえが撮っておいてくれた写真を見た。

それを見て、ますますその時の様子を見たかったと云う気持ちが大きくなってしまっている。

その日の昼までは瀟霊廷内に居たのだが、任務で外に出ていた。

その一週間後である今朝、九番隊に帰ってきたら奏恵に写真を見せられながら経緯を聞いた。

しかし、肝心の人柄や何処の隊の出か。そして名さえも聞かされていない。

お会いするのが楽しみ。

今から隊首室に行つて挨拶と帰還の報告だ。

あの写真に写る2人は幻想的だった。一体、どのような方なのだろう。

トントントン

隊首室の扉を叩く。

新たな上司は、何を持っているのだろうか。

「どうした」

まさか、聞き慣れた声が返ってくるとは思っていなかったので驚く。

「千田でございませす」

「入れ」

「失礼します」

不思議に思いつつも、中に入る。扉を開けると窓からの朝日が眩しい。以前と同じように窓が開けられていると云うのに、こんな隊首室を見るのは久しぶりの様な感じがする。副隊長が纏う雰囲気は落ち着いているというか、まるいから、そう思うのだろう。

「隊長、四席が帰ってきましたよ」

「んん〜」

副隊長が優しく声をかけながら、誰かを揺すっている。すると、髪の毛の長い女性が小さく伸びをして、身をソファから起こした。

漆黒の髪には綺麗な青いの蝶の髪飾りが。

「もう時間？」

「違います。うちの四席が帰ってきたんよ」

「ん？ あ、あの時の君か…」

わたくしを人目見るなり、この発言。一体どういう意味なのだろう。

女性は、副隊長に腕をとってもらい立ち上がる。

「隊長、コイツが四席の千田です。」

「千田明衣めいでございます。よろしくお願いします」

わたくしは、そう言いながら頭を軽く下げる。

元の姿勢に戻すと、彼女は声を発した。

「綾瀬川弓親だよ」

「あつ！」

わかった。

九番隊に大虚が現れたあの時、彼に助けられている。

九番隊の隊舎で四席が、よりによって十一番隊の、しかも自分より格下の五席に助けられたのだ。

忘れるはずがない。

あの屈辱に似た感情を、このわたくしに与えたのだから。再び憎悪が膨れ上がる。

「あの時はありがとうございます。」

「君が四席ねえ……」

まさか、本当なのだろうか。

だが、わたくしを見る彼女の霊圧と、あの時の彼の霊圧は同一だ。間違いない。

「知り合いだったのか？」

「以前、ここに大虚が出た時に助けていただきました。」

「あの時か……」

わたくしの短い説明で副隊長は納得されたようだ。

確か、あの時は運ばれた四番隊の病室で一人悔し泣きをしていた所を副隊長に見られてしまった。

そんなわたくしを、切り捨てないでくださった副隊長のおかげで今ここにいます。

副隊長は昔から、人を悲しみの底から奮起させるのが上手な上司だ。ここが九番隊以外の隊であったなら、わたくしみたいに泣いている様な隊士は捨てているだろう。

「大丈夫だったの？」

「もうピンピンしています。」

「見舞いに行こうなんて事は一切考えなかったけど……。それはよかった」

わたくしが抱く十一番隊五席の印象とはだいぶ異なる。

もちろん同じ所もあるが、もっともつと高飛車だと思っていた。

「君が帰って来て、こうして僕たちと話していられるという事は、皆怪我なく帰って来たんだね？」

「はい。無事に任務を遂行して参りました。」

「御苦労さま。ゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます。失礼しました。」

そう言つて、わたくしは隊首室を出ようと2人に背を向ける。

わたくしの中の複雑な感情を隠して、扉に手をかけた。

わたくしはあの女を認めなければならない。

しかし、認めたくないと言ふ感情が大きい。

個人的な感情で関係のない隊士を恨む事は、誰に聞いても良くないと答えるだろう。

しかし、未だにあの事を引きずつて十一番隊事態を嫌悪してしまっている。

「修兵、時間が来るまで起こさないでね」

「わかりましたよ。・・・夜にちゃんと寝たらどうツスカ？」

「月が綺麗な夜は眠れないんだ。仕方がないでしょ……」

「それが変なんですよ」

こんなどうでもいい様な会話。一週間前、隊首室から聞こえる事

はあり得なかった。

わたくしは部屋を後にした。

任務から帰って来てから、ずっと気になっていた事。それは副隊長をはじめとして、皆の表情が明るい。

その答えが今わかった。

彼女のおかげで皆の不安が少しずつ払拭されてきているのだ。

認めるべきところは認めなければならない

悔しいが、これは紛れもなく彼女のおかげなのだ

個人的な憎悪は消し去らねばならない

自身を持つ偏見を捨て去らねばならない

そして何より、少しは大人にならなければならない

それでないとなんか進む事は出来ない そんな事は分かり切っているのに

“愛しさ故に”第三弾です。

私の文章を読み続けて下さっている方はもちろんの事、はじめましての方もぜひ続きも読んでやってください。



## 2 U n c a m b i o e i n m u t a b i l i d a d

「霊術院で1日講師!？」

驚きの声が執務室に響く。

皆の視線がそちらに集まるが、すぐに手元の書類へと戻される。

「はい」

「副隊長がいつも行つてたやつだろ。」

「ああ」

「だったら副隊長が行けば良いじゃねーかよ。一体、誰が行くんだ?」

「九番隊からは2人。鬼道の腕がたつ者をと云う事らしいですよ」

「“から”って何だ? 他隊も一緒なのか?」

「はい。十一番隊らしいですよ」

2人の声は少し小さくなったが、皆は仕事をこなしつつ、2人の会話を耳を傾けている。

だつて気になるじゃないか。

「よく了承したな」

「隊長が元十一番隊だからでしょう…」

「そうだな。今までの俺たちの常識には外れるがな…。」

九番隊隊士の十一番隊に対する偏見は消えていないようだ。

俺が、ここに来た時の風当たりは酷かった。

あの時は副隊長と前十席のおかげで何とか乗り切っていた。

そして今、あの事件以後は全くと言っても良いほど、俺に対する嫌

がらせは無くなっていた。

「で、九番隊からは誰が行くんだ？」

「これかららしい」

「まあ、何があっても、俺はいかねえからな」

「そうだな」

今回は相手が隊長だからだろうか。

直接、何かする事は出来ないから陰口を言っているのだろう。陰湿だ。

スパーン

障子が勢い良く開け放たれた。

そこには副隊長。

さっきの会話が聞こえていたのではないのだろうか？ 顔をゆがめて、少し不機嫌そう。

「「「おはようございます」「」「」

皆は手を止めて、一斉に挨拶する。

「おはよう…。一体どこから情報が漏れてんだ？」

バツチリ、彼らの会話が外にまで漏れていたようだ。

小さい声で話していたのに聴こえていたと云う事は、結構前から部屋の前に居たと云う事か。

「てめえら、話はわかってんだろ？」

「わかっていますよー。こいつらが喋ってたし。もしかしたら

悪口も言つてたかもしれへんー。」

「…！」

如月きんづき五席の発言に2人は固まる。

だが、副隊長は気にせず話を続ける。

「・・・誰か行きたい奴はいねえのか」

皆は黙り込む。

余程、十一番隊と一緒に嫌なのだろう。 偏見が消えていない証拠だ。

それならば仕方がない。

偏見を持っていない奴が名乗り出た方が、十一番隊にとっても良いだろう。 それは此処では俺しか居ない。

「誰も行かないとおっしゃるなら俺が行きますが…。」

「しゃーないし、私も行きますよ。 杜真もじまだけはマズイでしょ」

俺と一緒に名乗り出たのは如月五席。ちよつと俺に対する言い方が厳しい。

「他は居ねえのか」

皆、無言。

そんなに行きたくないのか。

「如月、足立。 付いてこい」

「はい」

俺たち2人は副隊長の後を追って歩いた。

副隊長の後に付いて行った先は隊首室。

「嘘だー」

何やら隊首室の方が騒がしい。  
廊下を歩く者が驚いて、思わず隊首室を見たくらいだ。

トントントン

扉を叩くだけで、副隊長は部屋に入った。

私たちはそれに続く。

真っ先に視界に入ってきたのは隊長。髪には美しく青い蝶の髪飾りが。

「隊長、外まで丸聞こえっスよ」

「そうだった？ でも叫んだのは彼たちだからね。どうしてもいいや」

見るとそこには私の見知らぬ者が2人。

とても似ている。一卵性双生児なのだろうか。

「すみませーん。」「驚いてしまったんですよ。」「まさか、こんな事に」「なっているとは」「思わない」「じゃないですかっ！」

見事に交互に言っつて隊長を見ている。  
知り合いなのだろうか。

「あ、挨拶遅れました。」「お久しぶりです。」「十一番隊、谷口滑引」「粗押です。」

「元気そうだな」

「始めまして、私は五席の如月奏恵です。」

2人に挨拶すると、同時に会釈してきた。

何から何まで息があっている。すばらしい。

十一番隊の者ならば、隊長と杜真の知り合いと云う事になる。

「何？ 滑引と粗押が今回一緒なの？」

「「そうだよー」」

双子に杜真が話しかける。

このままでは雑談が始まってしまい、肝心の話が出来ないのでないだろうか。

私は隊長と向き合う。

「どういった要件なのでしょう。」

「話は聞いてるでしょ？ ……いつもなら檜佐木が行っているのだけれど、今回は色々な死神に来てほしいとかなんとかで」

だから一層の事、いつもとは違う者が行ってしまえと云う訳か。

「どうして、うちと十一番隊の組み合わせなんでしょうか？」

「知らない」

まさかの展開だ。

てっきり、隊長がそう申し出たのかと思っていたのに。

「えつ。隊長、知らないんすか？」

「檜佐木が知ってるんじゃないの？」

「俺は知らないっすよ」

「嘘だあ」

「こんなことに嘘吐いてどうすんですか」

「それもそうだね」

どうやら2人とも知らないらしい。

その会話を聞いていた杜真が、十一番隊の2人に聞く。

「滑引と粗押は知らないの？」

「聞いてないよ。九番隊の方が」「詳しいだろうって、斑目三席に」「言われて」「追い出されてきたから」

「一角も適当だね。まあ、十一番隊はそんなものか……」

あ。

外から黒い蝶が、ひらひらと。

隊長の元へとやってきた。

それと副隊長が慣れた手つきで捕まえ、隊長の指に留まらせる。

十一番隊の双子と杜真は、初めてみる光景に目をパチクリさせる。

私も勿論、不思議に思うがすぐに理解する。

普通なら本人が受け取る。しかし、ここでは見慣れた光景。

以前、前隊長の為に、隊長宛の地獄蝶を副隊長が隊長の指に留まらせていた。今でも続いていたのか。

「……今すぐに来てほしいらしいよ。」

「「「ええー!!」「」」

杜真と双子が叫ぶ。

「急ですね。」

「そうだね。 奏恵、任せたよ」

「お任せ下さい。 しくじったりはしませんよ」

「いってらっしゃい」

「行ってまいります」

私は隊長と副隊長の顔を見て言う。

「行ってきますー」

「行ってきます」

他の三人も私に続いて隊首室を後にした。

久しぶりの真央霊術院。

卒業して、護廷に入ってから初めて足を踏み入れる。

此処は空き教室。

今日の控え室として使わせてもらう事になったのだ。

「何にも変わってないなあ…。アンタらはそこまで久しく感じひんやる?」

私は目の前の杜真と十一番隊の滑引、粗押に向かって言う。

3人は仲良く戯じゃれている。同期はやはり仲がいい。

特に杜真は元十一番隊隊士だ。当然と云えば当然。

「そうですが、「やっぱり」「久しぶりである事に」「変わりはないですからねえ。」

この2人を見ていると、十一番隊嫌いな姐ねえさんやその他の隊士の心境も変わるのではないだろうか、と思えてくる。

特に姐さんは極度の十一番隊嫌いなのだ。

「そっかー。護廷に入ると、どうしても関わりが薄くなるしなあ…。」

十一番隊は皆、この子達みたいな良い子ばかりなのではないのだろうか。

偏見とは恐ろしい。

真実を曇らせてしまう。



「そうですね!」「すでに、居なくなっている先生も」「いるじゃないですか。」「寂しいです。」

「でも、あの先生は相変わらずみたいですな」

杜真が言う“あの先生”とはあの先生なのだろうか。

「あの先生”って誰?もしかして長谷川?」

「ソイツだーっ!」

「ん?オレを呼んだかあ?」

「「ぎゃー!」出たー!!!」「」

噂をすれば影。杜真と双子は叫び声を上げる。

扉には長谷川先生。

長身、痩せ形。そして、私があつた中で最も幸が薄そうな顔。

あの時と全く変わらない姿で、黒板の前に立っている。

「お久しぶりです。」「長谷川先生」

「ん?谷口にそっちは足立かあ。確か会って即、叫んだのは

お前たちが初めてだぞお。」

「ごめんなさい。」「驚いちゃって……」

私の事は眼中には入っていないようだ。

「先生。私の事、覚えてはります?」

「ん?確かお前はあ……」

コイツ、私の事を完全に忘れてやがる。

毎年多くの卒業生を輩出するのだ。仕方がないだろう。

「如月ですよ。今は九番隊にいます。」

「ああ、如月君か。確か千田に懐いていたなあ。千田は元気があ？」

「相変わらず好き嫌いが激しい方ですよ。」

「そうかあ、それは良かったあ。あ、今日来てもらったのはねえ。こつちに来てえ。」

やっと本題に入る。

十一番隊気質の三人と私の初めての任務。面白くなりそうだ。

案内されたのは屋上。大変見晴らしがよい。

天気も良く、世界がどこまでも続いているのかと云う錯覚を覚える。

「長谷川先生、何ですか？」

杜真が先生が現れてから始めて口を開いた。

「ん？ あそこに院生が見えるだろお？ 一年生なんだけどねえ。」

先生が指さした先には広場に二十人くらいの院生がいる。

久しぶりに見た懐かしい制服にますます、年を取ったと感じてしま

「あの子たちの鬼道を見てやってほしいんだよあ。普段ならこ

んな事は特別に頼んだりはいないんだけどお……。」

「何かあるんですか？」

杜真が質問をしてくれるので私は黙っている。

「ん？ あの中に真つ白な娘こがいるだろお。」

目を凝らしてよく見ると確かに髪や肌が真つ白な女の子がいる。周りの子よりも霊圧が大きいように感じ取れる。

「あの娘の霊圧が最近、特に安定しないんだあ。この状態で鬼道なんか練習したら暴走しかねないからねえ。」

「あの娘、いじめられてませんか。」

私が出ると、先生は私たち4人を見た。

あの少女はひとり仲間外れにされているように見える。

「そうみたいなんだあ。多分、それが原因で安定していないと思うんだあ。だから、君たちが練習を見てくれている間にオレは証拠を掴みたいんだよねえ……。」

「了解しました。先生は確実な証拠を掴んで下さい。」

「ありがとう。良い卒業生を持ったよ、オレはあ。今からヨ

ロシクう。時間になったら、そっちに行くからあ。」

「わかりました。一年生って事は三十一しやっかほうの赤火砲ですね。」

「そうだよお。如月君、後は頼んだよ。」

懐かしの先生はその場を去って行った。

私たちはさっそく、院生が待つ広場へと向かう。

院生達と合流し次第、瀟霊廷外の草原へと向かう。

瀟霊廷内で暴れるには場所が狭すぎるからだ。

今年の一年の出来は如何ほどなのだろうか。楽しみだ。

## 4 L o m e s t r o

院生は俺たちの突然の登場に驚いたようだ。  
如月五席が一步前に出て話し始める。

「はじめまして。私たちは九番隊の檜佐木副隊長の代理として  
やってきました。私が九番隊五席の如月奏恵です。」

「俺は十六席の足立杜真です。」

「オレたちは」「十一番隊の」「谷口滑引と」「粗押です。」

次々と手短に自己紹介を終わらせて、さっさと本題に移る。

「今日は鬼道の練習。始めは上手に出来なくて当たり前。練  
習を積んで上手くなっていけばいいから。2人ひと組になってく  
れない？」

院生は一気にやる気になったようだ。

皆一斉に2人ひと組をつくっていくが、やはりあの娘が余る。

「あれ？　ここって奇数なんやあ……。じゃあ、杜真が組ん  
であげて」

「わかりました」

少し白々しい気もする。しかし、如月五席を敵に回すわけにはい  
かない。

俺はあの娘の傍に立つ。

「よろしくね」

「あ、・・・はい。」

緊張しているのだろうか、顔を俺に見せてくれない。  
白い髪が太陽の光を反射して綺麗だと思う。

「今日やるのは、三十一の赤火砲をやるよ。詠唱破棄は禁止。

まあ、出来るとは思っていないけど・・・。杜真は大丈夫だよね

？」

「ちょっと、それってどういう意味ですか!？」

如月五席は俺をどう思っているのだろう。

というよりかは、十一番隊出身の者は皆できないと思っているのだろうか。

「大丈夫ですよー。」「こっに見えても杜真は」「去年の首席卒業ですよ。」「見えないですけど」

「見えないとか言うな!!！」

谷口に向かつて俺は思わず叫ぶ。

俺が十一番隊に居た頃と同じような会話に、密かに安堵する。

十一番隊での俺の居場所はまだ消えていないようだ。

「ほな、心配いらんなー。・・・でもホンマに見えへんなあ。」

「五席いー。」

こんな俺たちの会話に院生の間で笑いがおきる。

そして、あの娘も。

「手本を見せるから、こっちに寄って来て。滑引、粗押がやってみて」

「任せて下さい!!!」

谷口は前に出る。

どう考えても、如月五席は谷口を試している。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ  
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

滑引が粗押に向かって鬼道を放つ。

「破道の三十一、赤火砲！」

「縛道の八十一、断空だんくう!!!」

ドーン……

詠唱破棄せずに放たれた滑引の赤火砲を、粗押が真剣に受け止める。  
昨年度卒業生で一番とまで唄われた谷口の鬼道は見事だ。  
煙が舞う。

如月五席は予想以上の谷口の鬼道に少し驚いているようだ。

「……ざっとこんな感じ。皆始めて！互いに悪い所や良い所を  
指摘しあって。的はあの木いやし。あと、わからないことがあ  
れば、私たちに聞いてね。」

「……はい!!!」

院生の威勢のいい声が晴天に響いた。

俺たちの講師としての時間が始まる

## 5 Act? o violentamente

あの白い娘の霊圧が時間の経過とともに大きくなってきている。厄介な事が起こらなければよいのだが……。

あちこちで小さく弾ける様な音が鳴っている。

年々、新入生のレベルが低下してきていると聞いていた。しかし、これは予想以上だ。

練習を始めて半時間。

まだ、どこからもド派手な爆発音が聞こえてこない。

私の頃なんかは、初めての一発目が大爆発だった奴もいたと云うのに。

「そんな立ち方で力入るん？」

私は適当に、目の前で練習している院生に声をかける。

「へ？」

「だーかーらー、そんな立ち方じゃあ力が入らへんからアカンって言うてんの。」

意味がわかっていない様なので、私はその子の横に立つ。

「足を肩幅に広げて力を抜く。手を前に突き出して深呼吸してから詠唱してみなさい。」

「はい！ やってみます」

私が言った通りに行く。

こんなことは教室で、すでに教えている様な事なのではないのか。

どーん

一年生にしては上出来だろう。

その子が驚いた表情でこっちを見る。

「…できた」

「やればできるやん。皆に教えてあげ」

「はい！ 有り難うございました」

そう言つて、友達の元へと走って行った。

これから先が思いやられるが、気長にやっていくしかない。  
これが、まだまだ続くと思うと気が滅入ってしまう。

突然、大気が揺れた。

まるで何かが暴走しているよう。一体、何が起こっているんだ。  
ここからは、遠くはなさそう。

「イヤァァ！」

急いで声の方へと走っていく。

例のあの娘だ。

安定していた霊圧が大きく揺れて、体内で抑えきれなくなっている  
ようだ。

杜真が必死になって、彼女の霊圧を逃がそうとしている。

「大丈夫だから！ 心配しないでっ」

「イヤイヤイヤァァ！」



杜真の声が彼女まで届いていない。

「杜真、下がりなさい！ 杜真の霊圧では逃がす事は愚か、逃がしてはやれない！！」

「はいっ……！！！」

杜真が彼女から離れる。

一番良い方法は、自身で処理させる事。

次に良い方法は、他人が体外に逃がしてやる事。

最後の手段は、他人が自身の体内に無理やり抑え込む事。

今回の様に、本人の意識があやふやな場合は他人がどうにかしてやらなければならない。

しかし、この方法を取る場合にはその他人が本人よりも大きな霊圧を持っていなければならない。

生憎、ここには彼女より大きな霊圧をもつ者が居ない。

おそらく、私でギリギリ。

「杜真、誰か四席以上の者に来てもらって。」

私は、言いながら彼女を包み込むようにして抱きしめる。

谷口は皆を安全な所まで避難させている。

何も言わずに処理してくれる事は有難い事だ。

「上手くいっても、周囲から余計なのがやって来るかもしれない。  
はやくー！」

「わかりましたっ！」

杜真は瞬歩で去って行った。この場には私と華奢な白き少女。  
あの細身な体型では想像がつかない程の霊圧を、私は上手く逃がし  
てやる事が出来るだろうか。

まるで、自分自身との闘い。

杜真が帰って来るまでの時間が、途轍とてつもなく長く感じられた。

俺は、とりあえず九番隊の方向へ向かいながら、出会った上位席官に来ていただく事にした。

しかし基本、上位席官は隊舎に籠りつきりなので出会う事が少ない。結局、九番隊舎まで帰って来てしまった。

「失礼しまーすつ。 はあはあ・・・」

いきなり扉を叩かずに入ったので、隊長と副隊長は驚いた表情をしている。

俺はと云うと、息を整える事に必死だ。

「何途中で向け出して来てんだ？」

「え、それじゃあサボってきたの？ 大胆だねえ・・・」

副隊長と隊長の厳しい言葉を僕に投げかける。

それにも負けずに、息を整え終えた俺は状況を説明する。

早くしなければ如月五席が、いつまで持つかはわからない。

「院生の霊圧が暴走しているのですが、如月五席でも抑えきることが出来るかどうか・・・」

「情けないね・・・」

「どんな子だ」

「一年生の女の子です。 白髪で肌がとても白い。」

隊長は呆れた顔をして窓の外に向いてしまった。

副隊長は俺の話の続きを聞いてくれるようだ。

「あの子か…。以前から安定はしていないと思っていたが…。  
隊長、覚えてますか？」

「何？ あの日にいきなり此処を訪れた、あの子だっていうの？」

2人は既にあの子の存在を知っていたようだ。

隊長は再びこつちを向く。

俺の話に興味を持ったようだ。

「そうっすよ。少しばかり厄介な事になりそうだな…。」

足立、場所は「

「広場です。 瀨霊廷外の」

「それはマズイね…。虚が集まって来られたら対処できないで  
し…。 檜佐木、行こうか」

「わかりました。 足立、案内しろ。」

「こつちです」

俺は最も信頼できる心強い味方を案内する。

一秒でも早く、厄介な事になる前に  
自体が大きくなる前に

急いで瀟靈廷を出て、院生達がいる場所へと向かう。

その方角には、如月では抑えきれないであろう大きさの霊圧が暴走しているのが、此処からでも感じられる。

足立の顔が、とても不安げだ。 そんな足立が俺の方を見て口を開く。

「五席は大丈夫でしょうか・・・？」

「如月自身には問題はないだろう。 これくらいで、ぶっ倒れる様な奴を五席に任命した覚えはない。」

「随分ハツキリと言いきるね、檜佐木。」

「如月は前隊長が居た時に唯一、俺自身が任命したんスよ」

「へえ〜。。。」

隊長は興味がなさそうな返事を寄こしてくる。

しかし、内心は違うように感じられるが口には出さない。

「あれだね。」

「マズイな。。。」

徐々に近づくにつれ、霊圧が大分暴走しているのがわかる。

このままでは、虚が吸い寄せられてこないと言い切れない。 確率で言うと、虚が来る確率の方が高い。 確

「檜佐木」

「はい」

俺は隊長の方を見る。隊長はと云うと前を見たままだ。初め、綾瀬川弓親という死神を隊長にして無事に隊が運営されていくのか。正直、不安だった。だが、この表情を見て安心する。

「僕があの子をどうにかするから。 …… 大群が来てる」

もう、隊長の顔になっている。

大丈夫だ。九番隊は彼女に任せていいんだ。もう一人で気を張る必要は一切ない。

「わかりました。」

「杜真は檜佐木に従って」

「了解しました」

隊長は如月の元へと駆け寄って行く。

一方、俺たちは院生が集まる所まで急ぐ。

足立を連れて走る。

「「檜佐木副隊長っつ！！」」

この声はいつかの十一番隊の2人だ。

2人の後方には院生が不安げそくに地面に座り込んでいる。これ以上、院生を不安がらせる訳にはいかない。俺は2人をこちらに来るように手招きする。

「虚の大群が近づいてきている。 攻撃と防御に別れる。 どう

したい」

「副隊長が前線に立った方が」「院生も安心すると思うので、」「オレたちは」「防御に回ります。」「

「そうしましょう、副隊長。」「

「わかった。足立、行くぞ。」「

虚は、もう其処まで来ている。

この前、一度だけ会った少女が奏恵に抱えられている。

奏恵の表情に、いつもの様な余裕はない。

僕は2人の傍に降り立つ。

「奏恵。 檜佐木の所に行つて」

「隊長、わざわざ・・・。 申し訳ありません。 私が・・・、」

「良いから。 あっちは足りてないと思うから・・・虚が来てる。」

「わかりました。 よろしくお願いします。」「

奏恵が少女から離れて立ち上がる。

顔色は悪いが、一切ふらついたりはしない。 檜佐木の言つとおり  
の女だ。

そして、皆が居る方へと走って行った。

僕は少女に徐々に近づく。

「久しぶりだね。」「

声をかけると、少女は此方を向いた。 そして、小さく頷く。

奏恵のおかげで、大分マシになってはいるようだ。

「どうしたの？ 何かあった？」

以前会った時の様な、一年生らしい初々しさが消えてなくなっている。

すでに疲れきっているかのよう。 そんな表情。

「あ……。」

「なに？」

少女は僕の髪を見て声を出した。

僕は言いながら、彼女をそっと抱きしめる。 徐々に霊圧を逃がしていく。

「わたしが」

「うん……」

彼女自身が、逃がすコツを分かって来たのだろう。  
見る見るうちに霊圧が小さくなっていく。

「わたしが渡した……」

「これね。 君が檜佐木に渡した後、中身を見た彼はどうしたらいいか迷ってたよ。」

今は僕の髪に留まっている一羽の青き蝶。

「あ……。」

「謝る必要はないよ。 僕が付けているけど良かった？」

彼女は首をガクガクと上下に振る。



もう霊圧は安定した。

僕の腕から、彼女を解放する。そして向き合う。

「何があったの？」

「。。。。。」

今にも泣き出しそうな表情。

僕はこういう子の扱いに慣れていない。仕方がないだろう、十一番隊ではこの様な子は居ないから。

「話し相手くらいだったら僕がなるから。何かあったら九番隊まで来れば良い」

「はいっ」

一変して少女の表情が変わった。

まるで、初めて会った時の輝きを取り戻した様。わかりやすい子だ。

「キヤーン！！！！！！」

あっちの方から金切り声の様な悲鳴が。

もしかして、捌ききれれていないのだろうか。かなりの数のようだ。

「あゝあ、面倒だね。。。。。」

少女には聞こえない様に呟いてから、僕は彼女を見る。

「向こうに皆が居るから行くよ。」

「わかりました。」

素直な少女を連れて、僕は皆の元へと急いだ。

遂に虚が姿を現した。

結構な数だ。こんな大量の虚を院生は初めて見るはずだから、とても怖いだろう。

「キヤーっ！！！」

女の子が悲鳴を上げる。虚が彼女の傍まで迫っている。はやく、アレを倒さなければならぬ。

虚に襲われる者を失くしたい。

そう思ったから、俺は今までやってきた。

だからだろうか、こういう風景を見るたびに必ず思う。

虚なんて居なければいいのに、と。

しかし、俺から女の子までは距離がある。間に合わない。

「上西、伏せろ」

そこに現れたのは副隊長。女の子に迫っていた虚を斬り倒してしまった。

女の子は涙目で副隊長を見る。

「あつちに居てろ、危ないぞ」

「はいーいっ！」

上ずった声で返事をし、女の子は友達の元へとバタバタと走って行った。

怖い目にあつたと云うのに嬉しそうだ。

っというか、副隊長は院生全員の名前を覚えているのだろうか。

「足立、よそ見をするな！」

「はいっ！」

前を見ると、俺の射程距離内に虚が。

ふと思う。

どうせ、今は授業の時間だ。　こんな事に時間が取られていては院生達が可哀想だ。

「破道の三十一、赤火炮！」  
しゃつかほう

ドゴーンッ！

視界に居た虚が一気に吹っ飛び、跡形もなくなる。  
詠唱破棄でこの威力なら谷口とまではいかないが、胸を張っても良いのではないか、と自分でも思う。

「「「おおー！ー！ー！！！」」」

院生の間で歓声上がる。

まあ、調子に乗るにはまだまだ実績や経験が足りないが、良い手本にはなったと思う。

すると新たな虚がこっちに向かった。　キリがない。  
なぜ、こんなに出てくるんだ。　変だ。

「キリがない……。　響き渡つれ！」

あ、囁んだ。　まあ良いか。

「花鳥の色音!」

なんとなく、色音から文句が聞こえてきそうな気がするのだが気のせいだろうか。

刃先が二又に別れる。

左から飛び込んできた虚を、色音でぶった切る。そして、その勢いで右から飛び込んできたのを受け止める。

キーン…

いつもの音が響き渡る。

人によっては不快な音かもしれないが、俺にとっては好ましい音。

俺にとって、その音は色音の声にしか聞こえない。

音によって色音の気分が分かる。

今日はまだ機嫌が言い様だ。俺がさっき解号を噛んだにもかかわらず。

虚の動きが無くなる。

あとは俺の餌食になるだけ。邪魔だ。

「虚なんて、居なければいいのに…」

思いが言葉になる。

そして、俺の目の前に居る動けない虚を片っぱしから切り刻んでいく。

邪魔、邪魔、邪魔。

こんなのが居たばかりに、俺の親は妹は。

「杜真! しっかりと」「前を見て!」「虚が居る!」「斬らないと…っ!」

谷口の声が遠くで聞こえる。

いや、実際はそんなに離れていないはずだ。  
どういう事だ。

俺の意識はそんなに現実を離れていたとでも云うのか。  
言われた通り、前に居る虚を真つ二つに斬る。

……ああ、今日はダメだ。余計な事を考え過ぎている。  
落ち着いて周りを見ると、虚はもう居なかった。  
思わず頭を抱える。

「あゝ。今日はダメだ……」

「本当にダメだね。」

ザシユ

言葉と共に虚を斬る音が。  
隊長だ。

手には斬魄刀が握られている。虚の血に濡れたその刀が、なぜか美しく見える。

「注意が散漫している。やっぱり席官としては、まだまだ新米だね……」

「隊長……。有り難うございます」

「ここが十一番隊なら今頃死んでたよ。」

「そうですね。でも今、俺は九番隊の隊士なんでね……。」

「そして今、僕も九番隊の隊士。だから君は今、こうして僕と話してられるんだよ」

「はい。」

そうでないと今頃俺は死んでいた。

隊長は皆の居る方を見て、小さく手を振る。

そして俺を見て言った。

「皆と合流するよ。これからは気をつけないと」  
「はい」

俺は、俺の返事を聞かずに行ってしまった隊長の後を追った。

闘いに不必要な事を考えてはいけない

それが出来ないのであれば、個の感情を捨てなければならない  
次、今回の様に味方が助けしてくれるとは限らない

油断は禁物

自分の身は自分で守れ

生きて戻る事が俺たちの最終使命

大量の虚が片付けられた。

杜真のちよつとした暴走にはどうしようかと思つたが、自分で正気に戻れた様だ。

僕は羽織を脱ぎ、謝る杜真に渡す。

「隊長、本当に有り難うございました。以後気をつけます。

すみませんでした。……隊長？」

「持つてて」

不思議そうな顔で聞いてくる。

大丈夫だとは思つが、また杜真が正気を失わないとは限らない。

隊士は隊長羽織を触る機会が減多にない。

これを持たせておくことで責任を持ち、平静が失われる事はないだろう。

「檜佐木、怪我は？」

「怪我人は居ません。コイツ等はどうしましょう」

檜佐木は院生の方を見て言う。

そういえば、まだ授業中だ。すっかり忘れていた。

滑引と粗押が院生と戯れている様子を見ているだけでは、さっきまで虚が居たとも授業中の風景だとも思えない。

僕は奏恵を見る。

「どういう手筈になつてるの」

「時間がきたら、長谷川先生が来る事になつています。」



「…、はせがわ?」

誰だ。

霊術院の先生だろうか。

「え、隊長。 院を卒業してたら・・・知ってはりますよねえ?」

「いや、いきなり十一番隊に入隊したから知らない。」

「「「ええーっ!」「」」

檜佐木、奏恵、杜真が一斉に僕を見る。

そして、叫び声にも似た声が発せられた。

「何、そんなに変?」

「変?、じゃないっスよ!!」

「普通は院を卒業してますって!!」

「長谷川先生ってのは鬼道の先生ですよ!!」

別に、順番に責めたくらなくても良いじゃないか。

「僕が院で勉強している姿を想像できるのかい?」

「そんなん出来ますって!」

「真面目かどうかは不明ですがっ」

「杜真、それどういう意味や。 隊長に喧嘩売ってんのか」

「違います。 スミマセン、ゴメンナサイ。」

奏恵と杜真が自信满满そうに言った後、2人でじゃれ合いを始めた。  
仲がいい。

檜佐木はと云うと、2人とは違う考えのようだ。

「斑目も一緒っスよね・・・。 無理です」

「うん。そういう事だから」

「更木隊長以来って事になりますね」

「そうだね…。もしかしてあの…?」

向こうから歩いてきた者を見て、僕は檜佐木に問う。

会った事がない相手は名前だけでは誰の事なのかは分からない。

「そうっす。・・・長谷川さん」

「ん? 皆さんお揃いですね…。どうでしたかあ?」

長谷川と云う先生は檜佐木と奏恵を見て言う。

僕は羽織を杜真に預けているので隊長であるとは分からないらしい。まだ九番隊に隊長が就任したと云う事実は、まだ公にされていない。仕方がない事だろう。

「色々大変でしたよ。応援に来ていただいたくらいですから・・・」

「。。。」

「そうかあ…。詳しくは部屋で聞くよお」

奏恵の答えに、長谷川さんは深く追求せずに院生の方を見る。

院生は緊張が完全に解けたのか、とても煩い。

さっきまでは大人しかつたので大分大人びていると思っていたが、やはりまだまだまだ餓鬼だ。

「皆、教室に戻るよお。」

「「「「はい」」」」

院生は長谷川さんに付いて瀨霊廷へと戻っていく。

その様子を見ながら、僕は隣に立つ修兵に声をかける。

「修兵」

「なんスか？」

「僕は先に戻るけど、どうする？」

「…、如月が居るんでもう大丈夫でしょう。俺も戻ります」

「そう。奏恵！」

僕は奏恵を呼ぶと、彼女は走って来た。

修兵は杜真の所へ向かい、入れ替わるようにして彼女が僕の隣に立つ。

「何でしょう、隊長」

「僕たちは先に戻ってるから、後はよろしく」

「了解しました。隊長、わざわざ有り難うございました。私  
が不甲斐なかつたばかりに…。」

そう言う彼女に、僕から近づいて耳元で言う。

「それ、檜佐木にも言った？」

「…まだ、言っていないです」

「大事な大事な副隊長なんですよ。礼はちゃんと言わないとね」

拗ねちゃつよつと行って、僕は奏恵から離れる。

すると、奏恵は修兵の元へと走って行った。さつそく言いに行つた様だ。

修兵の顔に照れ笑いが。そして奏恵にも。

微笑ましい光景に僕の心も和らいだ。

十一番隊に居る時から思ってはいたが、九番隊に来て強く思う  
本当に彼は隊士全員から愛されている  
僕も、そのような存在になれるのだろうか

ひとり不安になる 不安を吐きだしたくなる  
それは決まって、月の美しい夜  
月だけが僕を見ている夜  
だからか、眠れないのは

己の不甲斐なさに腹が立つ  
もっと、皆を抱擁できるくらいの力が欲しい そう、まるで護廷十  
三隊の隊長達のように

とりあえず、隊長や副隊長に助けをいただいたお陰で被害は最小  
限に収まった。

怪我をした者が居なくて本当に良かったと思う。  
私たちは長谷川先生を控室である教室で待っていた。 院生を寮に  
帰してからこっちに来るらしい。

「三人とも、本当にありがとうね。」

「いえ、俺は走っただけですから」

「たかが、一年生の授業の手伝いだと」「高を括っていたのが原  
因ですかね…。」

「…否定できない」

これほど情けない事は無い。

他隊の隊士の前で失態を犯してしまった。 九番隊の株を下げかね  
ない。  
不甲斐ない。

「……。 五席大丈夫ですか？」

「何が」

私は杜真に心配される様な事を言っただろうか。

「なんか、如月五席にしてはやけに素直じゃないですか」

「はあ？ 杜真・・・、自分の上司に喧嘩売ってんのか。」

「違います。 スミマセン、ゴメンナサイ。」

なんだ、そんな事。 単に私が失態を素直に認めた事に驚いただけか。

一体、コイツは私をどんな死神だと思っているのだろうか。

最近、杜真が謝っているのをよく見る。 謝る時は早口になって頭をぺこぺこさせる。

十一番隊に居た時は謝る機会がなかったせいか、このような行動を一度も見た事がないと隊長はおっしゃっていた。なぜ、ここまでも必死になって謝る。

気になり、私は双子に小声で声をかける。 杜真には決して聴こえない様に。

「ちよつと・・・」

「「何ですか？」」

相手の声も私に合わせて小さい。

杜真はと云うと、未だに頭を下げ続けている。

「杜真つてさあ、なんでこんなに必死になって謝るの？ 十一番隊ではそんな風習でもあったの？」

「なんで、必死なのは分からないです。」「こんなに謝っている姿は初めてみるので。」「・・・十一番隊に、」「そんな風習はありませんでしたよ。」「」

「そうか……。」

この光景を見て思い出す。  
以前はこんなに必死に謝罪しているところを見た事がない。  
杜真が春の終わりに九番隊に来て、もうすぐで冬になる。  
半年はとつくに過ぎた。

秋風が吹き始めたころだろうか。こんな姿で謝るようになったのは。

「わからないもんだね……。 杜真、私はもう怒ってないから  
「はい……。」

ただ、冗談が通じにくくなってきただけなのか。 はたまた、何かに怯えているのか。  
釈然としない。  
まあ、泣きださなただけマシか。

「今日はお疲れ様あ」

長谷川先生だ。 もう院生を帰らせたようだ。  
私は椅子から立ち上がって言う。

「お疲れ様です。 あの娘は大丈夫でしたか？」

「ん？ あの娘は、授業が始まる前よりも元気いっぱいだったよ  
お。」

「「はい？」」

双子が揃って顔をクシャクシャにする。 その横で杜真の眉間にも皺が寄っている。

どう考えても不思議だ。

あんな体験をしたら疲れきってしまったているだろうに。

「気になってさつき2人で話していたのだけれど……。どうやら、自分が贈った物がちゃんと使われていたのを見て嬉しかったみたいなんだあ。」

「それって何なのですか？ 贈り物？」

杜真が不思議そうに尋ねる。

贈り物と云えば、確か隊長の就任時に何か院生から渡されたと言う出来事を思い出す。

あれは、あの娘が持って来たという事か。

「副隊長に押し付けて帰っちゃった、ってヤツですか？」

「そうだよお。その贈った物には思入れがあるらしくってえ」

「そうだったんですか。副隊長に話しておきます。」

「ありがとうねえ。あの娘も喜ぶよお」

長谷川先生は本当に嬉しそうだ。

いつまでたつても良い先生である事に変わりはないようだ。幸が薄そうだが。

「ん？ 今如月君は何て言ったあ？」

「え？」

私は何か言っただろうか。

さつきから、私はこんな事しか考えていない。

「あの娘が自分で渡しに行ったってえ？」

「はい、そうらしいですよ」



あの時の事を思い出す。  
そんなに昔の事ではない。

つい数日前の出来事。

新隊長、就任式後

さつきは、隊首印が欲しくて隊首室へと行った。今度はただ隊長に興味があるから立ち寄ってみる。運がよい事に扉が少し開いている。中から声が聞こえる。まだ2人は中に居る様だ。私は隙間から気付かれない様に、そっと覗く。

「修兵。さつき何渡されたの？」

「なんでしょうね…。」

仕事が一段落いちだんらくした様だ。

2人はソファに隣り合わせになって座っている。覗いていても何も面白くなさそうだ。

「失礼しまーっす。」

私はいきなり部屋に入った。

すると、副隊長が驚いた様子もなく、こっちを見る。

「また来たのか。今度は何だ」

普通なら隊長が声をかける。しかし、隊長不在時の習慣が取れないのだろう。

私に檜佐木副隊長が声をかけ、隊長は何かを見たまま。

「副隊長。そんな言い方は酷くないですかあ？ 私傷つきまし

た

「何言ってるんだ」

そう言つて、2人の視線は机の上の小さな箱に戻される。

「それ、何ですか？」

「わかんねえ」

「え？ それどういふことですか？ 毒ガスが入ってるかもしれ  
ないですよ。」

「それはねえだろう。」

「？」

その自身は一体どこからくるのだろう。

副隊長は私を見て話をしてきている。その横で隊長は箱を突き  
始めた。

「院の一年が持つて来たんだ」

「そうなんですかあ…。誰宛てですか？」

「それがさあ、檜佐木に押し付けて帰っちゃったんだー。その  
子」

そう言う隊長の声は、心なしか面白くなさそう。

「副隊長。相変わらずの人気っぷり、惚れ惚れしますわー」

「おい、途中から棒読みにすんな」

「隊長。開けましようよっ！」

「えー、ヤダ。檜佐木宛ての贈り物を僕が開けるなんて無粋だ  
よ」

さっきまで、それを突いていたのは何処の誰だ。

でも、それは口には出さない。

この人はどこまで冗談が通じるのかが、まだ私にはわからない。

「って事で檜佐木。 さっさと開けてよ」

「そうですよ。 私も気になります」

「わかったよ・・・」

渋々といった表情で副隊長は箱を慎重に開ける。

中に何が入っているのかは分からない。

性格なのだろうか。 とても丁寧に包装を解いて箱が開けられた。

三人で中を覗き込む。

「何だ？」

「蝶だね」

「いや、それは分かってんすけど…。 これはどう見ても」

2人の会話に私は割り込む。

そして箱に手を伸ばした。

「出しますよ。 ……綺麗」

思わず呟いてしまった。

中に入れられていたのは、青く美しい蝶の髪飾り。

「副隊長。 何か手紙とかはないんですか？」

「んなもんは無かった」

「無い訳がないでしょう。 どう考えても副隊長に女物の髪飾りは不要ですよ！！ 誰かと間違えられてますって！！！」

「俺が誰かに間違われる事はねえよ。 俺が霊術院で教えてる院生だぞっ」

「案外、教師の名前つてのは生徒は覚えてへんもんですつて！」

「俺はちゃんと覚えていた」

「それは優等生の言葉ですよ。副隊長は、どうせそこまでやったくせに」

「はあ？俺は卒業時には将来、席官入りは確実って言われてた程だ」

「それ自分でよう言わはりますねえ。」

「事実を言っただけだ」

「うわー。ちよっと憎たらしい」

「如月」

「きゃー、怒らんとってください。檜佐木修兵副隊長！！」

「君たち…。仲が良いんだね……………」

突然、私たちの会話を遮った隊長の声。就任式の時より、心なしか低い。

どこか淋しげで、儚げで、悲しそう。

そんな隊長のちよっとした変化に副隊長は逸早く気付き、対処する。

「綾瀬川隊長」

副隊長が名前を付けて隊長を呼ぶ。それは、まるで教え込むように。

今の隊長に対して呼んでいるのは初めて聞いた。

「これ、持っていてください。本人に真意を聞いてくるまで」

そう言っつて隊長の髪に蝶が留まる。

漆黒の髪に青き蝶が美しい。斬魄刀の色にとても合っている。

「わかったよ」

隊長の声音が元に戻った。  
気難しい方なのかと思っていた。だが、案外分かりやすい方なの  
かもしれない。

私がおんな事を口にするのは失礼になるが、隊長は可愛らしい  
まるで、無垢な乙女のように  
これから、この方は九番隊の隊士全員を虜にしようだろうま  
るで、私や副隊長の様に  
出会って数時間しか経過していない  
でも、もうすでに貴女の魅力に釘付け  
私たちを捕えて離れない

その時の様子を如月五席が掻い摘んで話して下さい。

他隊の隊士であるオレたちにも、その時の情景がまるで目に浮かぶようだ。

朝、弓親五席・・・弓親隊長に、久しぶりにあった。

その時、とても幸せそうに笑っていたのは、どうやらこれらが理由らしい。

「そうだったのですかあ。あの娘こにしては行動しましたねえ」

「どういうことですか？」

弓親隊長はあの事件以来、全く姿を見せず。また、見たと思えば疲れ切った表情で再び姿を消した。

宮田の事を引きずっていた様だったので心配していたが、もう大丈夫のようだ。

十一番隊に戻ったら、圭角にも教えてやらないといけない。

「あの娘は引つ込み事案な所があつてなあ。滅多な事がない限り、自分から行動したりしない娘なんだよお。」

「よつぽど、あの蝶に何か思う事があるつて事ですかね」

「そうだろうねえ…。あと、檜佐木副隊長にも懂れているみたいだからかなあ。」

「やっぱり此処にも居ましたか。副隊長のファン」

そう言えば、さつき長谷川先生は弓親隊長に対して何も言わなかった。

普通、その場に隊長が居れば隊長と話すだろう。しかし、先生は

檜佐木副隊長と話していた。

一体どういうことだろう。

滑引がオレに話しかけてきた。そして、2人で小声で話す。

「粗押？ 考え過ぎじゃない？」

「滑引。 そうだね。」

いつでもどこでも以心伝心。

お互いの考えを声にする事は少ない。

「分からない事は・・・」「直接聞くっ！」

オレたちの会話は他の三人には聴こえていないようだ。ずっと会話が続けている。

「此処にも？」

「そう、此処にも。 表立っては無いけど、護廷内にファンはウジャウジャ居るで。」

「そうだったんですか!？」

「そうやし。 主に副隊長がひとりで隊を切り盛りしていた間に入隊してきた子ってのは皆そうやし。」

「だから副隊長に対して何があっても悪口が聞こえる事は無い。

そして、副隊長の決定に逆らったりしない。」

「そういう事」

「って事はあの時もですか？ た」

「杜真っ!」

いきなり如月五席が杜真を止めた。

恐らく杜真は“隊長”と言おうとしたのだろう。 ますます気になる。



「ん？ 何かあるのお？」  
「いえ、何もありませんよ」

長谷川先生の問いに、いきなり如月五席が標準語になる。　ますます怪しい。

「で、今日の出来事を順序追って説明しますと・・・」

如月五席は何事もなかったかのように、長谷川先生に授業にあった事を話します。

その間、オレは杜真を引き寄せてオレと滑引との間に立たせる。

「・・・何さ？」

「気になってる」「事があるんだけど。」「どうして、さつきみたいに」「隊長について隠しているの？」

「いや。隊長就任はまだ公にされてないだけなんだけど・・・」

「「なんだけど？」」

「その事を瀨霊廷通信に大々的に特集を組むらしくって・・・。如月五席が中心になってね。」

「それに隊長と副隊長は」「協力しているって事？」

「俺は協力させられてるけど、2人は違うと思う。」「

「じゃあ、さつきのは」「一体何だっけって言うのさ」「

「さつき？」

「先生が隊長じゃなくて」「副隊長と話していたじゃないか」

「ああ。それは俺が羽織を預かってたから、隊長は羽織を羽織ってなかったからね。先生は気付かなかっただけだと思うよ。」

・隊長もそんな事を気にするような方じゃないから

「そっかー。」「って、杜真。」

杜真の手には白い羽織が。  
その背には“九”の文字。 九番隊の隊長のみが羽織ることを許されている物。

「手にしているのは」「何かな？」

「あーっ！ すっかり忘れてた！！」

杜真が叫ぶ。

話が終わったのか2人の注目がこっちに向く。

「ん？ どうしたのお？」

「謝ったり、叫んだり。 忙しいヤツチャなあ」

「何でもないです！」

杜真が必死に、背に羽織を隠して否定する。

今日だけで、十一番隊時代には見る事が出来なかった杜真の色々な表情を見る事が出来た。

「もう・・・おつきい声出すな。 先生、次はどうしましょう？」

「明日も来てほしいんだけどお…。」

先生は少し遠慮がちに言う。

「私は構いませんよ。 杜真、大丈夫やんなあ？」

「俺は大丈夫です。 滑引と粗押は？」

「「だいじょーぶですっつー！！」「」

先生の顔が一気に変わる。

とても嬉しそう。

「それじゃあ、明日も同じ時間に同じ場所ですよろしく」  
「了解しました。それじゃあ、解散！」

如月五席によって解散が告げられる。

杜真は瞬歩で去って行った。羽織を逸早く届けた方がいいから、賢明な行動だろう。

オレたちも、すぐに十一番隊に戻る。帰ったらすぐに圭角に自慢してやろう。

如月五席に協力する形で。

弓親五席は元気そうだったよ、っと。

これにて本日は解散

また明日、学校で会いましょう

明日に備えて今日は休む。　そう決めて隊舎に戻って来たのに…。

「如月五席。　さっき谷口には口止めしておきましたから」

「ああ、おおきに」

すっかり忘れていた。

今回、瀨霊廷通信は私が主導。

そして今回限り、編集長は九番隊の三席。　白雲航平になっている。

これは、隊士総出で条件付きではあるが、副隊長を言いくるめたのだ（ちなみに、隊長は副隊長にこの事については丸投げするつもりらしい）。

その条件の一つが期限内に原稿を仕上げなければ副隊長の確認が入るのだ。

そうなったら元も子もない。　計画が台無しだ。

「五席、まさか・・・」

「そのまさかやで。　まだ原稿が仕上がってへん」

「手伝いましょうか？」

「そーやな、手伝って。　こっこの部屋に写真があるから・・・」

私は杜真を連れて資料室に入る。

只今、この部屋に隊長と副隊長の出入りする事は禁止。　だってバシたら台無しやん。

中には白雲航平三席が。

「三席、戻ってまいりました。　順調ですか？」

「御苦労さま。君以外の原稿はもう仕上がってるよ」

「嘘やー。」

「本当だからね」

「急ぎます。杜真、その箱取ってー」

「これですね？」

無駄に広く、ほこり臭いこの部屋から一刻も早く脱出したい。その為にも原稿を、ちゃっっちゃと仕上げてしまいたい。

「おおきに。えーつと・・・。」

筆を一気に走らせる。

頭の中に原稿は既に出て上がっている。しかし、それを文面にするのが面倒くさい。

「杜真、この中から好きなんを5枚程選んで」

「はい・・・」

私は手元にあつた箱を杜真の方へと押しやり、写真を選ばせる。どれも隊長と誰かが写っている。

いつ撮ったのかが分からない様な写真も沢山ある。果たして杜真のセンスはどのようなものだろうか。

「三席、書き終わりました。修正お願いします」

「じゃあ、君はこっちの目に通してくれるかな？」

「わかりました。」

いつも通りの連載に目を通す。どれも問題はなさそうだ。

今回は日番谷隊長の連載が再開される号でもあるので、読者の期待は大きい。そして、作り手の気合いも十分だ。

いつもより少し分厚くなりそうだ。

「コレが良いです」

そう言つて杜真が差し出してきたのは、きつちり5枚。

月光の下、副隊長に羽織を手渡されている隊長。

振り返りざまの笑顔の隊長。

修練場で皆をみる隊長。

白雲三席と副隊長の間に立つて歩く隊長。

副隊長の肩にもたれて眠る隊長。

なんか、私の好みと似ているのは気のせいだろうか。

ちなみに、これらは全て盗撮。

こんな写真、正々堂々と撮つた日には、一体どうなるかは想像できない。てか、想像はしない方向で。

「大丈夫だよ。原稿も、写真も問題ない。ところで、表紙はどれにする？」

「…三席、さすがに表紙はマズくないですか？」

「そうですね。後々どうなつても私は知りませんよ。」

楽しそうな三席とは対照的に、私と杜真は顔を歪ませる。

「そう言っているけれども君たち、本当は表紙にしたいんじゃない？」

「まあ折角やしなあ……。杜真？」

「如月五席。俺に振らないで下さいよっ！」

トントントン

誰かが来た。

こんな時間に誰かが来るなんてのは珍しい。

「どうぞ」

白雲三席が言うと同時に、杜真は扉を開けに行く。

「千田四席！」

「足立君。何ですか、その意外そうな表情は」

「いいえ、何でもありません」

「そう。奏恵」

もう興味を失くしたかのような目で杜真を一瞥してから、九番隊の四席は私を見る。

「コレが混ざっていました。どうかしてきなさい」

そう言われて渡されたのは十一番隊の書類。

またかよつという言葉を、私は寸での所で飲み込む。この人の極度の十一番隊嫌いは本当に直らない。

「姐<sup>ねえ</sup>さん。いい加減自分で行かはったらよろしいやん」

「わたくしは、あのような所へは決して参りませんわ」

「そんな事言わんと」。なあ、杜真？

「だから、俺に振らないで下さいー」。

杜真が本当に困っているようなので、私は再び千田姐さんに視線を戻す。

何があっても十一番隊には行きたくないようだ。

「今日、任務で一緒やった2人は良い子でしたよ。十一番隊に

もそんな子が居るんで」

「奏恵が言っている事が仮に真実であるとしてもしょう。ですが、そのような子はあの荒れくれ集団のほんの一握りです。他は訳のわからない輩やかいばかりでしょう。」

「そうかもしれませんが…。」

白雲三席は呆れた表情でこちらを見ている。

杜真はというと、私たちの会話の意味が分からないのだろう。キョトンとしている。

「兎に角、奏恵が言っただけなら良いのです。さあ、お行き！」  
「姐さんっ！！！」

本当に好き嫌いが激しい方だ。

そこまで十一番隊が嫌いだと言っておきながら、なんだかんだ言っただけで杜真を大事にしている。

出会った当初はこんな事を言うような方では無かった。

仕方がない。行くか。

「しゃーないですね。行ってきます」

「とっとお行きなさい」

「はい」

私は姐さんに押し付けられた書類を持って、しびしび十一番隊へと向かった。



如月五席が仕方がなくと云った様子でここを出て行った。

千田四席は資料を物色している。

白雲三席が俺を見る。そして手招きをするので、そっちに寄った。

「よく覚えておいて。今の千田はとても機嫌が悪いから」

「どうしてですか？」

「十一番隊絡みの事になると、目に見えるくらい不機嫌になるんだ。だから、こういう時の彼女には気を付けて」

「わかりました・・・」

「自分から話しかけない方が身のためだよ」

小声でやり取りをする。

結構、恐ろしい情報だ。忘れないようにしなければ...

「三席。失礼しました。」

「お疲れ様」

四席はそう言うと、さっさと出て行ってしまった。

三席はそれを確認すると、元の声量で話の続きを話した。

「あの状態の彼女とまともに話せるのは如月くらいだから」

「? どうしてですか??」

「千田にとって彼女はの可愛い可愛い義妹いせむとだから。そして、如月も千田の事を十分に理解して、どこまで言っただけが良いかが分かっているから。」

「そうだったんですか...。本当の姉妹なんですか？」

「違うよ。如月の二番目？のお兄さんが千田の所へ婿養子にね。」

「はあ…。」

如月五席は中流貴族の出一（本人曰く、中の上）。そして、千田四席は上流貴族の出だ（五席曰く、上の下）。

九番隊にやって来て半年以上が経過するが、知らない事が多い。

九番隊の隊士になりきれれていないと云う事だろうか？ でも十一番隊についてもそんなに知らないしなあ…。

まだ、九番隊についての方がよく知っている。

ならば、その知識を広げるしかない。

「そういえば…さつき、五席が四席の事を千田姐さんって呼んでませんでしたか？」

「そうだね」

「そんなに仲がいいのであれば名前でも良さそうなの？」

「それは分からないよ。今度、如月に聞いてごらん」

「はい」

白雲三席は窓の外を見る。

いつの間にか日が完全に暮れてしまっているのに気がついた。

「明日もあるの？ 授業」

「あります。今日と同じような事が起こらなければいいのですが…。」

「聞いたよ、その話。お疲れ様。今日はゆっくり休んで」

「有り難うございます。三席は…？」

「後少しだから。今週中に配ってしまいたいからね、その時に手伝ってもらおうかな」

そう言いながら、最新号の通信を指さす。

「では、お言葉に甘えて」

「明日も頑張ってるね」

「はい」

俺は資料室を出て自室へと戻る。

千田四席が十一番隊嫌いだと言う事は知っていた。

しかし、あれほどまで嫌っているとは思ひもしなかった。

一体、過去に何があったと云うのだろう。

どうにかして、好きとまではいかななくても良いが、嫌いではないと言ってもらいたい。

それは俺が十一番隊出身だから思いつく勝手な考えだろうか。

兎に角、何処の隊とも仲良くやっていけることが理想だと思う。

変な偏見に囚われずに

資料室を出て、まっすぐ十一番隊へと向かう。

私は姐さんと比べれば、十一番隊に対しての嫌悪はない。でも、十一番隊の隊士が九番隊の隊士を嫌悪している限り、十一番隊の隊舎に赴くのは気が滅入る。ちやつちやと用事を済ませて帰ってしまおう。

寄り途をせずに十一番隊の門をくぐり、一目散に隊首室へと向かう。

ここの隊首室には基本、隊長は居られない。大体、外に出て行っているからだ。

誰かいるなら、それは斑目三席だと隊長が以前仰おっしやっていた。

トントントン

扉を叩くが、返事がない。

霊圧を感じるので誰かが中に居るはずなのだが…

「九番隊の如月です。ここの書類が混ざっていたんで持ってきました」

「入れ」

すると中から返事が返ってきた。

その声は、十一番隊事実上の？、斑目三席だろうか。中に入る。

「失礼します、コレです」

「ありがとうございます。其処に置いてくれ」

間違いない斑目三席。目元の朱が鮮やかだ。私は言われたおりに書類を机の上に置く。すると、斑目三席は私を見て言う。

「今日はアイツらは役に立ったか？」

アイツら、とは恐らく双子の事だろう。

「はい、とても。彼らのおかげで大分助かりました」

「そうか。明日もアイツらをよろしく頼む」

「わかりました。任せて下さい。」

私がそう言つと、斑目三席は再び書類へと意識を戻す。

短い会話。

この程度だ。他隊との接点を持つのは。

でも以前ならこんな会話、九番隊と十一番隊の間では無かった。

する気にもならなかった。

それは、杜真が九番隊に来た事や隊長の就任が大きな要因になっているに違いない。

「失礼しました」

私は軽く頭を下げて部屋を退出する。

三席以外の隊士と出会うと、喧嘩を売られかねない。面倒な事は避けたい。

私は急いで九番隊へと戻った。

九番隊に新たな隊長が就任した。

まだ、隊長が就任したと云う事実は公にされていない。

なのにも関わらず、九番隊と十一番隊の上位席官同士の間で互いに対する偏見、嫌悪は小さくなってきている。

たった一人、千田姐さんだけを除いて。

私は姐さんを尊敬したい。

でも姐さんが十一番隊に対する偏見や個人的感情をを仕事に持ち込んでいる以上、私は彼女を尊敬する事は出来ない。

悲しい事だが、永遠に

同じ事が二度起こらないとは限らない  
いつ何時でも、心して挑まなければならぬ  
自分の力を過信したりなどはせずに

此処は九番隊の隊舎にある食堂。

そして今、まだ皆は起きてこない時間帯。

「おはようございます」

「おはよう、杜真。早いなあ」

「五席こそ。てっきり俺が一番かと思っていたのに」

「それは堪忍え」

今日は、昨日よりも早く院へ行く。

普段の授業風景を見てから、自分たちの授業に望みたいのだ。

「院生ってこんなに朝早くから勉強すんの？」

「これくらいですよ。」

「私の時はもっと早かったような違うような…」

「覚えてないんじゃないですか」

「しゃーないやん。卒業して何年たったかも忘れてしまったのに、

そんなん覚えてる方が変やわ」

「そうですね。はぁ・・・」

杜真が少し疲れているような表情をしている。  
それを見て、奏恵は緑茶を勧める。

「もしかして寝不足とか言わんとってや」

「大丈夫ですよ。」

「そう。あの二人はちゃんと起きてるやろなあ？」

「どうでしょう…。十一番隊の朝は人それぞれですから」  
「？」

奏恵には杜真が言っている意味がわからない。

九番隊では、だいたい皆は同じ時間に行動し出す。

「朝から鍛練している者は早起きですけど、寝ている者も多いですから」

「そうなんや。隊によって色々なんやなあ」

「そうですね、俺も此処に来て色々な違いを知りました」

「たとえば？」

杜真は十一番隊から九番隊へと異動してきた。

しかし、奏恵はずっと九番隊にいる隊士だ。なので他隊について余り詳しくない。

「一日で捌く書類の量が全然違うんです。あっちでは隊長と副隊長がそういう仕事を全くなさらないので他隊よりも少なめです。」

「だから三席に丸投げなんやあ。昨日も一人で仕事してはるみたいで大変そうやったで」

「そうですね…。以前なら」

「隊長は九番隊に嫁いで来たさかいなあ」



なので今、十一番隊へ廻るはずの一部の書類が他隊へと委託されているのが現状だ。

このままでは十一番隊空中分解もありえる。

「ほな、行こか。もう院は開いてるやろ」

「そうですね。必ず朝がやたらめつたら早い先生が居るはずなので」

2人は皆を起こさない様に食堂を出る。

此処の所、九番隊の隊士は部屋に籠りつきりで文章と向き合っているので疲れ気味だ。起こすわけにはいかない。

「杜真」

「何ですか？」

食堂を出てしばらくして、奏恵は自分の後ろを歩く杜真を振り返る。そして、少し眉を顰めて杜真に言う。

「私以外に誰かと会った？」

「いえ、会ってないですけど。どうかしましたか？」

「誰か九番隊の芥子畑に居るんやけど…」

「こんな朝早くにですか？」

「うん。此処からやと、ちょっと遠すぎて誰かはわからへん」

「行ってみましようか」

「そやな」

2人は霊術院へと向けていた足を逆方向へと向ける。

芥子畑に到着するまで、2人は黙ったまま歩いて行った。

芥子が満開の時期を終えてしまった。今は花のない姿で風に揺れているだけだ。  
その中に人影が。  
朝日を漆黒の髪が反射している。

「隊長？」

奏恵が弓親に声をかける。  
すると、弓親は2人の方に振りかえった。

「どうされたのですか」

奏恵は恐る恐る尋ねるが、弓親からの返事は無い。  
心ここにあらずといった様だ。  
奏恵と杜真の方を見ている。しかし、その瞳は2人をしっかりと捕えていない。  
そして、いきなり膝から崩れた。

「隊長つつ」

奏恵と杜真は思わず叫んで駆け寄る。  
そうしてやっと、弓親は2人を見た。そして弱弱しく口だけで笑む。

「こんな時間に2人でどうしたの」  
「どうしたのじゃないですよ。隊長、どうしたんですか？」

いつもより青い顔の弓親を、覗き込むようにして、奏恵は見る。

「ちょっとね。」

「ちょっと、って……。」

杜真は心配そうに弓親を見ている。その目が心なしか濡れている。そして、聞こえるか聞こえないかの声量で話します。

「隊長がすっかりしてもらわないと困ります。でないと、俺たちは道しるべを失う事になるんですからっつっつっ！……！」

言い終わる頃にはいつも通りの声量に戻り、目には力強い光が。

「悪いね、奏恵。ごめんね、杜真。」

弓親はそう言っていると、ふらふらと立ち上がる。

「院に朝から行くんだったよね。引き留めちゃって悪いね」

「いいえ、問題ありません。隊長、大丈夫ですか？」

「大丈夫。ちゃんと帰るから、眠たいだけだから」

「お願いしますよ。私、隊長の事好きなんです」

奏恵がそう言っていると、弓親は笑って2人を立たせる。

「行つてらっしゃい。帰って来るの、待ってるから」

「行つてまいります」

気合い十分に2人は九番隊隊舎を後にし、院へと向かって行った。なぜ、弓親がああ場にいたのか知らないまま。

花が咲いていない花畑ほど、見ていて虚むなしいものは無い

思いもしていなかった。まさか、誰かと会うなんて。  
2人とも不安そうな表情をしていた。  
悪い事をした。

僕は2人が隊舎を出て行ったのを確認してから隊首室へと戻る。  
朝早いので大丈夫かとは思ったのだが、あの2人の様に起きている者がいないとは限らない。兎に角、誰にも会いたくなかったので窓から部屋に入った。  
殺風景な部屋。

此処の前の主の物は全て運び出したのだろう。そして、僕の荷物も此処には置いていない。

2人で仕事をするには狭い部屋。

1人でするには広すぎる部屋。

どうにかならないものだろうか。僕が意味もなく焦燥に駆られるのは、この所為でもあるだろう。

何をするわけでもなくソファに座る。

隊長用に椅子が用意されてはいるが、なぜだかそこに座る気にはなれない。

カチャ

扉が静かに開けられる。

「修兵、おはよう」

思った通り、入って来たのは彼だった。

逆光になっている所為か、僕が誰なのかはすぐには分からないらしい。

「隊長？」

こんな時間から此処に来るのだから目は覚めきっているものだと思っていた。

しかし、修兵の声はまだ眠たそう。

「こんな時間からどうされましたか？」

「修兵こそ。いつもこの時間？」

「違うっすよ。俺は隊長の霊圧が妙に揺れていたのが気になったから来たんすよ。」

「え」

予想外の答えに僕は驚く。

てつきり、仕事をする為に起きたのだと思っていた。まさか僕が理由だなんて。

「何そんなに驚いてんすか」

「いや、僕が理由だなんて思いもしなかったから。前の隊長の時もそうだったの？」

「そうだったが、これまでではなかった。・・・妙に気になるものは仕方がないでしょ」

一体、僕の目の前にいる彼はどれくらい敏感に他人の霊圧を感じ取ることが出来るのだろうか。

これだけの感度を持つ者は隊長格でも数少ないだろう。

「最近は何も起きていますか？」

「ん？ 全然」

「一回、卯ノ花隊長に診察してもらったらどうですか」

「四番隊の隊舎、好きじゃない」

正確には僕が好きじゃないのではないが、好んではない。

「隊長って変なところが十一番隊の部分が残ってますよね」

「変って何さ。・・・僕が死神として育ったのは十一番隊なんだから当然だよ」

僕がこういうと、修兵は納得したようだ。

ずっと立ったままなのが疲れたのか、僕の向かい側に腰を下ろす。

「隊長。隊長の霊圧が極度に揺れる時は、いつなのか分かりますよね？」

修兵は僕が当然分かっていると期待して確認しているようだが、残念ながら僕の答えは違う。

「さあ、いつだろう」

「さあ・・・って。これから気を付けた方がいいと思うんて言いますよ」

僕がその事について無頓着なのを見越していたようだ。

「色々揺れている時はあるんですけど、一番揺れるのは貴女が芥子畑に居る時です。」

「ああ。だから、さつきもか…。」

「そうっすよ。何かしてるんスか？」

「何もしてないけど…。」

修兵は僕の答えに不満なようだ。

あからさまに不機嫌な顔つきになって僕を正面から見る。

「じゃあ、何をしに行ってるんスか」

「ただ立っているだけだよ。あのこたちが僕を呼んでいる気がするから行っているだけ」

「呼んでる…。」

「でも、あそこに行くたびに倒れそうになるんだよね」

「あ…。」

そうやって修兵は考え込んでしまった。

僕にとって、こういう考え事は専門外だ。

「行ってみましょうか」

「そっだね」

此処は大人しく彼に任せただ方が良い。

とりあえず隊長を連れてきたが、傍から見ているだけでは今のところ何の変化もない。

冷たい風にあおられて、ただ揺れるだけの芥子。

「隊長、朝居たのはココっスか」

「違う。あっち」

隊長が指さした方へと向かう。

たしか、そこは雛罌粟ひなげしが自生していた場所だ。

あの場にある雛罌粟は、前隊長が九番隊を出て行ってからは一度も咲いていない。

「朝になったら呼ぶんだ」

「朝だけ…？」

「そう、朝だけ。今は何も言ってこない」

以前にもこういう事があった。

“朝になったら呼ばれる”と言って冬の朝だけ出て行く。

冬の間、毎日行っていれば次の春に開花する。

もし行かなければ、春になっても咲かない。

これは隊長が行かないといけないうらしく、他の隊士が行っても無駄だった。

これが理由なら納得するしかない。

問題はない。後は倒れたりして、怪我なんかをしない様に注意してもらった方が良さそうだ。



「朝だけなら問題ないつよ。 毎日行けば春に開花しますよ」

「何それ」

「以前からありましたから」

「・・・修兵が行けば」

隊長は本当に面倒くさそうに言う。

「俺じゃあダメですよ。 隊長が雛罌粟に“呼ばれる”って事は、隊長として“認められている”って事ですから」

どの隊でも隊花が植えられている。

隊花によって様々だが、時期になると隊長と認めた者から霊圧を拝借したりして花を付ける。

しかし、隊花である白芥子はこういう事をせずに、雛罌粟がそういう咲き方をする。

「ああ、そういうえば更木隊長も花にね」

「そうなんスか？」

「そう。 ある時期になると夜中にそとに出て会話していたんだ。 …印象と大分違うから、初めてみた時は驚いたけれどね」

思い出すように遠くの空を見て話す。

「そうしたらさ、綺麗な赤に近い色の花を咲かせるんだよ」

「そうだったんですか。」

「人目につかない所で咲いているものだから、皆は気がついてなかったけどね。 まあ、あのむさ苦しい隊で花を愛でようなんて考えはないからね…。」

「コイツ等も綺麗に咲きますよ。 皆声には出していませんが、楽しみにしているみたいですから」

「知らなかったなあ…。しよつがない」

そう言っつて、隊長は嬉しそつに笑みながら雛罌粟を見る。

「呼ばれる限りは来るよ」

すると、風に揺られたせいか、雛罌粟も笑つたよつな気がした。

院に着いたのは良いが、これからどうしようか。

ちよつと来るのが早すぎたようだ。

院特有の煩さがなく、嘘のように静かだ。誰もいない。

「五席、どうしましょうか」

「そやなあ」

「おっはようございます!!」「」

突然聞こえてきた元気な声に驚きつつも、私は声が出た方を向く。  
そこには十一番隊の双子が。

「おはよう。元気やなあ」

「朝から体を動かしてきたので」「元気いっぱいですよ!」

「・・・そうなん」

そう言う2人は手ぬぐいを首に巻いている。走り込んできたよう  
だ。

冷たい風が体に吹き付ける。

にも関わらず、双子は死覇装の袖を捲まくっている。

「「寒くいつ」」

「当たり前だろっ!!!」

汗が蒸発してきて冷えて来たのだろう。

そして、杜真と戯れ始めた。これで少しはマシになるのではない  
だろうか。

「ん？ 今日はずいねえ」  
「ギヤァァ」

何処からともなく現れたのは、今日も朝から幸が薄そうなが長谷川先生。

「だからさあ。 叫ばないでよあ」

「ごめんなさい。 先生」

「いいよあ。 どうしたのあ？」

「授業風景を見してもらいたいんですよ」

私は双子と先生の間割り込んで言う。

すると、杜真は双子を引きはがしてくれた。

「そうなんだあ。 早すぎたんじゃなかなあ？」

「私の時はこのくらいの時間でしたって」

「そうだったねえ。 あれから多くの事が変わってしまったよあ。

こつちに付いて来てえ」

「はい」

「わかりました」

「お邪魔します」

やっと、寒い外から逃げる事が出来た。

決して温かいとは言えない控室にあてられた教室へと、私たちは案内された。

まだ、登校時間ではないらしい。 長谷川先生以外の先生方もまだ来ていない。

なので時間まで部屋で大人しくする。

私は棚にあった教科書を、おもむろに取って開く。

「杜真。」

私の横に立つ杜真に教科書を見せながら言う。

「教科書って一緒なん？ 変わってない？」

「・・・同じですよ。俺たちが卒業したのは、この前ですから」

「そっかー」

「もしかして、五席時代の時と」「内容が変わっているのですか？」

双子が、教室の端からこつちに向かってきながら言う。  
言葉に棘があるように聞こえるのは気のせいだろうか。

「全然ちゃうし。だいたい、これ薄い」

私は教科書をめくりながら言う。

当然、内容大幅に異なっている。読んでいて、つまらない本になつてしまったものだ。

このせいで、院生の出来が悪いのではないだろうか。

「如月五席って」「何年前に卒業したんですか？」

「うるさい、お黙り。」

私が言うと双子は素直に大人しくなった。

やっぱり、さっきの言葉にはこういう意味が含まれていたか。  
素直なところは可愛いが、腹立たしい事に変わりはない。

なんか、外が騒がしくなってきた。

朝から元気なものだ。

「時間みたいですね」

「そうやなあ。授業が始まって少ししたら教室に行こか」  
「そうですね」

窓の外から見える風景は、私の時と一切変わらない。

やっと授業が始まったようだ。

時計を見てみると、いつも仕事を始めている時間だ。いつも通りの時間の起床でも間に合ったじゃないか。

教室が少し見えた所で、如月五席がこつちを見て言う。

「誰にも気付かれんように」

「「「わかりました」」」

俺たちは声を合わせて答える。

今は長谷川先生の授業のようだ。

長谷川先生にも気付かれない様に入る事が出来れば最も良い。

「バラバラに入って行こか。私の次は杜真」

「わかりました」

そう言ってから五席が教室へ入って行った。

気付かれていないようだ。

生徒に紛れて一番後ろの座席に座る。そして、俺を見て手招きする。

「入るよ」

「「行つてらっしゃーい」」

俺も入る。

そしてすぐに五席の横に座る。そうしないと院生の制服は白いので、死覇装の黒は目立ってしまう。

谷口を見ると、すぐに入ってきて来た。  
ひとまず作戦は成功だ。

「……これがね、こうなってるねえ。」

長谷川先生は俺たちに気づいていないのだろう。 授業を進めてい  
る。

「上西、答えてみてえ。」

「はい」

先生に示された問題を解く為に黒板の前に、上西と呼ばれた女の子  
が立つ。

たしか昨日、副隊長に助けられていた女の子だ。

女の子は苦心しながらも、答えを書いて自分の席に座る。そして、  
それに先生が丸を付ける。

俺たちの時と変わらない授業だ。

「じゃあ、次。君」

先生が次の子を当てる。

白いあの娘だ。 思い返すと、まだあの娘の名前を俺たちは知らない。  
い。

彼女が呼ばれて前に出て行くと、先生は見て分かる程遠のいた。  
こんな事をする先生を初めてみた。

ふと如月五席を見ると、何やら考え込んでいるようだ。

俺の視線に気がついたのか、五席と目があつた。



後に引き続いて来た三人は私の隣に座る。出来るだけ目立たない様に教室の端の机に。

授業風景を観察する。

授業のやり方は変わってはいはない。

でも、教室の雰囲気は全く異なる。

例のあの娘が指名される。

彼女が黒板に近づく。すると、先生は生徒から飛びのくようにして離れた。

どういう事だ。

だいたい、先生が彼女の事を名で呼んでいるところを見た事がない。杜真と目があった。

私と同じように、杜真も不審に感じているようだ。

どう考えても、長谷川先生は彼女を敬遠している。

教師としてあるまじき行為だ。生徒を差別しているようにしか見えない。

これは問題だろう。

ひとまず外へ出よう。私は横に座る杜真に耳打ちする。

「出るで。気付かれんといてや」

「了解です」

杜真が双子に伝えている間に私は教室を出る。

そして、教室の後ろの扉から中を覗く。

まだあの娘が黒板の前に立たされている。

さっきの女の子と似たような答えを黒板に書いているにも関わらず、あの娘は先生に怒られているようだ。

次の瞬間、あの娘は長谷川先生に叩きとばされた。

立ち上がるうとすると、肩を押さえて立ち上がらせない。よく見ると、叩かれた頬は赤く腫れている。

どう考えても理不尽だ。

三人が出てきた。先生には気付かれ無かったようだ。教室の前で話していると目立つので、控室に宛がわれた教室へと戻りながら小声で話す。

「私は一旦、隊舎に戻るけど。 どうする？」

「皆が居なくなったら不信がられますしね。」

「オレたち三人は」「残りますよ。」「もし理由を聞かれた時の」「言い訳はどうしましょう？」

私は教室の扉を開けながら考える。

「どうしよか。出来るだけ事実に基づいた方が良いやろうし」

「それならば、通信の編集ってことにすれば……」

杜真は、双子が教室に入った事を確認してから扉を閉める。

「そうやな。聞かれたら杜真が“五席は三席に呼ばれて隊舎に戻りました”とか言っといて」

「了解です。通信、昨日の段階ではまだ終わってないみたいでしたから」

「「嘘にはならない」「」

「んじゃ、余計な事は話さんこと。推測だけで物事を語ったらアカンよ。 ややこしなるから」

それだけ言っつて、私は教室を出る。そして九番隊へと戻る。

普通なら護廷の死神が院のやり方について口を出したりはしない。しかし、さっき見た光景は問題がある。

黙ってなどいられない  
いじめているのは、生徒ではなく  
教師の方ではないか

九番隊へと走る。

別に今、私が急ぐ必要はないだろうと思う。しかし、あの娘を放つておくのは可哀想だ。とてもじゃないが、見ていられない。

トントントン

思っていたよりも隊舎は院から近い気がする。あるいは、私の脚力がまた上がったのか。

「どうした」

「如月です。」

「入れ」

中から聴こえたのは副隊長の声。　　まただ。

どうやら、隊長は副隊長と一緒にいる時は返事をするつもりはないらしい。

私はとりあえず中に入る。

「副隊長。　　長谷川先生について気になる事が・・・」

私が此処まで言うと、副隊長は“やっぱり”と云った表情になった。ちなみに隊長はというと、副隊長にもたれて眠っている。だから隊長は返事が出来ないのか・・・ってか、なぜ今寝ている。

「隊長は、夜眠れないらしい。」

「え？」

私はそんなに不思議そうな顔をしていたのだろうか。  
まあ、何にしる副隊長に隠し事をしようなんて私にはできない。  
必ず見破られてしまう。

「月が綺麗な夜はずっと起きているらしい」

「そうだったんですか・・・」

全く気がついていなかった。

五席である私が気付く必要はないのだが、やはり悔しいじゃないか。  
こんなに隊長を慕っているというのに。  
とりあえず、話を戻す。

「あ、長谷川先生なんですけど。今さっき授業風景を覗いてきました。どう考えても、生徒を差別していますね」

「やっぱり、そうか。程度は酷いのか」

副隊長はこの事に気づいていたらしい。しかし、行動には移せなかったのだろう。

副隊長という立場。証拠が掴めていない。

だから今回、副隊長は編成から抜けたのか。この方が断然動きやすい。

副隊長も、私も。

「これ以上放っておくのは問題あります。叩き飛ばしてましたもん」

「どつするのが一番良いのか・・・」

答えが見つからず、2人は押し黙る。

そもそも、護廷の死神がこのことに口出ししても良いのか、と云う所が引つかかる。そして、講師として赴いただけなのに、と云う事もある。

「総隊長に言うしかないんじゃない？」

「へ？」

いきなり隊長が起きて言うものだから驚いてしまった。副隊長はというと、全く驚いていないようだ。むしろ、ずっと肩に頭を乗せられていたせいで凝ったのか、肩を回している。

「起きてはったんですか？」

「うん、話は聞いていたよ。檜佐木、どう思う？」

「以前からそのような傾向は見えていた。だが、俺は何の証拠も掴んでいない。そして本人が助けを求めて来なかったから何もしてやけなかったんすよ。だから、俺は隊長の意見に賛成です。」

「そっか」。奏恵のお陰で証拠は掴んだも同然だから言えるからね。」

「そういう事っす」

2人の会話がどんどんと進んでいく。確信は掴んだ、あとは摘発するだけ。知ってしまった以上、このまま放っておく訳にはいかないから。

「すぐに行動に移しますか？」

「そうだね。」

隊長は、私の問いに考えながら、副隊長を見る。副隊長はその視線に答える。

「少しだけ待った方が良いのでは？ 本人からの証言があった方が、こつちとしては動きやすい。」

「そうだね。 奏恵、授業が終わったら本人を連れてきて。」

「わかりました。 失礼しました」

私は隊首室を出た。

また、何か起きそうで嫌だ

如月五席が隊舎へと戻って行かれた。

俺たちは屋上へと移動して、院全体を見渡す。

もう季節は冬だ。 上着を着ずに屋上に立っているのは少し肌寒い。

「まだ一年も経ってないのに、」「やっぱり、なんだか懐かしいね」

「そうだね…。 ああやって勉強したなあ」

「オレたちは」「あそこにあつた」「木を数本」「鬼道の自主練で」「吹っ飛ばして」「怒られたっけ。」

「あのとときの長谷川先生の怒った顔は今でも覚えているよ」

「「本当に怖かった」」

三人の間で笑いが起きる。 本当に楽しい院生活だった。

今、屋上から見下ろしている風景とあまり変わらない。

「でも、今日のアんな先生は初めて見たね」

「そうだね。」「感情が読み取りにくい」「先生だとは、前から」「思ってたけどさ」

教室を出る時に見た光景を鮮明に思い出す。

長谷川先生は、あの娘を吹っ飛ばすほど頬を叩いた。

青白い彼女の頬にはクッキリと手の痕が。 見ていて痛々しかった。 あんな事をするような先生だっただろうか。 何年も教師を続けてきたあの人が、思いつきり生徒を引っ叩く。 しかも、その生徒を敬遠している。

俺が知る長谷川先生はそんな事をしないはずだ。 一体、何かあつ



たのдарうか。

どうか、授業の度に見られる光景でなかったと誰かに言ってほしい。

「今日の事、誰にも話さない方がいいね」

「そうだね。」「特に本人には」

「真意を確かめる必要があると思う。時間がかかっても良い」

「うん。でもさ、普通」「こういう事には口を出さない方が…」

「そうだとしてもだよ。だからゆっくりでも良いんだ」

「うん、わかった」

俺の周りには協力してくれる同士がいる。

それだけで満足できる。少しずつで良い、大人になりたい。

何やら外が賑やかになって来た。

もう、昼休みのようだ。時間が経つのが早く感じる。

「昼どうする?」

「持って来てないからね・・・」「食堂にでも行こうか」

「そうしよう」

昼休みになると、昼食を求めて皆が食堂に集まる。院生と交流を

持つ良い機会になるかもしれない。

谷口は早速、食堂へ向かおうとする。

そつえば、まだ五席が戻ってきていない。

「五席がまだだね。俺、隊舎に戻る」

「えー。一緒に行こうよ。」「オレたちも五席を」

「ただいま・・・」

谷口の言葉を遮るかの如く帰って来たのは、紛れもなく如月五席。なんだか疲れ切った様子だ。

「一体？」

「堪忍。戻って来る途中で三席に掴まってしもおて…。 杜真、アレ完成したよ」

「本当ですか!？」

五席が言うアレとは、最新号の瀨霊廷通信だ。

予定よりも早く仕上がったと云う事か。

谷口は俺たちが何の事を言っているのかが分かっているようだ。何も聞いてこない。

「近いうちにはら撒くし。 杜真も手伝うんやで」

「わかりました」

ばら撒いた後、隊長と副隊長の反応が楽しみだ。

そして、綾瀬川弓親前十一番隊五席が九番隊の隊長に就任したと云う事を知らなかった周りの反応も。

「お腹すいた。 お昼どうするん？」

「食堂に行こうかと」「言っていた所ですっ」

「そう。 ほな行こか」

「「「はいつ」「」」

三人で勢いよく返事する。

もうお腹が空いて仕方がない。 動きたくない程だ。

四人は半ば走るようにして食堂へ向かって行った。

食堂に到着すると、すでに多くの院生がいた。やはり、ここでも懐かしさがこみ上げてくる。

「ホンマに、こういふ所は何も変わらんねえ……」

「五席……、最近オバサンみたいになってきてますよ」

「何でかなあ〜？ 杜真の所為で苦勞が絶えへんしかなあ〜…？」

「……、否定できません」

口ではこんな事を言っではいるが確かに、杜真の言うとおりだ。ここ数年、特にこの一年でよく一気に老けたような錯覚に陥る。おそらく原因は隊の揺らぎだ。

信愛していた隊長の裏切りから何もかもが崩れていった。

今は、それをこれ以上崩れない様に現状を維持する事で精一杯。

情けない事に、それを理由にして、なかなか新たな一歩が踏み出せないでいる。

「冗談やで、杜真。これからより一層走ってくれたらいいから」

「五席、それはどういふ意味ですか」

「さあ〜」

あえて答えを濁す。

そんな簡単に何でも答えてたまるか。時には自分で考える事も必要だ。

まあ、今回の答えに深い意味は一切ないのだが。

「「こつちですよ〜」」

双子の見事なハーモニーが。  
私たちが話しているうちに、席が取ってくれたようだ。

「堪忍え」

「構いませんよ。」「立っていても」「座っていても」「院生の注目が」「集まりますから。」「より疲れない方を」「とりまじょうよ」

周りには院生が集まっていた。

院生の白に、私たちの黒はどうしても目立ってしまっ。

「座ってて下さい」「何か買ってきます」

「おおきに」

双子が言うので、私は言葉に甘えて席に座る。

そして、杜真に小声で話しかける。院生の間で噂だけが独り歩きするのは困る。

「とりあえず手は打ってきたから心配しないでいいから」

「わかりました」

「あの娘はどうなってるの？あと、先生は??」

「教室に先生は来なかつたんですよ。だから・・・」

「わかった。さっきの事、適当な時に2人に伝えといて」

「はい」

本当に物分かりが良い部下だ。

最近の後輩は、やたらめつたら話の細部まで聞きたがるが、杜真はそんな所がない。一緒に任務に出ても扱いやすい。

「これで良かったですよね？」  
「うん、おおきに」  
「2人ともありがとー」  
「いえいえ」

言いながら双子はお盆を机に置いた。  
そこには懐かしい献立。

「献立も変わらへんねんなあ」  
「新しいのは増えても」「前は失くさない」  
「だから献立がとても多い」  
「私の時より倍になってるやん」  
「・・・」  
「こら、オバサンとか思ったやろ」  
「チガイマス」  
「片言になってるやん・・・。いただきます」  
「・・・いただきます」

院生達は私たちの会話が気になるのか、私たちの周りから席が埋ま  
っていく。

中には話を振ってくる者も居る。

それに杜真と双子は丁寧を受け答えしている。

昼食が終われば鬼道の授業。

昨日みたいな事が起こらなければ良いのだが・・・。

何が起こるか分からない

それが、この世界の掟とも云うべき理

院生は既に広場に集められているらしい。

私が合流し次第、瀨靈廷の外へ出る。というのも、私だけ長谷川先生の所に寄っているのだ。

杜真と双子は院生達の元へ先に行ってもらっている。

「長谷川先生、ちよつと良いですか」

「何かなあ？」

この時の先生の表情は、杜真で言うならキョトンだが、残念ながらその表現はこの先生には似合わない。

「先生はどのような教え方をなさったのですか。」

「どういう意味かなあ？」

「私の時とは大分違う様ですが」

近年、院生の出来が悪い事が問題になっている理由は実は先生にあるのではないか、という疑惑が私の中で浮上している。この考えが違ってほしい。

「・・・そんな事まで分かるようになったとはねえ。」

私の考えが当たってしまった。

外れて欲しかったのに。もう、目の前にいる恩師の言葉を信じる事が出来ない。

「如月君は頭を使う事に関しては、本当に出来の悪い生徒だった

のにねえ。」

「あら、教え子が成長したと喜んでほくださらないのですか」

「一応喜んではいるよお。……さあ行きなさい。皆が待っているよお」

「…失礼しました」

あの顔の裏には、何かある。

しかし、今これ以上追及するのは止めておこう。

私の中に渦巻く、疑心暗鬼



如月五席がなかなか来ない。すぐに追いつくと言ったのに。

たしか、先生と話すと言っていた。そんなに長引くような事なのだろうか。

余り、五席の到着が遅いと不安になるじゃないか。

「あ、せんせーい」

俺がヤキモキしていると、隣で突然谷口が声を上げる。

長谷川先生が来たようだ。

「あ、先生。 如月五席は・・・?」

「如月君なら、もうすぐ来ると思うよお。 だから先にやっておいてよ」

「そうですね」

「足立君、任せたよお。」

一体何をだ。 当然のことを言われても困る。

それだけを言うと、先生は去って行ってしまった。 そんな事をわざわざ言いに来たのか。

俺の横に立つ滑引と目が合う。

「なんかさあ・・・」

「そうだけどさ。 この子たちをこれ以上待たせるわけにはいかないから。 とりあえず授業するよ」

「はい」

「皆！ 外に行くよっ!!」

院生を連れて瀟靈廷を出て行く。  
さあ、鬼道の練習だ。

さっきの先生の言動は  
俺からすると、意味不明  
一体、俺に  
何を言いたかったのだろうか

冬の到来を告げる乾燥した風が肌に突き刺さる。

如月五席がまだだが、もう授業を始める。

主導は当然のように杜真が。オレたちは後ろで、必要とあらば動く。

「それじゃあ、昨日の復習っ！　まず、どう立つんだっ？」

そう言いながら杜真は皆を見渡す。

「はい！」

そう言いながら元気よく立ちあがったのは褐色の肌が健康的な女の子。たしか、さつき先生に指名されていた子だ。

「名前は何？」

「上西千尋カニウシチチカです」

「上西さん、やって見て」

「はい」

そう言いながら彼女は前に出てきた。

「足は肩幅くらい、肩の力は抜く。そして深呼吸っ！　あとは

落ち着いて詠唱するだけです」

「じゃあ、俺にむかって放ってみて」

「はい……」

おいおい、さっきまでの自信はどうした。  
いつきに声に自信がなくなる。

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ  
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

詠唱は正しい。

変な大爆発は起きないだろう。

「破道の三十一、赤火炮!!」

ドーン

派手に煙が空に向かって伸びて行く。 綺麗に決まったようだ。

そして、その煙の奥から杜真が現れた。

「よかったよ、上西さん。 じゃあ、皆も上西さんみたいに…。

始め!」

杜真の声で皆が散って行った。 果たして昨日よりも上達している  
のだろうか。

皆がもう行ってしまったと云うのに、あの娘がまだこの場に残っ  
ている。 どうしたのだろうか。

「どうしたの?」「体調でも悪い?」

そういえば、この娘はさつきから一度も顔を上げていない。 オレ  
たちは顔を覗き込むようにして声をかけた。

しかし、顔を見せてはくれない。 とても小刻みだが、肩がふるえ  
ている。

「大丈夫？」

オレたちの声が少し動揺したものになる。  
だって女の子に泣かれちゃあ、男としてはどうしようもない。

「……大丈夫です」

そう言いながら、上げられた頬には一筋の涙の跡が。しかし、口調はしっかりとしている。  
頬が腫れているのはきのせいだろうか。いや、さっき叩かれた所だ。  
痛そうに。

「名前は何？」

「……服部。服部紫稀はっとりしきと云います」

そう名乗りつつも、だんだん目に涙が溜まってきた。そして、今にも泣き出しそうになって来る。  
今まで我慢してきた事がはち切れんばかりに。

「どうしたの？」

今度はオレだけが問う。滑引は他の院生の元へ行った。  
オレたち2人が一人の女の子に構っていても目立ってしまう。だから今回はオレがここに残る。

「……もうイヤだ。耐えきれない」  
「え？」

話してくれるようだ。その顔は苦渋に満ちている。杜真はと云うと、向こうから“任せた”と声には出さずに言うてる。

「先生は話されても困りますよね……。大丈夫です、授業を受けます」

「あのね、話してくれて構わないだよ。その為にオレは君に声をかけたんだから。」

するといきなり、紫稀ちゃんの表情が変わった。予想外の様な、驚いたような、そんな表情に。

「男のオレに話しづらいのであれば、如月五席とかに話してごらん。少しは楽になるかもしれないよ。」

「はい……」

少し考えているようだ。

オレは周りを見渡す。オレたちの会話が聞こえる範囲には誰もいない。

「あの……。昨日、隊舎に行っても良いと……」

おそらく、その言葉は弓親隊長か檜佐木副隊長に言われたのだろう。相変わらず優しい方だ。

「そう言われたのであれば行っても良いと思うよ。ダメならそんな事は言わないはずだから」

「本当ですか……!?!?」

一気に澄み切った青空のように、表情が晴れた。

オレでも相談(?)にのれたようだ。

これなら、授業に集中することが出来るだろう。

「じゃあ、皆の所へ行こうか」

「はい」

明るい声が響いた。

彼女が抱える“もうイヤ”で“耐えきれない”事とは、一体何なのだろうか

もう授業は始めているようだ。

杜真たちはしつかりやっているだろうか。

出世が早かったせいか、どこか杜真は抜けている。それを双子が見事に補っていると云うのが今日までに抱いた印象だった。

どーん

聞こえる、練習している音が。

今のところは順調のようだ。少し様子を見てみようか。

気付かれない距離まで近づく。そして、傍の木に登って見下ろす。

「服部さん、肩に力が入っているよ」

「うんっ」

あの娘だ。

双子の片割れが彼女に適切なアドバイスをかける。

こういう時に貰ったアドバイスは、いつになっても忘れる事は無い。

これがきっかけで憧れ出して、隊を選ぶと云う事もしばしばだ。

私の場合もそうだった。

ドーン……

派手な音が晴天に響く。お見事。

その音で、皆の視線が彼女へと注がれる。

「紫稀、すごいっ」



「服部！俺にも教えてくれ」  
「わかった。」

周りの子が集まって行った。案外、仲良くやっているようだ。

昨日、私は先生に「あの娘はいじめられているのではないか」と云う様な事を、よく見ずにテキトーに言った。

その言葉を先生は肯定した。  
どういう事だ。

いじめがあると、私たちに認識させたかたとても云うのだろうか。  
なぜだ。

高い木の上にいると、風をよく通すので寒い。

この前まで夏だったような気がしていたのに。

「うわっ」

いきなり木が揺れた。

落ちない様に木の幹にしがみ付き、下を見る。

そこには、さっきまで向こうに居た杜真が。

「こら、杜真っ！なにすんねん」

「五席がサボるからですよ」

「ちやうわ、ボケえ。観察やつ、杜真の先生つぶりの」

「えっ!？」

「まあ、30点くらいかなあ。さっ、仕事に戻るで」

私は言いながら木から降りる。

色々考えたい事があったが、見つかってしまったては仕方がない。

「杜真、あのさあ」

私が声をかけると、杜真はこちらにやって来る。

「何ですか？ 五席」

「鬼道の練習って、冬にするもんちやうやる」

「へ？」

意味が分からないと云う風に、まさしくキョトンと杜真は首をかしげる。

おそらく、杜真たちもこの時期に練習していたはずだ。 たった一年で授業内容がガラッと変わるとは思えない。

「冬って夏より乾燥してるやん。」

「そうですね、」

「火災とかがって起きひんの？」

「はいい？」

本当に意味が分からないらしい。

コイツは本当に去年の首席だったのか？

「だから、乾燥してたら火は一気に色々な物に燃え移るし火災が起こりやすいつて事やん」

「…、俺たちの頃はそんな事は一度も・・・」

「そやし、考えた事無かつたんかあ。 はあ。 そついう事も考

えなアカンよ、足立十六席」

「う…」

杜真は、とつても困ったような表情になった。

まさか、五席にこんな事を言われるとは思わなかった。しかも、今は授業中だ。向こうでは院生が待っている。

「なんも考えんと任務に出ていいのは、護廷入りして1年以内のペーパーだけ。杜真は立派な席官やねんから、ペーパーちゃうし」

「はい」

「どんだん上を目指しや、下ばっか見てたらアカンよ。」

何故、如月五席は今、俺に言うのだろうか。

「頼りがいのある上司であれ尊敬する先輩であれ何であれ、どんどん蹴り落として追い出していかなアカン。それが無能であれば、その必要性は高い。残念なことに、世の中そうしていかな最後まで残ってはいかれへん。……だからな、杜真。」

「はい」

なんとなく、聞いておかないといけない。そんな気がする。

それだけの理由で俺は五席の話しを聞き入る。

「目の前に居る者も、自分にとって邪魔であれば排除していきや」

「如月五席、俺にはそんな事……」

「まあ、今の杜真には無理無理。優しすぎるし。」

そう言っつて五席は俺に背を向ける。

「…なんで私は杜真に、こんな事話したんやろ」

聴こえるか聴こえないか、それくらい小さい声。

しかも、話した事を後悔しているような。そんな声だ。

「杜真。 戻るか」  
「はい」

一時だけ、雲が太陽を隠した。

私は

恩師を差し押さえて、押しこんで昇格したヤツ  
今度

蹴り落とされるのは、私かもしれない

そんな恐怖が私を蝕む

思いが表に出てしまうほどに

本当はどこかで蹴り落として欲しいのかもしれない

答えは出ている、でも認めたくない

逃げ出したいだけ、だと云う事を

私が居なかつた数時間の間に、院生の出来は格段にあがっていた。後は何を覚えておけばよいのか。

あんなに高かつた日は、だいぶ傾いてきている。

「もうそろそろ、帰ってもいい頃かなあ……」

「先生が許可しに来るのではなかつたのですか？」

私が無気なく呟いた言葉に双子の片割れが反応してくる。

こっちはたしか粗押だ。滑引は杜真と一緒に向こうにいるらしい。

「そうやねんけど、約束を破つたからってどうって事ないし。」

「はあ……」

「それに、もう日が沈む。日が暮れてから、やっかいなのに会いたくない」

「そうですね。呼んできましようか？」

「いや。あつちで解散してきて」

「わかりました」

小走りで行って行った。

さて、先生はどう反応するのだろうか。私たちに任せている午後  
の時間に、あの人は一体何をしているのだろうか。

「あ

忘れていた。あの娘を九番隊に連れていかなければならなかつた。  
もう帰ってしまっているだろうか。

「ちよつと〜」

結局、私が向こうに行く羽目になってしまった。

もう、解散していたようだったが彼女だけは残っていた。  
頬の色はもう戻ってはいるが、よく見ると少し腫れている。

「ちよつと良いかな？」

「はい」

不思議そうに首をかしげる。

そして、杜真や双子も意味が分からないとでも言いたげだ。

「私の上司が会いたがつてんねんけど、今から来てくれへん？」  
「・・・!!」

赤色の目をクリリと見開いて私を見つめる。その姿は年相応。

「いいかな？」

「はい、もちろん！」

威勢の良い返事だ。一年生はこうでなければ。

「ほな行こか。杜真、帰るで」

「わかりました」

「オレたちは」「どうしましょう・・・？」

「うーん、そやな。何かあったら伝えるし、一旦帰って」

「では」「失礼します」

双子が去る。

それを見送ってから、私は彼女を見る。

「じゃあ、行くよ」

「はい」

彼女が助けを求めなければ、私たちは自由には動けない。

彼女は比較的、笑顔でいる事が実は多い。こっちの思惑通りに助けを求めてくるだろうか……？

私は彼女を抱きあげる。

私と彼女は30？位の身長差。持ち上げる事は容易い。

「！あの……!？」

「瞬歩で、一気に帰るから。杜真、着いておいで」

「わかりました」

「ちよつと、……きゃっ」

驚く彼女を腕に抱き、私は九番隊へと走る。

誰にも見つからずに帰る方法をとる。

もし、長谷川先生に見つかりでもすれば、今後どうなるかは分からない。

こちら側が動きづらくなるのは御免だ。

考え事をしているうちに門前に辿り着く。

私は女の子を抱えていたと云うのに、杜真より早く着いた。

「五席、早すぎでしょ」

「私にはそれしか取り柄がないもん。入るで」

「……緊張します」

「何言ってるの。この前、隊首室前まで行ってたんは誰やの」

「・・・私です」

「もぐ。緊張する必要はないし」

「はい」

そう言いながら顔を上げた彼女は、私には光って見えた。



門をくぐる。

皆、仕事に勤しんでいて、俺たちが帰ってきた事に気が付いていないようだ。

席官の帰りに気がつかないのは、仕事に集中しているせい。以前いた隊では考えられない光景だ。

「五席、おかえりなさいっ」

その内の一人が声をかけて来た。  
すると、皆がこちらに気づき、次々と顔を上げる。

「如月五席、杜真十六席、お疲れ様です。」

「お疲れさん。隊長はどこに居はる？」

如月五席が自分から一番近い者に声をかける。

「どこでしょう…。今日はお顔を拝見してないので…」

「あらまあ。じゃあ副隊長は？」

「副隊長は…昼頃チラツとだけしか」

「はあ…ありがとう、どうせ隊首室やる」

「そうですね」

「何か持つて行くもんってあるん？ あるんやったら寄こし」

「あ、コレです」

「持つて行くし」

「助かります。有り難うございます」

五席は紙束を受け取る。結構な量だ。

「五席、俺が持ちます」

「あら、おおきに。 杜真でも気がきくやん」

「それってどういう意味ですか…。」

俺はすかさず声を掛ける。 そうしておかないと、後々面倒と云うのが本音。

渡された紙束を両手に落とさない様に抱える。

そして、三人は並んで歩いて行った。

隊首室の前に副隊長が。 遠目にしか見えないが、なにやら困っている様だ。

そんな副隊長に如月五席が駆け寄る。

「・・・副隊長？」

「ああ、如月か。 もう終わったのか」

「まあ、はい。 それより、どうしはったんですか？」

「隊長が籠って出て来ねー」

「えっ!?!？」

俺はやっと、五席に追いつく。

五席は、扉に手をかけて開けようとするが開かない。

「五席？」

「何？」

そう言いながら、五席は腕を思いっきり振って振りかえった。 もうすぐで当たるところだった。

俺は五席の横に立っていたのだが、五席の視界からは除外されていたらしい。

「何かあったんですか？」

「そやで。とりあえず隊長に出てきて貰うって事ですか？」

「そうだな。・・・、服部か」

「あ、覚えていただき光栄です。 檜佐木副隊長」

「なら、余計に出て来てもらわねーと…。 隊長、服部紫稀が来ましたよ」

副隊長は院生の姓だけでなく名まで覚えているのか。しかし、中からの応答はない。

「本当に中に隊長が・・・？」

「いはるよ、杜真。 副隊長、いつからですか？」

俺の疑問にあっさりと答え、五席は副隊長に向き合う。

「さつきからだ。俺が用で外から帰って来らコレだ」

「あらまあ。意外と拗ねてはるだけかもしれへんなあ」

「どういう意味だ」

「さあ〜」

五席は完全にこの状況を楽しんでいる、遊んでいる。服部さんとはいうと、だんだん不安そうな顔になってきた。そんな彼女を見て、五席は言う。

「どうします？ 一旦帰ってもらいますか？」

「服部、時間はあるのか」

「大丈夫です。明日、学校も休みですから」

「そうか。なら、好きにしる」

ちよつと副隊長！！ それは少し酷くないですか・・・。こんなこと、口が裂けても俺の口からは言えない。

「隊長、無理やり開けますよ」

「え、強行突破ですか？ それはいくらなんでもマズイんじゃない。

「如月、てめえが言うな。得意分野だろ」

「そーですけど」

どんな得意分野だ。でも、五席ならやりかねない。すると、五席は無言で斬魄刀を抜く。

「えーっ！ 本当にやるんですか!?!」

「杜真、その娘と2人で下がるとき。どうなっても知らんからな・・・危ないで。」

「え、あ、はい。」

俺は服部さんと一緒に数歩下がった。そして、五席が刀を振り下ろす。

如月五席が刀を振り上げる。そして、思いっきり扉に向けて振り落とす。

俺は、これから鳴るであろう音に対して、思わず目を瞑る。

イン

刀と刀がぶつかる音。俺の色音とは違う、少し低い音が廊下に響く。

恐る恐る目を開けると、五席の刀が受け止められていた。扉はと云うと、壊れずに開けられている。

如月五席の刀を止めたのは、もちろん隊長・・・ではなく副隊長。開けられた向こうにいる隊長と、五席の間に入り込むように膝を少し曲げて受け止めている。この微妙な体勢をずっと続けるのは苦しいだろう。

124

「・・・如月、気付け」

「そんなん、私は副隊長とは違う構造で出来てるんですから無理ですよ」

「はあ？ どういう事だ」

「いや〜ん。副隊長、怒らんとってください」

「てめえは…っ。隊長、どうしたんすか？」

「振りかえらないで…っ！」

そう言う隊長の声は、心なしか震えている。でも泣いてはいないようだ。

副隊長は、五席が刀をしまったのを確認してから、自身の刀を鞘に

戻す。

「すこしだけ、少しだけこうしていて」

「……」

そう言っつて隊長は副隊長の首に腕を回す。

副隊長は、やはり体勢がキツイのかあるいは別の理由か、複雑な表情だ。

一方、五席はと云うと、やはり今もこの状況を楽しんでいるよう。顔が悪戯っ子になっている。

「さつき、妙な音がしたけど何かあった？」

「いえ、大丈夫です。」

誰かも確認せずに俺は反射的に答えてしまった。

振りかえると、そこには白雲三席。

三席は扉での現状を見て、すぐに何かあったのかは理解できないだろうが、今は関わらない方が良さだろうと判断したのだろう。俺と五席だけを見て話した。

「これ、今日中に配る事になったみたいだから今から手伝って。」

「わかりました。」

「後は千田から指示を受けて」

「姐さんはどちらに？」

「資料室」

「行つてきます」

「彼女も連れて行つてあげて」

「わかりました。」

俺と五席は服部さんを連れて資料室へと向かった。

あの場に彼女を残すのは可哀想だろう。三席なりの配慮だった。

資料室に明りが灯っている。

中には、最新号の滯霊廷通信が高く積み重ねられている。その奥から、声がした。

「奏恵！」

「はい？」

声はすれども、姿は見えず。

五席は通信の山の方を見て返事する。すると、四席が奥から出て来た。

「これらを直接、購読者本人に一部ずつ手渡ししてきなさい」

「へえ？ 本人に手渡しつてめっちゃ時間かかるじゃないですか」

「だから、皆手分けして配り歩いているのですわ。今、三席は一番隊と二番隊に」

そう言いながら、千田四席は服部さんを見る。

「あら、服部家の子じゃないですか。」

「あ、服部紫稀と申します」

「あなたのお婆様には良く世話になりました。残念でしたわ」

「はい…」

俺は意味が分からず、五席を見る。

五席は俺の視線に気づき、後で、と声に出さず言った。

「手伝ってくださいる?」

「はい、よろこんで」

「では……。奏恵、足立君はこれらを十一番隊と十二番隊に配って来てください。」

「了解しました、姐さん」

「わかりました」

今、如月五席の顔が一瞬だけ引きつったのが分かった。  
しかし、一瞬にして元に戻ったので四席は気付いていないようだ。

「あなたにはコレを十三番隊に」

「行ってまいります」

俺たちは大量の通信をもって部屋を後にした。



資料室を後にする。途中までは皆同じ方向だ。そして始めに、服部さんと別れて今は五席と2人。俺は如月五席を見る。

「・・・五席」

「ああ、あの2人やる」

「う、まあ、はい」

「あの娘は服部家の養子。元は流魂街出身やねん。」

「そうなんですか」

一見、気立ての良さそうな子なので、てっきり、門の内側の出身かと思っていたので俺は驚く。

「この前亡くなったおばあちゃんがあの娘を養子にしたらしい。えっと、服部家つてのは・・・そやなあ。二番隊の大前田副隊長の家までとはいかへんけど、それに次ぐ位の大富豪やと思っていよ。…そういう事もあってかどうかは知らんけど、姐さんは服部家の者と少し交流があったらしい」

「そう云う事だったんですね」

「まあ、そうみたい。あ、杜真。」

「何ですか」

「杜真が十二番隊に行つて来て」

「へ？」

さっき、一瞬だけ見せた嫌そうな五席の表情を思い出す。てっきり俺は、五席は十一番隊に行きたくないのかと思っていた。

「私、あそこあんまり好きとちゃうねん」

「どうしてですか？」

「・・・言えへんし、言わへんし。」

「ちよつと。そんな事を言われたら俺、行くの怖いじゃないですかつ」

「大丈夫、大丈夫。多分、私の話し聞いたら余計行きにくいで・・・。わかりました」

俺は通信を持ち直して、十二番隊の隊舎を見る。

「健闘を祈る。さらばっ」

「ちよつと、五席!？」

五席は普段でも、他と比べて十分速いが、今までにない位の早さでこの場から居なくなってしまった。恐ろしい。

此処には一体何があるっていうのだろうか。

十二番隊、隊舎。

外見は他と同じ。でも一歩足を踏み入れれば、そこに広がる空間はどう見ても研究室。俺に言わせると、異空間。

トントントン

意を決して扉を叩く。

「瀨霊廷通信を持ってきました。九番隊、十六席の足立です・」

「？ いつもは五席が持って来ていらしていたのに」

横髪との区別がつかない程の長い前髪を掻きあげて、誰かが来た。始めてみる顔。

後ろ髪は胸のあたりまでの長さだ。緑がかった黒く、すこし毛先が遊んでいる髪。

「はじめまして、かな？ 足立君」

「はい、はじめまして……。九番隊十六席の足立杜真です。

今回はコレを、一人ひとりに手渡ししに来ました」

「ご苦労様です。でも、今は即刻帰った方がよろしくてよ」

「？」

「今の隊長、ご機嫌斜めなの。・実験体になりたいとおっしゃるのなら、こっちとしては助かりますけれどね」

笑顔で言う彼女は、自分の思っている事をただ素直に言っているだけのよう。

これが理由か。五席がここに来たくなかったのは。

「配っておきます。早く帰った方が・」

「でも、そんな事したら帰った時に四席に怒られるんで」

ドーン……

奥の方から爆発音が。

今、俺の顔は絶対引きつっていると思う。

「あらまあ、またですか」

「いつも何ですか？」

「実験に失敗は付き物ですから、仕方ありません」

「はあ・・・」

「なら、こういたしましょう」

「？」

いきなり何を言いだそうとしているんだ。

「足立君、あなたは四席にこう言いなさい。 “ 十二番隊の水無みな瀬純麗五席に手伝っていたのだ ” っ」と

そして、水無瀬五席は俺の手から重たい紙束を無理やり奪い取った。

「はやくどっかに行ってしまうないと。 他の誰かに見つかる」と

厄介ですよ。」

「すみません」

「いえ。・・・ちゃんと忠告はしましたからね」

少し不思議な言葉を残して、水無瀬五席は奥へと戻って行った。

始めはゆったりと回していた腕に力を込める。まるで、彼の首を絞め殺すかの如く。

どうして、僕なんかにも急に平気でみせる事が出来るのだろうか。彼は、苦しいのか、僕の腕を軽く叩いてきた。仕方なく、僕は解放してやる。

「何」

「何、じゃないっすよ。弓親隊長」

ズルイ。なぜ、いま、あらためて僕のことそうをよぶ。

「今度は何っすか」

「・・・気になる事があるんだ。だから、あんなことを言っただけだ。皆に退出願っただけだ」

ああ言えば、変に掻い潜る奏恵の目を簡単に欺く事は容易い。部屋の中に入ると、彼も続いて入ってきた。

僕は羽織を脱ぎ、無造作に放る。すると、律義な男は床に落ちてしまふ前に掴んだ。

「はい？ じゃあ、今のは何だっけって言うんすか」

「何だろっね・・・」

「わからないんすか」

「強いて言うなら・・・シヨウドウ？かな」

「衝動？」

「そう、衝動。一瞬だけね、なんとなく妬ましくなったと云う

か、何と云うか。 何だろうね、わかんないや  
「.....」

何も言わずに僕の目を覗き込んでくる。 彼の目には、いつも惑わ  
されているような気がしてならない。

僕の発言の真意を見抜こうとしているようだ。  
でも、いまの僕にそんなことをしても無駄。 いまの僕には漆黑し  
かうつってはいないのだから。

「わかりました。 でも理不尽ですよ」

「そうだね、僕はずっとこんな感じで来たんだ。 今までは。

そして、これからも...」

「あの頃と一切違ってないとも言いたいんすか、はぁ」

ため息なんかついて、一体何が言いたいんだ、彼は。

「俺は確実に変わりましたよ。 俺だけじゃない、九番隊全体が」

「変わらないものは無い、とでも言いたいのかい？」

「ははっ。 本当に認めたくないのか、何なのか」

「何」

いきなり笑いだすので、思わず声が尖る。

「俺がよく知らなかったかもしれない。 でも、一つだけはハッ  
キリしている。」

そう言っ僕に近づく。 膝を少しだけ折って、立っている僕の視  
線に合わせて来た。

嫌でも身長差がある事に気づかされてしまうので、このような事をさ  
れるのはあまり好きではない。

しかも、そんな事を同じ死神なのに、最近、なぜか彼とは差を感じてしまう事に拍車がかかってしまう。

「綾瀬川、てめえは変わったよ。」

たったこれだけの言葉。柄にもなくドキツとした。

もしかしたら僕は、この言葉が欲しかったのかもしれない。

知らず知らずのうちに僕が求めている何かを、修兵は意図も簡単に見つけ出す。そして、与えてくれる。

「確かに、変わってねえ所もあるが……。俺が、皆が変わったのは間違いなく」

「ありがとう、修兵」

今日は泣けずに言えただろうか。

窓からは夕日が差し込む。冬の到来を告げるかのごとく、あの時よりも冷たい風が頬を撫でる。

もう、泣いてなどは居られない。  
ありがとう。

嫌でも、何があるうとも、前へ進まなければならぬ。

そんな僕の感情の移行が伝わったのだろうか、彼は羽織を僕に羽織らせた。

「隊長、本題は」

「そうそう、話がずれたね。・・・コレ何？」

そうやって僕が彼に見せたのは、一冊の本。

この本には、九番隊に起きた出来事が記されている。遠い昔から、最近の事柄まで。

「この本が何か？」

「問題はその本じゃない。挟まっている物とページだよ」

栞代わりの様にして挟まっていた一枚の紙。  
手渡ししながら、そのページを開く。

「彼女が五席になった時の事、詳しく説明して」

当時の席官名簿。そこには如月奏恵の名と、もう一人の名が五席の候補として書かれていた。  
そして、そのページには当時奏恵が五席になった時の出来事が記されていた。

「修兵が外に出ている間、僕は総隊長に呼び出されてね。その話の中で」

修兵は僕の声を黙って大人しく聞いている。  
僕は、彼に手渡した本を指さしながら言う。

「此処に書かれている死神の名前が出て来たんだ。あと、彼女との関係も聞いたよ。」

たまたま、僕が開いた本に出て来た。たまたま、部下が任務先で知り合った女の子の養父。しかも、その男は、かつて此処の席官だった。

偶然が重なる時ほど不気味な事は無い。  
総隊長の話が、嘘であってほしいとこれ程までに願った事は、今まで一度も無かった。



その名は服部錯はつとりさく  
服部紫稀の養父にして、九番隊の元第九席

（服部錯）

一言で言うと、大富豪。

ある日、錯の母親が流魂街でたまたま出会った少女を錯の養女にする。その子の名は紫稀。

錯は前の九席である。

彼を新しい五席に推薦する者がいたが、副隊長である檜佐木修兵が如月奏恵を推薦。そのまま彼女が五席となった。

その後、引退し、家督を継ぐ。

母の亡きあと、養女である紫稀を半ば追い出す様な形で霊術院へと入学させる。それ以後、2人は顔を合わせおらず、連絡もとっていない。

霊術院の教師である長谷川とは、今でも連絡を取り合っているくらい旧知の仲。

一通りの情報を教えてもらうと、僕は目の前の部下に問いかける。

「修兵は、彼の何に文句があつたのさ」

「色々な噂がある奴よりも、潔白な奴になつてもらつた方が良いじゃないっすか」

「噂？」

「裏で何やらやらかしているんじゃないかって」

「・・・麻薬??？」

「？ 隊長、どうしてそれを？ 知つてたんすか」

「それで今日、総隊長と話してきたんだよ。」

総隊長の言い様はこうだ。

最近、瀟靈廷内の富裕層はじめとして、流魂街の貧困民にまで麻薬が流通している。

その麻薬は「アヘン」。

アヘンは九番隊の隊花である芥子から作ることが出来る。そして、大量に花があるのは、尸魂界中でも九番隊の隊舎だけだ。

「調べるってさ。前にもあったの？」

「ありました。それが、今話していた時くらいだったんすよ。

それに服部錯の関与が疑われた。白黒はつきりさせる事はできませんでした。」

「このさ、引退って文字の下に何が書いてあったの？」

ここにだけ、消した跡がある。

「本当は引退じゃないんすよ。・・・何て言うか、追い出したんです」

「ええっ！！ 修兵が？」

「いや、前の隊長ですよ。疑わしい者がいる限り、隊に対する信頼は薄れる」

「そう。それで、なんだかんだで、事実をもみ消したんだ」

「…まあ、そんなトコっす」

だからか、総隊長から彼の名が出て来たのは。

「服部が止めた後、つまり服部の隊舎の出入りがなくなってからは、そんな話は聞かなくなっていたんですけどね…」

「気が緩んでたんじゃないの？」

「そうかもしれないね」

修兵は素直に認める。面白くない。

「でも、どうして今？」

「今は花は勿論、葉もついてないっすからねえ」

では、アヘンの生成は不可能だ。

「とりあえず、調べろって言われたのなら、やるしか」

「そうだね、やるしかない。…修兵」

「何すか」

呼べばこちらを見て応える。

言いたい事はあるが、今言っではいけない。適当に言葉を発する。

「…いそがしいねえ」

「当たり前ですよ。」

「心配だよ」

「何がですか」

今はコレだけを言う事が精一杯。これ以上は今の僕には言えない。

「君が」

いつか、その緊張の糸が切れそう。

君の中の獣が、君を喰ってしまいそう。もしそうになったら、そ

れは僕の所為。

「何言ってるんすか。仕事に戻りますよ」

「わかってないな。修兵ってモテるの？モテないの？」

「…いきなり何すか」  
「ははっ。」

少し不機嫌な声で言いながら、修兵はソファに座る。僕はその横に座った。

座っていると、まだ身長差は感じない。

僕は彼の耳元でそつと言う。

「限界まで我慢しないで」  
「えっ」

僕は言つてすぐに彼の横を離れる。彼は驚いた顔を僕に見せる。

まさか、凶星だったのか。

僕は何も言わずに仕事に戻った。

2人で使うには少し狭い

1人で使うには少し広い

そんな隊首室に2人、黙々と仕事をこなす。こなす以外、何もない。

ふと思ったが、いつまでこの事が本人にバレないのだろう。案外、もうバレていたりして。それはないか。うん、俺は無いと信じている・・・信じたい。

十二番隊の隊舎を出る。

このまま帰ると、千田四席に何を言われるのか分からない。俺は行くあてもなく歩いていたが、結局九番隊の隊舎へと帰って来てしまった。

「どうしよう…」

言いながら頭を掻きむしる。行くところがない。

そう言えば、隊長は大丈夫だったのだろうか。まだ行かない方が良さだろうか。

「杜真」

「うわっ！」

突然聞こえた声に俺は驚く。その声は聞きなれたもの。如月五席だ。

「いきなり何ですか!？」

「何よ、そんなんで驚いたらアカンやん。もう配り終わったん？」

「あ、はい。水無瀬純麗五席に・・・」

「あ、スミレに会えたん？ それは良かった、良かった。何かあつた？」

「何か、とは？」

「じゃあいい。服部さんは？」

「もお・・・、気になるじゃないですか」

五席は半ば強引に話を变える。もう、この事について触れるつもりはないらしい。

「俺は見てませんよ。探しましょうか？」

「いや、大丈夫やる。それより、隊長は？ 何かあつたんやろなあ」

「楽しそうですね」

「だって」

言いながら、五席の目は隊首室のある方角へと向けられる。

「あの2人って、上司と部下、以上の関係にしか見えへんねんもんっ！」

「もんっ！じゃないですよ。そんな事はありませんっ」

「ははっ、私も本気で言っへんし」

「・・・」

彼女が言うと、本気に聞こえてしまうのは俺のせいだろうか。兎に角、五席の真意は読み取りづらい。

「五席も配り終わったんですか」

「ん？ そんなん決まってるやん」

五席は止めていた足を前へ出す。そして、俺に背を向けて言う。

「置いてきた」

「ちよつと、五席！」

「だってー、十一番隊って居づらいねんもん。ウロウロしづらいの。」

十一番隊に対して、まだ……。

「向こうが喧嘩腰になんねんもん。なんか、回避方法とか無いの？」

なんだ、そういう事か。

「……ないです」

「せやしやん。今帰ったら姐さんに怒られるしなあ。あ、別の所に帰ればいいんか。でも……」

「五席、一人で盛り上がらないで下さい」

「杜真、どないしよか……。あ、もう大丈夫なんかな。隊首室に行こか。報告書書かなアカンし」

「はい」

俺たちは、隊首室へと歩き出した。

「……杜真」

「何ですか」

そのまま部屋に辿り着くと思っていたのだが、いきなり話しかけられ驚く。



「懐に何隠してんの」  
「えっ？」

何のことを言われているのかが分からず、俺は立ち止まり自分の懐を見る。

何かが入っている。

しかし、俺は何かを入れた覚えは一切ない。

「これは…何でしょう？」

「…スミレにしてやられたな。手紙付きやん、読んでみ」

「えーっと…。“これを九番隊副隊長に飲ませて下さい。十

二番隊” っとあります。俺は一体どうすれば…。」

「私に聞かんとして、知らんし!!」

「だからですか、行きたくないってのは」

「当たり前やん。スミレとは旧知の仲。私がスミレに頼まれ

たことを断れへんって事はお見通しやねんもんっ!!」

「そうだったんですか…」

「そういう事」

そう言いながら、俺たちは再び歩き出す。

もうすぐで隊首室。

俺はこの怪しい小ビンに入った透明の液体をどうすればいいのか。

「何そんなに悩んでんの」

「いや、見るからに怪しそうじゃないですか」

「そやなあ。…杜真はスミレの頼みを断れんの？」

「多分無理です」

「即答やなあ。じゃあ、コレをどうするかは副隊長の判断に任

せよし」

「渡すって事ですか!?!」

驚きのあまり、思わず大声を出してしまう。  
それに対し、如月五席はさらりと言つ。

「うん。正直に話して渡せばいい」

「正直に、ですか」

「手紙を渡してしまつたのも手かな。でも、なんか面白そう  
やん」

五席の顔が、見慣れたものになる。いたずらっ子。

「つてことで、杜真。」

「…はい」

「おきばりやす。まあ、死ぬ事は絶対に無いと思つし」  
「げ」

「言つてる間に着いてしまつけど、作戦練る？」

「ちよつと、五席。本気ですか」

「うん。こういう事には、常に全力投球！」

「違うことにも全力投球して下さい。」

「ん？ 無理無理。楽しい事には自然と力が入るけど、他にならんと半減すんねん」

「もうっ！ 五席に任せますよ！」

そう言つて、俺は地面を強く蹴り走る。

「あら。杜真、逃げるなっ！ 私に走りて勝てると思てんのか  
！」

俺は五席に追いつかれる前に隊首室前に到着する。

一瞬の差で如月五席も到着。

「しゃーない。 杜真も気になるんやろ？」

「…はい」

「正直で大変よろしい。 私が適当にやったる」

「お願いしまーす」

そして、俺は扉を叩いた。

俺は扉を叩いた。

トントントン

そして、思い出す。      コレを渡さないと話にならない。

「五席、コレ」

「・・・わかった」

小ビンを渡し、五席と俺は扉の向こうへ声をかける。

「如月です」

「足立です」

「どうぞ」

「失礼します」

珍しい。返ってきた声は隊長のもの。      副隊長は居ないのだろうか。      副隊長は居ないのだろうか。

「あれ？ 副隊長は?？」

「檜佐木なら、さっき出て行ったよ」

「そうなんですか。      んじゃあ…隊長、面白い事しません?」

「んじゃあって何」

「コレです」

そう言いながら、五席はさっき俺が渡した小ビンを隊長に手渡す。

「怪しいね」

「やっぱり、そう思われます？ コレね、杜真が十二番隊から預かって来たらしいんです。これが、それと一緒に渡された手紙で…。」

「檜佐木宛の贈り物かあ。・・・奏恵はどうしたいのさ」

「そりゃあ…勿論。杜真もです」

「そうなの？」

「え、う、まあ、はい」

隊長は小ビンを、軽く振りながら光を当てたりして、観察している。そんなに小ビンの中に、液体は入っていない。極少量だ。

「飲み物の中に混ぜる？」

「たつ隊長！ 本気でやるんですか!？」

「今更何を言っているんだい。君たちはそうしたいから僕に言っ  
て来たんですよ」

「そうですけど…」

まさか、隊長が乗って来るとは思わないじゃないか。

「まあ、今日は帰って来ないだろうから後日だね。さあ、君たちの本題は何？ まさかコレとは言わないだろうね？」

そう優しく言っているが、その眼は怖い。

どうしてかと考えてみると、隊長の前には山のように紙が置かれている。このせいで少し苛立っているのだろうか。

「違いますよあ、隊長。報告書をね、いい加減昨日の分も含めて書かんとアカンと思いましてね」

「え！ 書いてなかったのかい？」

「はい」

「至急、終わらせて」

「了解しました！。 杜真、服部さん探してきて」

「はい」

そういえば、服部さんの存在を忘れていた。

「あの子、迷ってるみたいやし」

「どうして・・・？」

「ん？ だって、霊圧があっち行ったり、こっち行ったり」

「ストーリーじゃないですか」

「・・・。 煩い！ ちゃっっちゃと探して来よし！」

「はあーっい！」

五席の顔が引きつっている。

マズイ。 俺の本能がそう告げている。

なので、俺は逃げるようにして隊首室を後にした。

綾瀬川弓親隊長が黙々と作業をこなしていく。

決して早くは無いが正確に業務をこなす私の目の前の女性は、もう立派な隊長の顔になっている。

「奏恵」

「何でしょう」

「・・・」

黙ってしまわれた。 何やねんやろ。

不思議に思っていると、隊長が私をキツと睨んだ。

「コレ何」

「・・・あちゃあ。もう見つけてしまわはったんですか」

隊長が私に見せたのは、さっき配り歩いていた瀨靈廷通信。

それにしても、見つかるのが早すぎはしないか。早くても、3日はバレないだろうと思っていたのだが。

「…副隊長が持って来たんだよ」

隊長が言う副隊長は、我らが九番隊の檜佐木副隊長ではない。十番隊の草鹿副隊長の事だ。

「いつ配ったの」

「さっきですよ。だから驚いてるんですよ。予想外の出来

事ですね・・・」

「はあ。」

そう言えば、隊長のため息は始めて聞いた。

「ため息つくと幸せが逃げますよ」

「誰のせいかな」

「さあ、誰でしょうね」

しらばっくを見ると、再び思いっきり睨まれる。そこまで怒らないで。

「もしかして、この事を知らなかったのは僕だけ？」

「いいえ、副隊長にも知らせてませんよ。この為に、皆で色々

頑張ったんですから。まずは副隊長の編集長の座を一時的に誰かに委託させる説得して……。」

「何が始まりだったわけ」

「えーっと……阿散井副隊長がどうしても知りたいって言わはるさかい」

「恋次か……」

隊長の目の色が変わる。

そして、立ち上がった。紙束の一部と愛刀を手に持って。

「？ 隊長、どちらへ？」

「六番隊」

「げ」

「大丈夫、これを朽木隊長に渡してくるだけだから。……奏恵、逃げるんじゃないよ」

そう言うと、隊長は姿を消した。

「大丈夫なら、何で斬魄刀を持って行くんですか……。逃げてーっ、阿散井副隊長ー!!!」

きつと、必ず。隊長は阿散井副隊長を一発殴って帰って来るのだらう。

そしてきつと、次は私……。

俺は扉をいきなり開けた。

「五席？」



「あら、杜真。早かったねえ」

「はい、すぐに会えましたから。ねえ」

「はい。」

そう言つて、2人は顔を見合わせる。

「隊長なら、阿散井副隊長を一発殴りに……」

「へ？何かあつたんですか？」

「通信。早速隊長に見つかつてしてもてさあ。阿散井副隊長の

次は私やし、その次は誰やる。……逃げたい」

「逃げないで下さいよ。俺、とぼっちりを喰らうのは嫌です  
から」

「わかつてるて……はあ」

「……一体？」

「これだよ」

あの娘は私たちの会話についてこれなかったのだろう。杜真が通  
信を手渡す。

すると早速、読み始めた。素直な可愛らしい娘だ。

しばらくの間、沈黙が走る。音は、私が報告書を書く音と、彼女  
が紙を捲る音しかない。

すると、読み終えたのか、いきなり口を開いた。

「……これは、黙つて？」

「当然、黙つてやった」

「じゃあ……」

「当然、怒られる訳よ」

彼女の短い問いに私は答える。

もしかしたら、もうそろそろ隊長が戻つて来るかもしれない。

「まぶっ  
たよ」

「もどつたよ」

突然の声に驚いて、声のした方を見る。窓から入ってきたのは、もちろん隊長。

「わかつてるよね、次は君だよ」

「一体何を…」

「何だと思う？」

質問の答えは、さつき五席から聞いた話から想像がつく。しかし、見た事がない様な笑顔で問われても、俺はどうしたら良いのか解らない。

「朽木隊長が傍にいたからかな、素直に叩かれてくれたからつまらなくってね……」

この人、本気で阿散井副隊長を…。以前同じ隊の上司と部下だっただけ余計、阿散井副隊長は何も言えなかっただろう。隊長は如月五席を見る。

「さあ、奏恵。修錬場へ行こうか」

「はい…」

戻って来てから、ずっと同じ表情なので怖い。怖すぎる。ここでふと、俺は横にいる少女の存在を思い出す。

「隊長、服部さんは・・・」

「あ。… 檜佐木が居ないからねえ。 彼がいないと、僕はさっぱりだから。 探さないと」

「私が後日伺いましょうか・・・？」

「構わないよ。 隊の仕事を色々手伝ってもらっちゃってるみたいだし。」

服部さんの問いかけに、やっといつもの表情に戻る。

「一緒においで」

隊長が言いながら手を差し出す。

服部さんは、どうしたらいいか一瞬戸惑ったが、隊長の手をしっかりと握った。

「はいっ！」

それはそれは、とても嬉しそうな笑顔で。

竹刀の音が響く。

集まってきた隊士を一気に相手しているにも拘らず、隊長は疲れを一切感じさせない動きだ。 よく考えてみれば、隊長がこうして一般隊士の相手をしている姿を見るのは、十一番隊でも九番隊でも初めてだ。

「九番隊ってこんなものなのかい？」

「まだまだー！」

「やー！ー！」

「そうこなくっちゃね」

次々と隊長に向かっていくが、次々と無残にも床に伏していく。五席が、他の隊士に押し付けたからことう事になっているのだ。当の本人は、絶賛逃走中。ではなく、向こうの方ですっかり伸びてしまっている。

「何やってんだ」

振りかえると、そこには副隊長の姿が。それを確認した俺は、服部さんと共に副隊長に駆け寄る。

「隊長の堪忍袋の緒が切れちゃって…。誰も相手にならないんですよ」

「・・・何に對してだ。まあ、このまま放っておいても大丈夫だろ。怪我人も出ねえだろうし」

「その自信はどこから・・・」

「さあ、残ってるのは誰かな」

その言葉と同時に、俺の肩に手が置かれる。

恐る恐る見てみると、隊長が竹刀を片手に立っていた。

「ひえ〜。」

「そうやってる隊長は、斑目と変わりないっすね」

「一角と一緒にしないでよ。何、次は檜佐木が相手してくれるの」

「嫌ですよ、俺勝っちゃうんで。結構待たせているでしょ、服

部が可哀想なんで行きますよ、隊長。」

「随分強気だね」

「竹刀なら俺は勝てますよ」

「・・・それもそうか」

隊長の最後の言葉は、眩きでほとんど聞こえないくらいだった。

隊首室。隊長は部屋に入るや否や、すぐに椅子に座った。

副隊長に勧められて、俺たちも椅子に腰かけた。隊長の斜め前に。

「どこまで話したんすか」

服部さんを俺の横に座らせると、副隊長は隊長の横に座りながら言った。それに隊長が答える。

「一切話してないよ。詳しくないことを僕が勝手に話すのは得策じゃないでしょ」

「そうっすね。∴服部、単刀直入に問う」

「長谷川先生に嫌われてるん？」

「如月、てめえ！」

「奏恵、いつ来たのさ」

「へ？ ずっと杜真の横にいましたけど」

どうやら隊長と副隊長の2人は、如月五席がまだ伸びていると思っていたのだろう。

驚いていると云う事が、2人して、顔に出てしまっている。

そんな2人を置いて、五席は服部さんに問いかける。

「で、どうなん？」

「……………」

「答えられへんのかあ。」

勝手に話を進める五席が、この言葉を言った直後、副隊長を見る。

すると、副隊長は口を開いた。

「こつちの思うように取るが良いのか」

「誰にも言わないで下さい、特に父上には。父上に知られたらどうなるか・・・」

紅い瞳が濡れて来た。

それをみた隊長は俺を退かして、彼女の横に座る。そして、顔を覗きこんで言う。

「話してごらん。此処に居る皆は他言したりしないから」

「・・・何処に居ても、周りからは異端視されて。挙句の果てに、他の子には優しい先生が私にだけは豹変したように叩いてくる。

周りの子はそれを黙認して、周りの子だけじゃない、他の先生までもが。私の名前なんて、覚えて下さった先生は・・・え・

え、えくん」

「檜佐木修兵だけだった、か・・・」

泣きついてきた服部さんを隊長は優しく抱きしめる。

こういうことに余程慣れていないのか。その顔にはどうしたらいいかわからない、とまるで書いてあるかのような表情だ。

「ち、父上は、私を追い出す為に私を院へ入れたんです。・・・な・

・・・長い休みに家に帰っても、父上は私とは会っては下さらない。会えたと思えば、いきなり・・・え、えくん」

必死に話す声は、聞いている者も悲しくさせる。

この後、彼女はこれ以上は何も話さず、眠ってしまった。

その寝顔は安らかで、不安を抱えているとはとてもじゃないが思えなかった。



規則正しい寝息が聞こえる。

今、この部屋にいるのは僕と修兵、そして紫稀だけ。他の2人は帰って行った。

「どうしようか」

「これじゃあ、今のところは動けないっすね」

「そうだね、静観しようか」

「問題はいつ動くか…。このままだと、服部が壊れそうな気がしてならねえ」

「ここに入入りさせるってのはダメかな」

「…どうでしょうね。でも、普段親とは連絡を取れていないみたいなんです。こいつの好きにさせてやるのが一番かと」

「うん」

僕は、僕にもたれて眠る少女の細く柔らかい髪を、そつとなでる。爆睡しているのか、死んだように睫毛も何も動かない。息をしているだけだ。

「何か思っている事を自由に吐き出せる相手が必要なんだろうね。

この子にはその相手がいない。」

「俺たちが相手になるうって事ですか」

「うん。信じることでできる大人と、そんなに年の変わらない

先輩。条件は結構良いと思う」

「隊長の決定に異存はありませんよ」

改めて言う目の前の男が、不思議な存在に見えた。

「・・・ありがとう」

波乱は続きそうだ。 色々な物事を巻き込みながら、膨らみながら。

あの日の後も、俺たちは院へ行っていた。寒い冬の終わりまで。そして時は経ち、厳しい冬とはもうお別れ。風は春の到来を告げている。

講師としての生活は春までで終わったので、今はもう院へは行っていない。

俺が護廷に入って、やっと一年が過ぎた。濃い一年だった。そんなこんなで、護廷に先輩が入って来る季節だ。

あれ以来、目立った変化はない。強いて言うならば、服部さんが稀に九番隊に来る事だけだ。

来た時は暗い顔をしているが、帰る頃には明るくなっているから不思議なものだ。

あと変化と云えば、隊長と副隊長が一緒にいる所を見なくなったと云う事。仲が悪くなったのか、あるいはあの事をまだ引きずっているのか。

そうだとすれば、これはどう考えても俺たちの仕業の結果なので、何とも言えない。2人が、今でも冷やかしを受けると言うのだから。

「足立、心の中が丸聞こえだぞ」

「ひえ！」

大人しく書類整理をしていたから、全く気が付いていなかった。俺の背には副隊長が。

「・・・また、隊長が出て来ねえって言っている奴がいるんだが、何か知らねえか」

「え、またですか？」

ときどき、隊長は隊首室に引き籠るようになってしまった。十一番隊にいた頃はこんな事は一度も無かつたらしいので、皆驚いている。

そして、部屋を出てくると必ず言うのだ。この部屋は広いけど狭い、と。

「俺には解りません。なんか、規則でもありそうなものですが」

「そうだな…。」

「決まって、その前夜は天気が良いですね。」

「そう云えば、月がよく見える日の翌朝……。」 副隊長、

千田姐さんがこれを隊長と副隊長にと

「わかった。ありがとう、如月。」

礼を言われた五席は、俺の横で笑顔になる。

俺は、いつのまにか入ってきた五席に気がつかなかつたので驚いてしまった。

「いえいえ、姐さんのお使いをただけですから、どうって事はないですよ。でも、これって隊長の許可が必要なんで……こうなつたら強行突破で行きましょう!!」

「・・五席、またそれですか？ 前回もそれでしたよね」

「？ そうだったのか」

「副隊長は任務でやらへんかったから、私たちでは手の打ちようがなくなつて。私が…。」

「そうしたら、扉はグチャグチャ。おまけに隊長は居なかつたと云う。」

「おい、てめえ等なあ」

「もうっ！ それやつたら副隊長がどないかして下さいよ。私

「たち皆は心配なんですよ。前の隊にいた頃はこんな事は一度も無かったって、斑目三席に聞きましたよ。…隊長が自分で思っているよりも、私たちは彼女を大切に思っているんですよ。隊長としては勿論、一人の死神としても。」

「そういう事は直接隊長に言え。それなら、兎に角行くぞ。」

「千田からのコレ、期限付きだ。」

「いつまでですか？」

「俺は副隊長に問う。なぜなら、一瞬、副隊長の顔が険しくなったような気がしたから。」

「今日中」

「もう、結構日が昇ってますよ。急ぎましょう」

「ああ」

「俺たち三人は、隊首室へ向かって行った。」

「隊首室の前には白雲三席が立っていた。」

「こちらに気が付き、副隊長に駆け寄り、小声で話す。」

「隊長が…。中から泣き声が聞こえるような気がするので、心配なのですが。」

「思ったより深刻だな。隊長」

「…」

「中からの返事は無い。しかし、確実に扉の向こうには隊長が居る。」

「扉、鍵はかかってないんじゃないか？」

「へ？ それホンマか、杜真」  
「俺はそう思いますけど…。」

根拠は無い。ただ、なんとなく…。

「案外、構ってほしただけ。なのかも」

「…。」

皆を黙らせてしまった。

決めた、これからは根拠のない思いつきは口にしないでおう。  
しかし、副隊長は俺の意見を支持してくれた。

「あり得ねえ事じゃねえな。隊長、開けますよ」

副隊長がそう言って扉を開けた。開いた。

「なんや〜。杜真の言うとおりで、ちっともおもんない」

「おもしろさを追求しないで下さいよ」

皆に続いて入ると、そこには隊長が。副隊長が、片膝について隊長の顔を覗く。

この風景、懐かしい。久しぶりに見た。

「綾瀬川弓親隊長」

「…何？」

そう言って上げられた顔には、無理に作ったぎこちない笑みが。思えば、隊長の笑顔を長い事見ていない。

「今日は引き籠っていたつもりは無いんだけどね…。どうした

のぞ

「千田姐さんからこれを預かってきました。　お願いしま〜っす」

いつもより明らか低い声の隊長に対して、五席はいつも通りの口調で資料を渡す。

バザッ

のばされた白く細い手は、渡された資料を落としてしまった。

それに驚いたのは、他でもない。　隊長自身。　茫然とその伸ばした手を見ている。

「・・・力が入らないや。　やっぱりダメだね、寝ないと」

「しっかりして下さい、隊長。　皆心配してるんですから。　心配し過ぎて、皆仕事をサボり始めますよ」

「何それ、奏恵。　ただの口実でしょ」

「本当ですって！　私たちの知らん所でぶっ倒れてたらっと思っってしまうと...。」

「僕を馬鹿にするのはいい加減に・・・！　きゃっ」

突然隊長の言葉が遮られる。

見ると、副隊長が隊長を、・・・何て言ったら良いんだ？、お姫様抱っこしていた。

「隊長、疲れてますね。　休んでください」

「修兵！　下ろしてっ！」

「貴女は何も解ってないんですね...。」

そう言って、副隊長は隊長の首筋に顔をうずめる。

「くすぐった・・・」

言葉の途中で途切れた。副隊長が顔を上げる。

「あっさり、寝やがった。これは完全に疲れきってたんだな」

「一体何を？」

「何にもしてないですよね、副隊長」

「ああ、如月の言うとおりで。白雲、用意できてるか」

「はい、大丈夫です」

「移動するぞ」

俺たちは隊首室を出た。

隊長は、副隊長の腕に抱かれて。



意味がわからないまま、私は副隊長と白雲三席の後をついて行った。

辿り着いたそこは、杜真はまだ入ったことのないであろう部屋。私だって、一度しか入ったことがない。しかも、それも大分昔のことで、ほとんど記憶に残っていない。

たしか、一面が豊。広さは隊首室よりも遥かに広い。もし私がここで仕事をしろと言われたら、最低5人の死神と一緒に行うだろう。そうでなければ広すぎる。兎に角、走り回れるくらい広い。

「俺と隊長、白雲、千田に如月。この五人は今から此処で仕事をやる。」

「えー、そんなんサボれないじゃないですか！」

「どのような状況でも堂々とサボるくせに、よく言うね。まあ、そこが皆に気にいられる理由だろうけど」

「ちよつと、三席！ 私がいつもサボってるみたいない方は止めてくださいよ」

「事実じゃないですか」

「ちよー、杜真。今何て言ったのかな」

「ひー」

私は慣れない部屋に入ったことで落ち付かない気持ちを、適当に晴らす。杜真には申し訳ないが。

「如月やめろ。杜真、この事を皆に言いふらして来い。」

「はい、いつてきます」

杜真が部屋を出て行った。  
からかう相手が居なくなつてヒマになつてしまったので、改めて部屋を見る。

九番隊の誇る美しい庭が一望でき、更にここから芥子畑まではそう遠くないので満開になれば少しは見えるかもしれない。  
今の季節は桜が満開に咲き終わり、散つていく。

「どうしてまた」

「隊長がいつもおつしやつてたじゃないか。狭いけど広いつか何とか」

「でも、三席。それと移動とは結びつかないんですけど…」

「狭いけど広いって云うのは隊首室の事。2人では狭いが、一人だと広い。それなら、広い部屋に移動して、一人にさせなければいい。…だから如月、サボるな。」

「副隊長！ ちょっと良い話やなあつて思つてたら結局何ですか！？」

「まあまあ、隊長にはそう説明するんだよ。」

「そうしねえと、また悩むだろ。つたく、馬鹿な奴」

「…自隊の隊長に対して、そこまで口の悪い副隊長は初めて見ましたよ。まあ、それもアレですか。ねえ、三席」

「言いたい事は何となくわかるけれど…。振らないでくれるかなあ」

「如月、また何か企んでるな。あの時の事、まだ引きずつてんだからな。いいかげんにしろ」

「や〜ん。副隊長、愛の鞭ありがとございます。でも、愛は平等に分けて下さいーい。」

「分けてる」

「嘘吐き副隊長。どう考えても、隊長は特別扱いじゃないですか。まあ、それで良いと思いますよ。私はね〜」

「特別？」  
「そうですよ」

この人はまだ気が付いていないのだろうか。 貴方の彼女を見る目が、いつにも増して優しい事を。

「めちゃくちゃ大切やなかったらね…そうやっていつまでも抱いてられませんか。 ねえ、三席。 私やったら即、下ろしそうですか」

「そうだろうね」  
「…！」

副隊長の顔が真っ赤にして、私たちから顔を背ける。 でも、隊長を決して下ろそうとはしない。

白雲三席を横目で見ると、彼も私と同様に少し楽しそうだ。 どうやら、こんなことで楽しんでいるのは私だけではないらしい。

170

「とつ兔に角、仕事に戻るぞ」  
「了解しました」  
「はい」

新たな場所での仕事再開。

すうすうと眠る隊首の横で、私たちは黙々と仕事をこなしていく。どう考えても異様な光景。

慣れない空間で慣れないことをしなければならぬと云う事は、私にとっては苦痛でしかない。よって自然と仕事効率も下がってしまっただけ。

「失礼します」

そう言つて、自然に入ってきたのは……。

「只今戻つてまいりました。無事任務終了、怪我人は無しです」

「お疲れ様です」

やっとなのお出まし、千田姐さんだ。姐さんが居るだけで、私の落ち付かない心が少し落ち着く。

姐さんは流魂街での任務を終えての帰還だ。その仕事内容は、また虚の暴走を止める事。

「よく戻つた。今日は休め」

「有り難うございます、副隊長。……こつこつのも良いですわね」

そう言つて、姐さんは目を細める。

姐さんの髪が夕日によつて真っ赤に見える。こつこつという光景がある。と云うのも、この部屋の良い所なのだろう。

「懐かしいか」

「はい、とても。・・・副隊長はまだ院生にもなっていない時代の事を何故…?」

「秘密だ」

「? 姐さん、以前にもこういう事を?」

「そう言えば、奏恵はまだ院生だった頃の話なので・・・2000年、いいえもつと昔の事ですわ。当時、九番隊の隊首室はここだったのです。今の隊長から二代前の隊長から以前の場を使うようになったのです。二代前の隊長がここから移動するのを手伝ったのが初仕事でしたので、よく覚えていますわ。」

初めて聞く、姐さんの昔話。 姐さんは、私なんかよりもずっとこの九番隊を知る隊士だ。

「そのことを知ってるんって、姐さんくらいじゃ…」

「九番隊ではおそらく…。」

「あの〜、姐さんの同期って誰なんですか?」

「・・・それは・・・四番隊隊長、卯ノ花烈。」

「「「ええーっ!!!」「」」

「あら、ヤダ。そこまで驚かなくてもよろしいじゃありませんか。」

「初めて知った…」

「千田はめつたに、自分の事を話さねえから…」

「私だつて〜。なんかショックやねんけど…、姐さん〜。」

ふふつと笑って、姐さんは隊長を覗き見る。

その眼が一瞬冷たかったが、すぐに柔らかいものになった。

「本当に、ぐっすりと・・・。まるで小さな子供のよう」

「姐さんからしたら、ここにいる皆が子供なんですね……………」

「。」

「ええ。特に奏恵は、ここにいる皆がそう思っていますわ」  
「なー！ …でも、言い返せへん」

こんな私たちの会話に、自然と笑いが。これから、こういつ日々が続くのだろうか。

そのためにはシロリを取り除いておかなければならない。こう  
いうことは私の仕事ではないが、相手が姐さんであるのならば、話  
は別だ。

「・・・千田姐さん」

「何ですか？」

「あ・・・」

姐さんの感情の移り変わりを気にしながら言葉を繋げようとする。  
しかし、良い言葉が見つからない。

「もう、あの、百年前の事を・・・」

「奏恵にしては珍しい。わたくしは、奏恵にそこまで気を遣わ  
せていましたか・・・」

姐さんは息を吐いて、一瞬三席を見てから副隊長を見る。

「御存じなのでしょう？」

「・・・」

「昔、わたくしには婚約者がありました・・・それは奏恵の実の

兄。 家が決めた結婚。 しかし、わたくしは彼から愛され、  
そして何よりわたくしが彼を愛していました。」

私以外の此処に居る者は誰も知らない、姐さんが十一番隊嫌いの理  
由。

そして、私も知らない、あの日の事実を。

何年もたった今、初めて姐さんの口から聞く、あの日の本当のこと  
を。

姐さんは意を決したように話し始めた。  
初めて聞く。

あの日の、兄が死した日の話を。

「昔、わたくしには婚約者がおりました・・・それは奏恵の実の兄。家を取り決めた結婚。しかし、わたくしは彼から愛され、そして何よりわたくしが彼を愛していましたわ。」

約百二十年前

まだ昼であると云うのに空は今にも泣き出しそうなくらいに暗い。千田家に複数の人影が入っていく。それを一人の金髪の娘が見ている。

またか、と娘は齒噛みする。

これで三度目だ。

「お嬢様。 お呼びです」

「わかりました。 すぐに行きますわ」

誰か、とは聞かない。 どうせ呼んだのは父以外には考えられない。お嬢様と呼ばれた金髪の娘は、千田家の一人娘。 次期家長は彼女だ。

彼女が護廷に入って着々と出世していき、遂に上位席官と呼ばれる位置まで登ってきた。 となると、自然と過酷な任務が課せられることになる。 つまり、死ぬ可能性が高まったと云う事だ。

それをきっかけに、彼女の父は彼女の次の跡取りを確保する為に娘



を結婚させようとしているのだ。

今日もそのことだろう。

今まで二度そのような話があったのだが、どの男も千田家という看板に畏怖してしまうような男だった。そのような小さき男に、家督を継がせるわけにはいかない。

娘は襖を開けた。今回はまともな男である事を願って。

「おねーさん、だれ？」

「こら、奏恵。失礼だぞ、それに走るな。申し訳ありません、

わたしの妹が…っ!!」

「構いませんわ」

「いえ。わたしは如月明良（いづみあきら）と申します。こっちは妹の奏恵です」

そう言つて、如月明良と名乗った男は、妹と共に頭を下げる。

「顔を見せて下さい。わたくしは千田明衣と申します」

「明衣。もう会っていたか」

「はい、父上」

明衣が父上と呼んだ男の横にもう一人誰かが居る。如月家の現家長なのだろう。

「2人でどこかに行つてきなさい」

「はい、では行きましょうか？」

「ええ」

明良と明衣の2人は部屋を出て行つた。すると、明衣の父が奏恵に話しかける。

「奏恵ちゃん、あの2人をどう思う？」

「うーん。わからない」

「そうか」

奏恵の答えに満足したのだろう。明衣の父は奏恵の頭をそつと撫でた。

どこかに行くと言っても、外は今にも雨が降ってきてそう。行くところは無い。

「どうしましょう。」

「外に行きましょうか。傘を持って来ているので」

「はい」

男は緊張しているようだ。それとは対照的に、女はやけに落ち付いているように見える。

「どうぞ」

「いいえ。・・・わたくしは傘を持って歩いたことはありませんの。」

この発言に明良は驚いたようだ。明良が持っていた傘が行き場を失う。

しかし、明良は明衣の目をまっすぐに見つめて言った。

「ならば、共に一つの傘に入りましょう。」

「え、そんなっ。」

「ならば、明衣様。わたしの、俺の妻となって下さい」

「……！まさか、わかつてはいました。けれども……」  
まさか、こんなにも早く告白されるとは思っていなかった。明衣の頬が赤く染まる。

「……俺は貴女に恋をしています。正直に言うと、一目ぼれでした。院で出会ったあの時から」

「え？」

「あれは今日みたいな曇り空でした。鬼道の實習のことです。」

明良と明衣は院生時代、一度だけ鬼道の授業で共に組んでいたことがある。

「あの時からずっと見ていた。」

「……わたくしもです。」

「え？」

今度は明良が驚く番だった。

「わたくしも一目ぼれでした。しかし、家の事があるのでわたくしにそのような自由は……」

俯いた明衣の顔を覗き込みながら明良は言った。

「今、自由になれたじゃないですか」

その言葉が、明衣に唯一の自由を与えた。  
そして、この日から2人は恋人から始まった。夫婦になるのはもう少し先、の予定だった。

当時、明衣は九番隊に所属。明良は十番隊に所属していた。  
この日は九・十・十一番隊の合同任務。内容は虚の討伐。2人  
が初めて共に任務に行くことになった。  
そこで、明衣にとって悲劇が起きた。

「お前ら、後ろだ！」

明良は十一番隊の隊士の背に襲ってきた虚を斬る。他の九番隊や  
十番隊の隊士は散ってしまつて、近くには残っていなかった。  
数が多い。

「導け、死谷しのたに！」

明良は始解し、次々と虚を斬っていく。  
すると、仲間が集まつてきた。皆で目の前の虚を斬っていく、も  
う終了だと思つていた。  
しかし、もう一体居た。  
それに気がついたのは先ほど庇われた十一番隊の隊士のみ。そい  
つは、何も言わずに逃げ去つた。  
そして、次に気がついたのは、隊士の後ろに居た明良と、そこから  
は遠く離れていた明衣だった。  
明衣は急いで弓を引く。

バシユ……、シユッ

紅い花が咲き、一瞬にして散つた。そして、虚は明衣の放つた矢  
に射ぬかれて消え去つた。その紅い花は虚のものと、もうひとつ。  
明衣は急いで明良の元へ駆け寄る。

「明衣、明衣」

「わたくしは此処です」

すると明良は小さく微笑んで、明衣の腕の中で息を引き取った。

「イヤー！」

悲痛な叫び声が、今にも泣き出しそうな曇り空に木霊した。

奇しくも、出会いと別れが同じ曇り空の下。 共に行った初めての任務は、共に行った最後の任務になった。

「あの矢がもう少し早く虚に届いていれば……。 そう思う事が幾度もあります。」

姐さんは低い声で話を終えた。

「……………まだ、あの時に味わったあの人に対する消失感、自分に対しての無力感、見て見ぬふりをされた憤慨。 すべて今の事のように覚えております。 そして、助けなかったあの者たちに対しても、助けられなかった自分に対しても、まだ腹が立っていますわ。」

姐さんは再び隊長を見た。 その眼には、さっき一瞬見えたあの冷たい色が。

「短くすると、許せていません。そして今でも、あの隊を毛嫌いしています。他隊の死神までもが知つての通り。」

「姐さん。いい加減に・・・」

「ええ、わかっていきますわ。当時と今のあの隊が全く異なっていると言ふ事は。しかし、そんな事をすれば…。奏恵、貴女は何も思わないのですか。わたくしの彼を、貴女の兄を見殺しにしたあの・・・！」

「姐さんっ！」

「彼が守つた、あの見殺しにした者たちは彼を嘲笑つたのですよ。命をかけたと言ふのに。あの者たちは、まるでそうなた事が当然であつたかのように。あの、殺すことを楽しんでいる死神たちが、あの場にさえいなければ、彼が死ぬ事なんて！ただ、自分の娯楽の為にしか働かない奴らの事など放っておけば良いものを！」

「千田っ！」

「しかし、副隊長っ！」

副隊長は隊長の存在を姐さんに示す。

「・・・失礼しました。取り乱してしまいましたわ。」

姐さんと初めて会つてから早100年余り。こんな姐さんを初めてみた。

これだけ共に居たにもかかわらず、知らないことが多過ぎる。それくらい、姐さんは過去について語らない。

「奏恵。このような感情は今でも根強い。しかし、いけない

言ふ事はわかっているのです…。」

「…姐さん」

「私には、どうしようも出来ないのです」

「・・・するするのさらさら。」  
「！」

姐さんの目が見開かれた。

赤みを帯びた金色の長い髪には白く細い指が絡められている。

「夕日に光って真っ赤に見える。 明衣、お帰り」

「千田明衣、ただいま帰ってまいりました」

隊長は身を起こし、姐さんと目を合わせる。

「・・・それで良いんだよ。 でも、」

「でも？」

「・・・でも、僕は君が好きだからね」

その言葉を聞いた姐さんの瞳からあの色は完全に消え失せ、涙で濡れていた。

隊長の突然の言動に、一同は驚いた。

しかし、まだ寝足りなかったのだろうか。皆の注目を一身に集めている本人は、またすぐに眠ってしまった。

「やられてしまいましたわ。」

そう言いながら、姐さんは副隊長を見る。

「副隊長と同様に……わたくしも隊長に惚れてしまったようです。1人の魅力溢れる女性として」

「千田はそういう事だけは遅えんだよ」

「反省しておりますわ。これでも少しは良くなったのですよ」

「それは俺のおかげなんだろ」

「うわ、副隊長。よく自分でそんな事を言わはりますねえ……」

「いいえ、奏恵。その言葉は以前、そのような事をわたくしが副隊長に申し上げたのですわ。」

笑いが起きる。

今更分かった。姐さんが話さずともこの絆は崩れない。気にしていたのは、知りたかったのは、誰よりも私だったのだ。

「…姐さん」

「何ですか、奏恵！！いきなり泣き出さないで下さい」

姐さんが目に見えて慌てだす。

「姐さん、ギョっとして下さい。ごめんなさい、ゴメンナサイ」



「……。 甘えん坊さんですわね、奏恵は。」

そう言っつて、言った通り抱きしめてくれる貴女も、相当私に甘い。

「副隊長」

「どうした」

「この様なわたくしでも……」

「良いに決まっつてんだろ。 そうじゃなきゃ、隊長や俺が何かしらの手を打つてる。」

副隊長はそう言いながら、姐さんの頭に軽く触れる。 まるで小さい子供を慣れないながらに慰めるかの如く。

「……千田。 てめえはそう云う事ばかり考え過ぎなんだよ。」

「ああ、ダメですわ。 わたくし、泣きそう。」

「如月にでも泣きついとけ」

「あら副隊長。 そこはわたくしをギョ〜つと」

「姐さ〜ん。 副隊長には隊長がやはるし無理ですつて」

「如月……。 やけに元気になるのが早いな」

「そりゃあ、泣きまねですしね〜。 騙されましたか？」

「嘘のくせに。 よく言うな」

笑いが起きる。 新たな隊長が就任してから、笑顔が増えた。

まるで、一輪の花が焼け野原に咲いたのを絶望の中見つけたかのよう。 うに。

「皆、仕事に戻るよ。」

声の主は隊長。 寝ていた訳ではなかったのだろうか。

しかし、そんな事はどうでもいい。 隊長の顔が清々しく、嬉しそ

うだったから。

「はい、隊長」

本日も晴天。 新たな隊首室には笑顔で溢れています。

「失礼しまーっす・・・っで、ええ!!」

「うるせえぞ、阿散井」

「恋次、朽木隊長に言い付けるよ。六番隊の副隊長は礼儀がな  
ってない、ってさ」

「勘弁して下さいよ。それでこの前はえらい目に...っで、弓  
親さん！ 何asca、これ!？」

阿散井が驚くのも無理は無い。

九番隊の隊首室を訪れてみると、中は空。探し回ってようやく辿  
り着いたのが此処だ。隊の中心を担う五人が一か所に集まってい  
るこの光景を他隊で見ることはない。

「...阿散井。」

「何asca、先輩。」

「九番隊の隊長を馬鹿にしてんのか？」

「違います違います」

違うを連呼してきやがった。うぜえ。

「で、何だい。こっちは忙しいんだよ。言っただ資料は持っ

て来てくれたのかい？」

「あ、忘れて」

「恋次ー!!」

「弓親さん、止めて下さい。抜刀しないでー!! 先輩、弓親  
さんを止めて下さいよ」

「断る。悪いのはてめえの方だ、阿散井。」

「そんなあ、ギャー!!」

隊首室から逃げた阿散井の叫び声が廊下に響く。  
それを見送った後、千田が俺と白雲の方を見て口を開く。

「いつも元気ですわね・・・阿散井副隊長は。」

「檜佐木副隊長。阿散井副隊長はいつもあんな感じで…?」

「ああ、朽木隊長に対してもあのペースを一切崩さねえ。」

だからだろう。朽木隊長が阿散井を副隊長に指名したのは。  
まあ、他にも理由はあると思うが。

「恋次って、いつもあんな感じなの?」

「白雲と同じことを聞かないで下さいよ、隊長」

隊長は、逃げた阿散井を放って帰ってきたようだ。

「隊長の方が知ってるでしょ」

「それは、恋次が僕を五席として見る目だけだよ。隊首室に派  
手に入り込んでくるとは思ってもいなかった」

九番隊の中で、阿散井の評価が下がっていつている。阿散井、も  
っと頑張りやがれ。

「檜佐木、これどうするの? 六番隊は恋次が持ってくるとして、  
三番隊は?」

「吉良か…」

今、俺たちは瀟霊廷通信の編集集中。今は、何処の隊よりも忙しい。

「あとは、・・・って。」

「どうした、如月」

「一番隊を二番隊、四番隊からしか原稿がきてませんよ。 どうします？ 取りに行かんと、アカンのとちやいますか？」

「まずいね。 奏恵、その辺に居る隊士を連れてきて」

「はい」

そう言っつて、如月が連れて来たのは足立のみ。

「もつと居なかつたの？」

「隊長、怒らんとつてください。 皆忙しいみたいで…。 コイ

ツだけ、なんか…」

「俺はサボつてませんよ!!!」

「はいはい。 じゃあ、杜真は十一番隊と十二番隊に行かして。

私は・・・十番隊と八番隊に行つてきますよ。」

「ちよつと、五席！」

嫌そうな足立を余所に、如月はどんどん決めて行く。

「三番隊はどうします？ 噂では、最近吉良副隊長の姿を見たものが居ないらしいですよ。」

「俺が行く」

「じゃあ、ついでに檜佐木が十三番隊にも行つてきてよ」

「隊長。 それじゃあ、方向が逆じゃないっすか」

「気にははいけませんわ、副隊長。 わたくしは五番隊と七番

隊に行つてまいります。」

「いつてらっしゃーい。」

俺たちは白雲と隊長に半ば追い出される様な形で隊首室を出て行った。

#### 44 Un problema

俺は、十一と書かれた懐かしの門をくぐり、真っ直ぐ隊首室へ赴いた。

急いで戻って来いとは言われていないが、早い事に越したことは無いだろう。

「失礼しまーっす。 九番隊の足立です」

「おう、入れ」

「原稿を受け取りに来ました。」

隊首室の中には俺が思っていた通り、更木隊長の姿は無い。 二この空間は、もはや三席の部屋と化していた。

「すぐにできる。 待ってる」

「はい」

「「杜真ー！！！！」」

「滑引！！ 粗押！！！！」

どこから来たのか、俺は突然谷口に名を呼ばれて振り返った。 すると、2人は俺に抱きつく。 何の真似だ。 す

「うるせえ、外でやれ、外で。」

「「はーい」」

斑目三席に怒られて俺たちは隊首室を出る。 しかし、そう遠くを離れない。

「久しぶりだね、杜真。」 「霊術院で講師をやってた時以来だか

ら・・・」

「そう言っても二カ月ぶりとかだろ？」

「弓親隊長は元気？」「服部さんと会ってたりするの？」

「隊長は相変わらずだよ。服部さんはこの前までは頻繁に来ていたけれど、最近は顔を見てない。」

「へえ・・・」

「聞きたい事はそれじゃないんだろ？」

「やっぱり、バレましたか」「さすが、杜真。」「敵いません」「敵いません。」

「で？」

「怒らないですよ。」「オレたちは只、」「真実が知りたくってさ。」「これって本当なの？」

そう言つて、谷口が差し出してきたのは一冊の瀟霊廷通信。まだ持っていたのか。いつの話だ。

「本当に、こんな形で」「隊長が就任するなんてことが」「実際にあるの？」「本当なの？」

「嘘を書いてどうするのさ。」「ここに書いてある事はすべて事実。九番隊が皆さんにお送りする瀟霊廷通信は実際に会った出来事のみを掲載します。」

「おおー！ 九番隊の死神みたい！」

「つて、俺は九番隊の隊士だからねつて圭角けいかく！？」

「久しぶりだね、杜真。」

本当に圭角と会うのは久しぶりだ。あの日以来になる。

「圭角つたらささ」「コレを見てから」「拗ねちゃって」「宥めるのが大変、大変」

「うるさい！」

圭角が赤くなって怒る。

そうか、綾瀬川隊長の就任を通信を読むまで知らなかったんだろ  
うな。きつと。唯一（？）、十一番隊で真実を知っている谷口に  
も俺から口封じしたからなあ。

「まあ、会いたければ実力を付けるしかない。それは一番、圭  
角がわかって」

「わかってるよ。それくらい」

「出来たぞ」

三席が部屋から顔を出す。

「有り難うございます。これからは早めにお願ひします。で  
は」

俺はそう言いながら原稿を受け取り、瞬歩で去った。まだ、何か  
言われていたような気はするけれども。

次に来たのは十二番隊。絶対、五席は此処に来たくなかったか  
ら俺に行かせたんだ。間違いない。そう思いつつ、以前と同じ道を通っていく。

トントントン

扉を叩くと、中から人が出て来た。それは以前にもあった、十二  
番隊の五席だ。



「お久しぶりです、水無月五席。」

「あら、覚えていてくれたんですね。お久しぶりです。」

俺は一体、何度「お久しぶりです」を聞かなければならないのだろう。

「今回は……」

「前回の薬、どうでしたか？」

「あ、いや、それが……隊長が持っていて……。」

「あらまあ。それはそれで良いでしょう。実験した際は是非、結果報告をよろしくお願いします」

「あ、はい。えーっと、俺は今回、通信の原稿を……」

「今、持ってきました。」

待っていてください、そう言って五席は中へと消えた。

緊張が解け、俺は座りこみそうになるのを堪える。これさえ貰えれば、隊舎に戻れるのだ。

しかし、此処は何回来ても緊張する。なんというか、……兎に角緊張する。

「では、お願いします」

「確かに受け取りました。失礼しました」

俺は即、ここから逃げるかのように隊舎へと戻った。

また、厄介な土産を持たされるのは嫌だから

最近誰も、吉良の姿を見ていない。

その噂が本当ならばヤバいだろう。おそらく隊首室に引き籠った吉良を誰も引きずりだせずにいる、って事になる。

何やってんだ。アイツは。

大きく“三”と書かれた門をくぐる。すると、俺の存在に気がついた一人の隊士が駆け寄ってきた。

「檜佐木副隊長！」

その顔は疲労の色が濃いにも拘らず、言った声はハキハキとしたものだった。

その声で俺の来訪が解ったのだろう。其処ら辺から多くの隊士が顔をのぞかせる。その眼の色は皆、揃って混濁している、覇気がない。

「どうした」

「それが…先日から吉良副隊長の姿を見た者がいないのです」「いつからだ」

「短くて一週間かと…。お願いです、檜佐木副隊長。自分たちは吉良副隊長あつての三番隊であると思っております。いい加減、副隊長の顔を見たいのです。」

「わかった。とりあえず仕事に戻ってくれ、原稿は吉良か？」「ええ、多分」

「…それじゃあ、吉良を連れ出してきてやる」「…ありがとうございますっ」「…」

皆が勢いよく言ってきた。まだ大丈夫だ。皆は吉良を信じて待

っている。

とりあえず俺は、隊首室へと向かって足を進めた。

三番隊の隊首室。 何回も此処に訪れた事は無い。

吉良が原稿を遅らせた事もなければ、隊同士の際立った交流があったわけでもなかったから。

コンコンコン

軽い音を立てて、扉を叩く。 中に吉良がいる気配はするのだが…。

「吉良、原稿を取りに来たぞ」

「…………… 檜佐木先輩？」

中から帰ってきた声は弱弱しく、今にも消えてしまいそうで。

「開けるぞ」

心配になるじゃねえか。

俺は返事を待たずに扉を開けた。

鍵をかけていたと云う訳ではないらしい。

しかし、吉良の部下の事だ。 返事がなければ開けなかったのだろう。

「吉良！ てめえは…」

「まだ、原稿は仕上がってないんです」

そう言う姿は誰の目にも明らかかなほどやせ細っていた。 目の下に

は隈が出来ている。

俺は吉良との距離を詰めた。

以前と変わらない隊首室。机の上には何も置いていない。

「てめえ、何日隊士に顔を見せてねえんだ？」

「さあ、何日になるんでしょうか…？覚えてませんよ。やる  
ことが多くて、今さつき区切りがついた所ですから。皆、ちゃん  
と仕事しているでしょ？」

「ああ…でもな、吉良。隊舎の外では皆、もっと暗い顔して  
仕事してる。つらそうにな」

「それは、隊長が」

「吉良、原因はそれじゃねえ。」

「じゃあ、何だっけ言うんですか！」

普段の吉良なら、こんなに大きな声は出さない。  
開けたままの扉から、廊下に掛けて声が響く。

「ここの隊士はほとんどが隊長のファンみたいなものだって先日  
言ったでしょっ」

「隊長が居ない。それはほんの少しの要因に過ぎねえ。」

どんどん暑くなっていく吉良を抑えるかのように、俺は低い声で話  
す。

「吉良がこの部屋に籠りつきりだから心配してんだよ。」

「違うっ！！一番乗りで新たな隊長を迎え入れた、前の隊長と  
は完全に決別した先輩には解らない！うちの隊士は、僕なんて…  
っ！」

「ああ、わからねえよ」

水色の目が見開かれた。

「前隊長とは区切りをつけて心機一転して頑張ります。それはお前等から見れば確かに解せねえだろう。でもな、吉良。」

「……」  
「前進していかなきゃならねえんだ。いつまでも、戻らねえものを悔やんでも仕方がねえ。ここに居る隊士で、隊長が居なくなつたから三番隊を出て行くなつて言つた奴はいるか？ 吉良が頼りないからと言つて、てめえを無下にした奴はいるのか？」

吉良は小さく首を振る。  
五番隊や九番隊では、理由は何であれ抜けて行つた奴が少なからず居た。しかし、三番隊はどうだ。あの時のままの面子が揃つてゐるじゃねえか。  
羨ましい限りだ。

「それは隊長が好きだからじゃなくて、三番隊が好きだからだよ。今の三番隊が、だ。・・そして、それはこう考えられねえか？」

「……？」  
「今の三番隊が好きってことは、吉良。てめえに付いて行くつて事だよ。」

「え」  
「隊長が居なくなつて、辛いのはてめえだけじゃねえ。ちよつと来い」

俺は強引に吉良を引っ張つて、皆の仕事場に連れて行く。

俺が吉良を中へ引き入れると、肌で感じられるくらい、この場の空気が良いものになつた。  
やっぱり、な。

俺は吉良の両肩を掴んで、視線を合わせる。

「ちよつと、先輩。」

「吉良。 さつき、俺が途中で切った吉良の言葉の続き、」

うちの隊士は、僕なんて…っ！

「ここで、皆の前で言えるか。」

俺が手を放してやると、吉良は怯えたような目で皆を見渡す。

さつき、俺が此処に来た時とは違い、隊士たちの目の色が鮮やかだ。皆に、精気が宿った。

「副隊長…。」

1人の隊士が口を開いた。

すると、皆が好き好きに言葉を口に出し始めた。

「ちゃんと、食べてください。 ゲツソリじゃないですか」

「睡眠もしっかりと」

「俺たち、頑張ってるでしょ？ 褒めてやって下さい！」

「自分たちは副隊長に笑顔になってほしいんです」

「吉良副隊長！」

「…副隊長は、私たちの事が嫌いなのですか？」

鎮まった。 吉良へと視線が集まる。

それは、吉良と同じように眼の下に隈をつくっている者、目に涙をためている者。 さまざまな視線。

「そんな事、言う必要はないだろ…?」

細く小さくそう言った吉良は、顔を下へと向けてしまった。

「吉良副隊長！ 自分たちは、副隊長に付いていきますっ！！！！！！！！！！」

「今の三番隊にとって、副隊長の存在は大きいんです。 皆、副隊長が大好きなんですよ！！」

横に居る俺にしか見えない程度に、吉良の肩が小刻みに震えている。

「・・・僕もだよ。 有り難う」

上げられた顔は、涙で濡れていた。  
今度は吉良から目を合わせてきた。

「吉良、わかっただろ？ 隊長不在の今、頼れるのは吉良だけなんだ。 しっかりしろとは言わねえ、頑張れとも言わねえ。」

頑張っている奴に頑張れと言う事ほど、失礼なことはない。

「その分、皆を信じる。」

「はい。 すみません、先輩」

また、顔を下げてしまいそうな吉良の頭を俺は優しく撫でる。  
きつと、不安でいっぱいだったんだらうな。

吉良は今まで、誰にも頼らず走ってきた。 あの件が、あのような形で終息した事によって、今まで張っていた緊張の糸がプツンと切れてしまったのだらう。 そのシワ寄せが一気にきた、それだけだ。

「たまには俺に甘えて来い」

「・・・ひ、さぎ、、、先輩ツツ！！！！」

「あー、もう思う存分に泣け！」

頭を軽く抱きしめてやると必死に継りついてきた。まるで、千田じゃねえが、大きな子供だな。

三番隊に少しだけ、笑顔が戻った。

これは間違いなく

三番隊での吉良の存在の大きさを示している

俺は、そっとソファに寝かしつける。

決して起きたりしないように。丁寧に、静かに。

「申し訳ありません。 檜佐木副隊長」

「いや、良いって。 此处に寝かしておくから、当分起こさないでやってくれ。」

皆の前で泣きつかれたのか、あるいは余り寝ていなかったせいでもあるだろう、吉良はその場で眠ってしまったのだ。その後、起きる気配は全くない。

「…原稿は皆で適当に仕上げてくださいねえか？」

「内容はどうすれば……？」

「良いのが思いつかなければ、なんでも良い。 何かの観察日記



でも、なんでも」

「わかりました。 出来上がり次第、九番隊に持っていきます」

「ああ、助かる」

そう言っつて、俺は隊首室を後にしようとする。

「あの、」

「どうした、まだ何かあるか？」

隊士に呼び止められた。 問題は吉良の事だけじゃねえのか？

「ありがとうございます。 私たちにとって、吉良副隊長は…」

「あーあー。 わかってっから。 そう言う事は、吉良に言っつて

やれ。 じゃあな」

「はいっ」

後ろ手を振りながら俺は隊首室を後にする。

少し疑い過ぎたか。 まあ、可愛い後輩の役に立てた事は良かった  
だろう。

十三番隊。

浮竹隊長が行くたびに茶菓子を用意してくれているので、なんとなく行きづらい、そんな隊だ。良い隊であることに間違いはないのだが、その気遣いが…。

トントントン

三番隊とは違って、少し重い音がする。

「九番隊、檜佐木修兵ですが…」

「檜佐木君か。さあ、入って入って。実は原稿、まだなんだ」

思っていた通りだ。机には、茶菓子が置かれていた。その奥には、嬉しそうな浮竹隊長の姿が。

「お茶でもどうかな？」

「あ、俺が入れますよ。座ってて下さい。」

「何か悪いね。わざわざ来てもらったのに」

構いませんよ、と言いながら俺はいつも九番隊でもやっているようにお茶を入れる。

「失礼します。」

「朽木か、どうした？」

「はい、死神代行の黒崎一護が・・・え？」

朽木の言葉が止まった。

「ああ、檜佐木君だよ。 どうした？」

どうやら、朽木は俺の姿を見て固まってしまったらしい。

「いいえっ、何でもありません。 で、その……一護がですね……」

「そうか。 それって誰かに言った？」

「いいえ、浮竹隊長が初めてです。」

「そうか……。 ああ、すまないね。 ありがとうございます」

「いいえ。 朽木もどうだ？」

「あ、ありがとうございます。」

そう言っつて、俺は2人にお茶を渡す。

何かさつきから、朽木の様子がおかしい。

「先生の所へ行つてくるよ。」

「あ、浮竹隊長。 原稿は……？」

「……行つてくるね。 朽木、それを片付けておいてくれ」

「ええ！？ 隊長??？」

「ちよつと、浮竹隊長！？ ……たく、朽木。」

俺は朽木の方を見る。

「今から時間あるか？」

「大丈夫ですが……。」

「浮竹隊長の代わりに原稿を書いてほしい。」

「ええーっ！ 私がですか!？」

朽木は黒く大きな眼を真ん丸にする。

「ああ、他に誰が居る？」

「いいえ。 此処には私だけで誰も居ませんが……。 その整理もあるのです……」

「じゃあ、決定だ。 何か良い題材はねえのか？」

「ええ！ ……そうですねえ……。」

考えている姿も、どこかあの義兄の姿を思い出させる。

本当に義兄妹か。 似ているところが他の兄弟よりも多いように見える。

「？ どうされましたか？」

「いや……。 朽木隊長と似てるなあ……。 なんて」

「っ！！ それは本当ですか！ ……嬉しいです」

本当にうれしそうな朽木を見て、俺の顔に自然と笑みがこぼれる。

阿散井が言うよりも、素直そうな少女だ。

「じゃあ、原稿は任せた。 誰かと協力して仕上げてくれ。 ……」

十三番隊の三席たちはどうした？」

「えーっと……、外部へと任務に出て……」

「だからか。 俺がこれの整理すつから。 原稿の方に手を付け

て欲しいんだが……」

「ならば、この朽木ルキア。 やりましょう。」

そう表明した朽木は隊首室を出て行った。

「頼もしい奴だな」

十三番隊の隊首室で1人、俺は紙の山と向き合うことになった。

受け取った資料の分厚さはそれほどなく。しかも難なく手に入ったので、思っていたよりも早く隊首室へ帰って来ることが出来た。

「如月奏恵、只今戻ってまいりました。」  
「おかえりなさい。」

隊首室の横開きの扉は開けられたままで、中の窓も開いているので風の通り道が出来ている。

隊長の向かい側、窓際には姐さんの姿が。窓から入る夕日が、姐さんの髪を一層赤く輝かせている。

「はい。用意は出来ていたけれども、持って行くのが面倒だったらしいですよ。」

「またですか？ 懲りないものですね…。隊長」

「うん、僕から伝えておくよ。」

「有り難うございます。…それにしても、副隊長は遅いですわね。」

「そうだね。でも、問題があった訳ではないだろうし。」

「それもそうですね。仮にも副隊長ですし」

「おい、仮にもって何だ。如月」

「あ s f h j d z d n g m j h h n x b z v d ! ! ! !」

驚き過ぎて、何が言いたいのか、何を言ったのかが自分でもわからない。

振りかえると、そこには副隊長の姿が。

私を軽く無視して、副隊長は隊長の傍へ行く。

「三番隊、十三番隊。共に原稿はまだらしいです。両隊とも、出来上がり次第持つてくるように言いました。」

「三番隊はどうだったの？」

「噂通りでしたよ。でも、もう大丈夫ですよ」

「そっか」

納得した風な隊長が私の傍に来て、私から原稿を受け取った。

「じゃあ、俺は十三番隊に行つてきます」

「なんですか？ 副隊長。何しに行くんですか」

「浮竹隊長に仕事を頼まれて……」

そう言いながら副隊長は顔を私の方に向けたまま、隊長を横目で見る。

まるで様子を窺うかのように。

「構わないよ。行つておいで」

「行つてきます」

隊長はそつと、言葉で副隊長の背を押した。

それは私に、前の隊長を思い出させるのには、十分な言動だった。

今でも尚

残りし者の中に在り続ける、亡き者の面影

それは時に

生きし者を縛り付け、暗き闇に押しこめる

十三番隊の隊首室。

今、ここには九番隊の副隊長が浮竹隊長に代わって業務をこなして下さっている。

それは解っているのだ。しかし……。

「失礼します。……。」

一瞬、錯覚に陥ったかのように感じる。

「どうした？」

そう言っただ顔を上げる様は、今は亡きあの方と重なってしまっ

顔立ちがとても似てなどは居ないのに、この人が持つ雰囲気も全くと言っても良いほど異なるのに。

黒髪の短髪だからだろうか。

それとも、その腕に副官章があるからなのだろうか。

「いいえ……原稿仕上がりしました。」

「ありがとな、朽木。じゃあ、これが済んだら帰るわ」

「いえ、後は私がやっておきます」

「そうか？ だったら一緒にやるか。その方が早く終わるだろう？」

「九番隊の方はよろしいのですか？」

「大丈夫だ。隊長にもちゃんと伝えて来たからな、問題ねえって」

「はあ……。」



笑った姿もとてもは似ていない。  
ならば、何だ。何がそんなに私を錯覚させるのか。

「今戻ったよ。悪かったね」

そう言つて、隊首室に入ってきたのは十三番隊の隊長。

「おかえりなさいませ、浮竹隊長」

「お、朽木が代わりに書いてくれたのか？」

「拙い文章ですが……」

「大丈夫。問題があれば、檜佐木君が修正しておいてくれるから、ね？」

「ええ、修正しておきますよ。」

「ありがとうございます。」

気にするな、と言つて檜佐木副隊長は私の頭を乱暴に撫でる。  
なぜか妙に、その感触が懐かしくて。それが余計に拍車をかける。  
ダメだ。  
なぜか今日はよくあの方を思い出す。

「？ 檜佐木君がやってくれていたのかい？」

「あ、はい。一応見直しておいてくださいよ。あと、これだけで終わります」

「檜佐木副隊長、後は私がやっておきますので」

「え？ ちよ、朽木??」

私は追い出す様な形で、檜佐木副隊長を部屋から押し出した。  
浮竹隊長は不思議そうな顔で私を見ている。

「おい、朽木。」

「あとは私だけで十分ですっ」

「わかったから、原稿」

「っ！！！！」

多分、今の私は顔が真っ赤になっているだろう。

檜佐木副隊長に原稿を押しつけて、乱暴に隊首室の扉を閉めた。

「朽木、強情は良くないよ」

「…はい。」

「どうした、何かあったのかい？」

優しい笑顔で問いかけてくる浮竹隊長の顔を見ると、何もかもが見抜かれているような気分になる。

「いえ、おそらくコレは私の気持ちの問題ですので…」

「？ 檜佐木君にでも惚れたのかい？」

「い、いいいい、いえ！ ちっ、違います。」

「そこまで否定しなくても良いだろう。 檜佐木君が不憫だよ」

「いえ、そのようなつもりは…ただ、」

隊長は何も言わずに、私の次の言葉を待って下さっている。

「ただ、檜佐木副隊長が海燕殿と重なって見えてしまっ…」

同じ所も、似ている所も見つからないと云うのに「

窓から入る風が、頬を冷たく冷やす。 日はもうすぐ地平線に沈む。

長い沈黙。

それを破ったのは浮竹隊長だった。

「…それは、朽木が海燕の面影を無意識に檜佐木君に重ねているんじゃないかな。」

「え？」

そんなつもりは、一切なかった。

「お茶を入れている彼を見て、一瞬懐かしく感じたんだろう。それで、次は仕事をしている彼を見た。」

そして、私の頭を撫でた彼が居た。

「重なって見えた、のではなく。朽木が重ねて見ていたんだよ。」

衝撃だった。

「確かに、檜佐木君は何と無く海燕と似ているかもしれない。それに、副官章を付けていて黒髪の短髪は今の護廷には檜佐木君しか居ないからね。朽木が重ねて見てしまうのも無理はない。．．でも、それは彼に対して失礼だよ。」

隊長の言う、彼、とはどちらを指すのだろうか。

「朽木。誰にでも良いからね。甘えたいのなら甘えても」

良いんだよ、そう言って隊長は私の頭を大きな手で優しく撫でる。先ほど私がされたのは違って、まるで撫でつけるように。

「ありがとうございます」

身近な優しさに、私は久しぶりに泣きそうになった。

原稿が揃った。後は製本をして、配るだけ。皆がせつせと手を動かしている。

「三番隊は、副隊長が十三番隊へと戻って行かはずの直後に持つて来はりましたよ。しかも、吉良副隊長が直接。痩せてはやつたけれど、顔はどつか晴れやかでしたよ」

「そうか、それは良かった」

奏恵は戻って来たばかりの檜佐木に先ほどの事を話している。

ふと、僕の耳に悲鳴が届く。しかし、それは直接頭の中に入つて来るような感覚で。

周りの皆を見ても、これに気が付いている者はいないようだ。

ならば、間違いない。

雛罌粟が悲鳴を上げている。

それはそれは、悲痛な。音にはならない悲鳴を、僕にしか聞こえない悲鳴を上げている。

彼らは一体、何を僕に必死になって訴えているのだろうか。

深く考えず、僕は今思った事を口に出す。

「誰かが、芥子畑にいる。」

突然僕がこんな事を言ったものだから、檜佐木たちは驚いてこつちを見た。

そして、その真意を確かめるかのごとく、皆は霊圧を探っている。

「九番隊の隊士じゃねえな。誰だ？ 遠過ぎて解りずれえ」

不思議そうに檜佐木が首を傾げる。  
彼は、九番隊の隊士全員の霊圧を完璧に覚えているとでも云うのだろうか。

「・・・芥子の花つてさ、確か麻酔に使ってた。とか前に話してくれたよね」

「ああ。四番隊の隊士が使えば麻酔。それ以外の隊士にとっては麻薬。それ以外の者があの植物に触れる事は許されてはいない。」

「…じゃあ、今畑に居るのは何なのさ」

「これは問題ですね」

「行かないと…檜佐木、ついてきて。皆はここにいる」

「わかりました」

僕たちは急いで隊首室を出た。

不審人物が誰なのかを知る為に。何か起きた後では、遅い。

手遅れだ。

まだソイツは其処に居た。春風が吹く中に。

熱心な様子で、手元の大きな袋に何かをせっせと詰め込んでいる。

「あれは？」

僕からではあれが誰なのかがまでは見えない。動作くらいだけだ

「チツ、あれは…。どうします？」

しかし、修兵は解ったようだ。

僕たちは相手に見つかからないよう、霊圧を消し、気配を殺し、そして小声で話す。

「丁寧に根から抜き取ってるね。余所で栽培でもされちゃ困るね」

「そうっすね……ここは一旦引くか。今すぐにもでも取り押さえてしまっても良いが、他に仲間が居ないとも限らない」

「そうだね。総隊長の支持を仰ぐ。」

修兵は僕の言葉に頷く。

「修兵は隊首室へ戻って、適当に誤魔化しておいて。今見ている事をまだ誰にも話してはいけないよ。余計な噂でも広がられると、後々が大変なことになるからね……。僕は今から総隊長の所へ行って来る」

「わかりました。総隊長にも詳しい事は話して来ないで下さいよ、それは俺と一緒にしましょう」

「大丈夫、始めからそのつもりだったし。それに、今の僕は状況が飲みこめてない」

今はここで一旦、解散。

修兵がこの場には居なくなつたのを確認して、僕は総隊長の居る一番隊の隊舎へと急いだ。

まだあの場所には、熱心かつ丁寧に芥子を袋に詰め込むヤツがいる。

ひらひらと不安定に地獄蝶が待つて来た。

それを修兵が捕まえて、差し出した僕の右人差し指へ留まらせる。

「只今より半刻後、隊首会を行う。各隊の隊長、副隊長は至急に集合せよ。」

それだけを告げると、蝶は飛んで行ってしまった。思っていたよりも、早い招集。

修兵は何も言わず、僕を見る。

「隊首会だつてさ。」

「…」

「面倒なことにならなきゃいいけど。」

「はい」

「そんなに不安そうな顔をしないの」

とても子供っぽい表情になっている修兵に向かって僕は言う。

先ほど、総隊長に僕たちが見た事を報告した。

すると「早急に処置をとる」との返答だけで追い返されてしまったのだ。

そして今に至る。

「君もだから」

「へ？」

「へ、じゃないよ。」

副隊長にも集合がかけられてるから、時間は半刻後」



「わかりました」

修兵は嫌そうに立ち上がる。

「白雲たちに置手紙でも残しておきますか」

今頃、三席と四席は通信を片手に走り回っているだろう。

五席は呼び出されたとか言っつて、霊術院まで駆けて行ってしまった。

「・・・任せた。先に行ってくる」

「はい」

いつもなら開け放たれた襖の向こうから駆けて行く。でも今日は

扉から出て行く。

すると、そこには九番隊の隊士が。

「どうかした？」

「あ、いえ。」

「気になることがあるなら言いなよ」

「...隊長」

隊士は扉を閉めて、僕に向き合った。修兵には聞かれなくなかったのだらうか。

「・・・綾瀬川隊長。俺は貴女を九番隊の隊長として尊敬しています。そうじゃないヤツも多いですが」

「それが？」

「俺は、いえ。今の九番隊は貴女のお陰もあつて大分立ち直りました。しかし、小さい傷はまだまだ残っています。檜佐木副隊長は、貴女が来るまで、そんな俺たちを励まし続けてくれていま

した。だから、お願いです。」

真正面から僕の目をまっすぐに見つめて言う。この言葉達には偽りなど存在していなさそうだ。

「俺たちの為に、なんて事は俺からは言えません。さっき言っただよつに、貴女の事を認めていないヤツもいなすから。でも、せめて……俺たちの副隊長の為に、約束して下さい。」

「…何」

「突然、九番隊から居なくなったりしないでください」

「…どうして今言ったの、何かあった？ …何か言われたのかい」

「い、いえ。」

「十一番隊、だね」

「…はい。副隊長の悪口を…」

「はあ〜。どうしようもないね、君たち。彼らの言う事なんて気にする必要はない。本気で思っているなら僕に言いに来るさ、直接ね。君が九番隊の隊士なら、君たちが檜佐木副隊長のことをそんなに大切に思うのなら、」

僕は扉に手をかける。

「信じてるって、頼りにしてるって、直接言いな。大好きだつて、泣き叫べばいい。ほら、」

いきなり開けたものだから、中に居た修兵は驚いたようだ。隊士も吃驚している。

「何かあったんすか」

「彼が君に言いたいことがあるんだって、ね？」

僕は隊士の背中をそっと押す。

「どうした？」

「あ、あの副隊長。俺たちは副隊長が好きですっ！」

目を丸くした檜佐木の顔を見て、僕は笑いだしそうになるのを隊士の後ろで必死に口を塞いで堪える。

「・・・隊長、なんすか」

「はやく答えてあげなよ・・・」

「…俺も、てめえ等が好きだよ。」

「ありがとうございますっ！ 隊長、貴女の事もですよ」

「何？ その付け足しみたいなのは」

心底嬉しそうな隊士の笑顔に免じて今回は許そう。

「安心して、僕もだよ。でも、檜佐木修兵、君は嫌いかな」

「え？」

隊士はバツと檜佐木を振りかえる。

「お、気が合いますね。俺も嫌いですよ、綾瀬川弓親が」

「ええー！ 先が思いやられますよ、というか仲が良いんじゃないかな  
かつたんですか」

「おい、そんな事、誰が言った」

「そうだよ、少なくとも本人はそんな嘘を吐く必要はないからね。

あ、もう時間だ、行くよ」

「わかりました」

檜佐木は僕の横に立つ。

「行ってくる」

「はい……………」

僕たちは急いで隊舎を出て行った。

「そうやって2人で行動するから勘違いされるんですよ…。」

「あのみ」

「ギャツ」

「そんなに驚かなくても良いんじゃない？」

「申し訳ありません。隊長、何でしょうか」

本当に驚いている隊士に申し訳なく思いながら、言うべきことだけを伝える。

「さっきの約束」

「ええ。居なくなったりしないで下さい」

「…今の僕に言える事は、善処する。それだけ」

「っ！ 隊長!！」

「わかったから、はなして」

そう言うと、とっさに掴まれた腕が解放された。

期待に沿った答えは言えない。今の僕に言えることは一つだけ。

「少なくとも、僕の意味で居なくなったりはしない。…もし

僕が居なくなった時は、僕の意味じゃないから。」

ウソはつかないこと。

呼び出されて来た場には、ひとり長谷川先生が居た。

「先生、何ですか？」

仕事が一段落したので、これからゆっくりとしたかったのだが、昔の恩師に呼び出されては出向かないわけにはいかない。こんなこと、正直言って面倒くさい。はやく帰りたい。

「如月君、来てくれたんだねえ。新たな隊長を迎えて初めて季節が変わったけど、最近調子はどお？」

そんな話をする為に私を呼んだのか。気の良いこの教師ならそう考えられるが、今は何となく違う気がする。何がって、私を見るその目が。

「変わりませんよ。誰が隊長でも、やることはだいたい変わらないですから。慣れたものです」

「そっかあ。出来るようになったんだねえ。九番隊、第五席。」

私は先生を真正面から見ると。

何だか、嫌な事が起こりそうな気がしてならない。

「君を見つけた時からさあ…：適当にどっかの席官にして、良い様に利用しようとしていたんだあ。席官に、しかも九番隊の席官になって結構経つから、今が丁度良い頃だと思っていたけれどもあ。」

今、コイツは何と言った。  
利用しようとしていた、この私を？

「どうやら遅かったようだねえ。いつも見極め損ねるんだあ」

先生にバレない様に地獄蝶を部屋の中に飛ばす。今の状況を一言一句逃さず、副隊長に伝えて欲しい。

今まさに、実行犯が供述を始めたようなものなのだから。

「長年教師をやっているのも疲れるんだよ。出来の悪いの、良いの。まちまちでさ。しかも、こつちには特に出来の悪いのばかり回って来るから」

「だから、手を抜いていたとでも言いたそうですね」

「本当に賢くなつたねえ。その通りだよお。」

こんな事を言う先生を始めてみた。こんな顔をする先生も始めてみた。

私を、他人を完全に見下している。何が言いたいんだ。

「それじゃあ、今言った事を他人に知られちゃったら先生はマズイって事もわかってるよねえ？」

「ええ。私は今すぐにでも今仰られたことを摘発しようかと」

「たかが五席の小娘に何ができる」

「あら、不安になってきはりました？ もう、副隊長には先生が生徒を叩き飛ばしてはった事は報告済みなんで」

…そういえば、あの娘が最近来ていない。元気にしているだろうか。

「…、でも今言った事や沢山の事はまだ知られていないからねえ。」

「あら。まだ、何かあるようですね。」

まだ何かあるのか。あの娘に何かしたのか、それとも金でも絡んでいるのか。

「話してください、楽になれますよ」

「確かにまだあるよお。でもねえ、話してあげないよお。たとえそれが…出来の悪い教え子でも、可愛い教え子でもねえっ！！」

そう言うと、先生は瞬時に私の背後に回り込んだ。

今まで見た事がないほど機敏に動く先生に、私は完全に後れを取った。マズイ。

「縛道の六十三、鎖条鎖縛かじりくわく！！」

「ッ！」

後ろから動きを封じられた。

これで私は、抜刀する事も鬼道を放つ事すらできない。情けないの一言に尽きる。

「はあ…．．．．．やっぱりまだまだだねえ。九番隊の五席になれたのも奇跡みたいなものだからねえ。如月君、実力ないしねえ？…そっかあ、上手い事言っ自分を買ったんでしょお。どうやって副隊長に媚び諂ったのかなあ？」

違う！

反論したいが、現状が物を言わせてくれない。そんな事を言われ

て当然な結果だから。

悔しくて唇を噛む。

何とかしなければならぬ。でも、この術は素手で千切れるほど  
軟なものではない。

すると、先生が足音を立てて近づいてきた。

「まあ、現実を気付かせてあげるのも教師の仕事だからねえ。」

長谷川先生はそう言いながら私の顎を掴み、首だけを自分が見える  
方向に向けさせた。

至近距離で目が合う。

この教師はこんな目をするような先生だったのだろうか。その眼  
はまるで、獲物を見つけた獣のようで。

「白伏」

その言葉が聞こえたのが最後。私は一瞬にして、意識を失った。

ほら

やっぱり嫌な事が起こった



各隊の隊長が並ぶ場に、今回は副隊長も並んでいる。

重々しい空気が場を包む。

それなのに、この場に居ても不快ではないのは、一重に十一番隊の副隊長の存在のお陰だろう。さっきから、せわしく走り回っている。

総隊長が入ってきた。皆一斉に中央を向く。

その口から発せられるかと思われた声は、直接は聞こえてこない。

天挺空羅。

【副隊長をこの場に呼んでおきながら済まないが、隊長たちのみに伝えたい。許してくれるかのお?】

状況がつかめていない副隊長たちは皆キョトンとしている。しかし、総隊長は言葉を続ける。

【先日・・・】

そこに、ひらひらと地獄蝶が舞ってきた。それに総隊長の言葉も止まる。

皆の注目を集めながら、檜佐木の指に優雅にとまった。

「長年教師をやっているのも疲れるんだよ。出来の悪いの、良いの。まちまちでさ。しかも、こつちには特に出来の悪いのばかり回って来るから」

「だから、手を抜いていたとでも言いたそうですね」

「本当に賢くなったねえ。その通りだよお。」

聞き覚えのある声が聞こえる。

〔白伏〕

マズイ。 如月がつかまった。

檜佐木が僕を見る。 僕は総隊長を見る。

「九番隊に任せる」

その言葉さえあれば、こっちは自由に行動できる。

「畏まりました」

僕は檜佐木と共に、この場を後にした。

上からの許可が下りれば、自己責任の元で自由に動く  
それが今、自分に出来ること

やらねばいけないこと

とりあえず、隊舎へと急ぐ。

状況を説明する相手は最小限にして、情報漏洩を可能なだけ抑える。

「修兵。今から霊術院まで行って、服部家の養子を探してきて欲しい」

「わかりました。」

優秀な副官はすぐに進行方向を切り替えて去っていく。  
自分は隊首室へと飛び込む。

突然の事に驚いているようだが、そんなことに構っている暇は無い。

「おかえりなさいませ、早かったですね」

「九番隊第三席、白雲航平」

「改まって何ですか？」

「今日一日、資料仕事に関する隊長の権限を君に委ねる。」

優秀なのは副官だけではない。三席も賢い。  
全てを話さずとも理解してくれる。

「お気をつけて」

「明衣、知りたいことがあるから。来て」

「わかりましたわ」

明衣を連れて外へ出る。そして誰も居ない様な、誰も来ない様な場所を選ぶ。

「何でしょう」

先に口を開いたのは彼女だった。

「奏恵が五席になった時、明衣は？」

「すでに四席でしたわ。あの時、奏恵が五席になったことで九番隊の隊士は少なからず驚いたようでしたわ」

「服部錯が五席になると思い込んでいたから？」

「ええ。なので、奏恵が副隊長に取り入ったのではないかと言いだす愚か者まで出てくる始末。ですが、上位席官は副隊長の考えに反対しませんでした。そして、隊長の決定に素直に従いましたわ。なぜなら、服部は九番隊の五席の器では無かったから。」

各隊によって、席官の役割や立ち位置が異なる。実力はあっても、その隊の色に合わなければ昇格は難しい。

「奏恵の方が適任だろう。その意見で上は一致していたのです。それに、悪い噂を持つ者が五席になれば、隊の信用性が損なわれますわ。」

「それは檜佐木も言っていたよ……。」

「ええ、これは後になって分かった事なのですが……。」

「何」

「服部は金で官位を手に入れようとしていたようなのです。ですから、後に死神を止めているのですわ。」

「……。」

以前に聞いた情報と、新たに手に入れた情報。そして、今知っている情報を交錯させる。つまりどう云う事だ。

「……」  
「？ 隊長??」

突然襲う耳鳴り。 頭の中に流れ込む悲鳴。

「場所を移すよ」

「真つ青ですわ。 大丈夫……」

「いいから」

僕は明衣の心配を余所に急ぐ。

大人しくついてくる四席を確認して、僕は静かに降り立つ。

満開に咲き誇る雛罌粟の花。

その中央には2人の男の影。

「気付かれない様に。」

僕は明衣に背を向けたまま言う。

「取り押さえるよ」

明衣は小さく頷いた。

担任の居ない二年生の教室。

今は、さっきまで隊首会に出ていた雛森が授業をしている。 すぐ  
にこちらに来たのだろう。 教壇に立つ姿は、まだ全快とは言えな  
さそうだが、元気そう。

気を使わせないためにも、気付かれない様に中を覗く。

目当ての少女の姿はそこにあつた。

以前見た時よりも細く、腕には包帯が巻かれており、目の下にはテープが。傷が多過ぎる。

トントントン

「雛森。服部を借りるぞ」

「え、はい、檜佐木副隊長。服部さん？」

「はい」

俺は何も言わず、気まずそうな服部を連れ出す。人気のない所に来てから、俺は立ち止まり、振り返る。

「その傷、どうした？」

「あ、これは…。」

「長谷川か」

「はい」

「心配しなくて言わねえよ。話してみろ」

疑っているのか、話していいのか迷っているようだ。白い瞳を覗きこむ。すると、急にその眼が赤くなった。目の裏に流れる血流量が増えたようだ。

「家でも、学校でも…」

それだけ言うと、目から大粒の涙が流れだした。二年生にしては大きい霊圧が不安定に揺れる。

「十分だ。」

おいで、と言うと素直にこっちに来る。抱き上げて、隊長の気配を探る。

隊長の霊圧は全くと言っても良いほどに消し去っている。

この少女を連れていくべきか、どうしようかと悩んでいると少女と目があった。

「どうした？」

「あの、歩けますから」

「いや、こついう時くらい甘えろって」

「はぁ……。っ!」

隊長の気配が動いたことを確認して、俺はその場へと急ぐ。

遂に、事が大きく動く

風が吹く。

雛罌粟の花が共に揺れる。

「雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ」

女の声が凜と響く。

「縛道の六十一、六杖光牢りくじょうつ！！」

2人の人間を一気に縛る。

「縛道の六十三、鎖条鎖縛！」

その上から、鎖で縛りあげる。

「誰だっ」

言ったのは女の全く知らない相手。

「あれえ、いつかお会いしましたよねえ」

間延びした声で言ってくるのは女がいつか会った相手、霊術院教師・長谷川大樹。

「ええ、まさか覚えて下さっていたとは思いませんでしたよ」「でも霊術院の学生じゃあ・・・」



「ありませんでしたよ。僕はいきなり護廷に、十一番隊に入つたので。あ、申し遅れました」

今になって、取り押さえられている2人は彼女が白い羽織を羽織っている事に気がつく。

それを着て良いのは護廷の中でも一握りだけ。

「九番隊隊長、綾瀬川弓親です。」

「!？」

「つつつ!」

2人は目を丸くして、恭しく名乗る弓親を見る。

「長谷川先生、服部さん。お久しぶりです。」

「千田……」

「明衣」

そして2人の注目は、弓親から明衣へと移る。

「この袋の中身、どうするおつもりで？」

そう言つて明衣が広げた袋の中には、ケシの花が丁寧にかつ大量に詰め込まれていた。

「…霊術院も出ていない様な女を隊長にするなんて、九番隊も落ちたな」

質問に応えず、口を開いたのは服部錯。

「前隊長の裏切りに続き、そんなに人が足りていないのなら、こ

の服部錯が隊長になってやったと云うのに」

「あら、そんな器の持ち主には見えないのは、わたくしの目が悪いのでしょうか…。」

「なんだと…。」

服部の言葉には続きがあるようだが、明衣は無視して長谷川と向き合う。

「先生、さっきのわたくしの質問にお答えください。 どうする

おつもりで？」

「決まっているだろう？」

「なら、現行犯逮捕ですわね」

「こんな女に隊長の座を渡すとは。 芝居も良い所だ。」

服部が再び騒ぎだす。

「隊長の名を持ち出して脅そうとでも云うのだろう。」

いもつと  
義妹と云

い、姉と云い…。」

「奏恵がどうかしたのですか？」

「っ！ 何だこれは！！」

縛られている2人に、何か蔓状のものが巻きついている。縛道が解かれた。

「僕さ、お喋りな男って別に嫌いなわけじゃないけれど」

明衣も驚きを隠せない。 蔓を辿っていく、それは。

「内容のない、おもしろくもない話はゴメンだね。」

弓親の手元。

正確には、握られた斬魄刀。

その弓親から発せられる殺気は、死神になって長い明衣すら臆するほど。

「安心して、殺しはしないよ。」

「……隊長」

弓親を呼ぶ声が重なる。

「遅かったね、檜佐木」

檜佐木の腕の中には白色の少女。

「派手にやってますね」

「明衣は驚いているけど、君は驚かないね」

「十分驚いてますよ。あの綾瀬川弓親が人前で始解していること」

「あ、しまった」

「・・・何やってんですか」

あろう事か、弓親は服部錯を逃がしてしまった。

「とりあえず、」

「そうだね。明衣、檜佐木と一緒に戻ってて。檜佐木は、わかってるよね」

「了解しました」

三人が去っていく。

それを見届けてから、長谷川が口を開いた。

「それでも本当に隊長なのお？」

「ええ、逃がしたのもわざとですから」

「だろうね。だって、立て続けに放たれた縛道は一気に2人を絞めず、1人ずつだったからね。そして、鎖条鎖縛はまだ効力を失っていない。」

弓親が刀をしまう。すると、長谷川が言った通り、まだ鎖は消えていなかった。

「何が目的なのかなあ？」

「・・・確実に君は服部錯に裏切られるね。今、彼は逃走経路まっしぐらだから」

「::。」

「うちの五席を返してもらおうか」

「あんな、実力のない五席をお？」

「実力なら十分::。あ、返してもらおう必要はなかったみたいだね」

「いらないんでしょお？」

「いいえ」

弓親は空を見上げている。

同じように、長谷川も空を見上げた。そして、弓親の言い分を理解する。

「::前言撤回を願いますしょうか」

低い声。

それは弓親ではなく、人よりも細身の斬魄刀を持った1人の女。

「君はいつまでたつても可愛い生徒なんだよ。出来が悪い子ほど、可愛い。それは如月君の為にあるような言葉だと思ってるんだよ。」

「それは、本音だと信じてますよ」

そこに黒き蝶が舞ってくる。それは弓親の手に留まった。

「如月奏恵、君に任務だよ」

「なんなりと」

弓親は言いにくそうな顔をしているが、真っ直ぐ奏恵を見て言う。

「罪人、長谷川大樹を処刑せよ」

奏恵の目が見開かれる。まさか、そんな内容だとは思ってもいなかったのだろう。

たしかに、罪の割には刑が重すぎる。

「六十六室からの、決定ですか」

「みたいだね。さっそく、服部錯が裏切った様だよ。どうする、言い訳なら今のうちに言っとけば？」

「…九番隊、隊長に密告か。いいねえ、そうしようじゃないか。」

長谷川大樹は、この先に死が訪れると云うのに臆する様子も無く話す。

「初めにこの話を持ってきたのは彼だよ。」

罪人の口から語られるのは、真しんか偽ぎか。

見極める

「服部錯は何が何でも九番隊で上位になりたかった。その為に、色々な手段を取っていた。それが明るみに出たのが、如月君。君が五席になる、あの時だよ。」

いつもの口調はどこかにいつてしまつて。いつになく真剣な様子で語る長谷川を見て、奏恵は動揺を、驚きを隠せない。奏恵が九番隊に入ったのは、そこには院生時代にあこがれの念を抱いた男、服部錯がいたから。

「九席に上がるまでも色々やっていて、遂にバレちゃつたんだよね。それが副隊長の耳に入ったものだから余計に分が悪い。でも、副隊長は確信が無かつたんだろう。無理に止めさせたりは出来なかつたみたいだね。」

黙つて聞く弓親。  
だんだん涙目になつていく奏恵。

「錯がのし上がった方法、具体的に言うと、それは賄賂。服部錯はあの時も金で五席になろうとしていたんだ。」

「…どうして九番隊なのさ。他隊なら実力で上がれたりしたんじゃないのかい?」

「芥子だよ」

アヘン。

「麻薬を手に入れて裏で捌けば、すごい金額になる。」

尸魂界で、芥子があるのは九番隊だけ。

「五席位にもなると自由に動きまわれるからね。やり易いと考えたんだろう。でも、五席になれなかった。」

「なんでその後、すぐに死神を…？」

「九番隊への、芥子畑への裏口を見つけたんだよ」

弓親は勿論、奏恵もキョトンとしている。

「この花畑の奥。確認すれば、すぐに見つかる。」

ずっと立っていたのが疲れたのか、長谷川は座った。逃げるつもりはないらしい。

「それで、あっさりと死神を止めた彼はそこを使って麻薬を裏市場に出していた。そして、その生活が大分過ぎて起きたのが複数の隊長による裏切り。余計に動きやすくなった。」

しかし、今の九番隊には新たな隊長が居る。

「でも、新隊長の就任は知らなかったよ。だから、今日もこうして呑気に盗みを働いていたって訳。」

「長谷川先生は何に関わって？」

「…如月君、任務は確実に遂行しなさい。さあ」

そう言つて、長谷川は首を垂れる。

「先生、私にはできません」

「我が儘は言つてはいけない。死神は仕事を選べない。」



再び、地獄蝶が弓親の元へ舞って来た。しかし、2人はそれに気が付いていない。

「そう教えたのは誰だったかなあ？」

「先生……」

「奏恵、事情が変わった。」

弓親は長谷川を縛っていた縛道を解いた。

「僕の選択ミスだ。縛っておくべきだったのは服部だったみたいだね。」

「え」

「長谷川大樹。服部錯の居場所を特定せよ。」

「どういうことかなあ？」

「九番隊隊長からの命令に、逆らうんじゃないよ」

「隊長……！」

「奏恵、共に行動しなさい」

「解りました」

奏恵の顔に笑みが戻る。

そして、2人は畑から消えた。

「僕の推測は合ってる。だから、奏恵。彼を切るのは、とりあえず先延ばしだよ。……修兵、いるんだろ？」

「……また勝手な事をして」

「いいじゃないか。君が僕を力づくで止めないとすると……僕の考えは推測にすぎないけど、君の中では確信になったんだろ？

明衣からの連絡も入ったよ」

「まあな。兎に角、追いかけてねえと」

「わかってる。」

白い少女が、本当のことを話したらしい。

ドンっ

突然の音に驚いて、弓親と修兵は音のした方を見る。

「な、んだ、アレは」

突然聴こえた爆音。

その方向を見る。

「な、んだ、アレは」

視界に入ったソレに2人は驚愕する。

『……………!!!!』

遠目から見て解る事は少ない。

唯一解る事、それは動物ではなく植物であると云う事。 故にか、

言葉は発せられないようだ。

少しずつではあるが、ソレはこちらに近づいてくる。

「虚、か？」

「僕もそう思つよ…初めてみる虚だね。 修兵、」

「何すか」

「地獄蝶、持ってる？」

「んなもん、持ち歩くか。 ……って、てめえが持ってんじゃね

えかよっ」

そう言つて、修兵は弓親の頭に手を伸ばす。 弓親はとっさに目を

閉じた。

ゆっくりと弓親が目を開けた時、修兵の手には黒き蝶が一羽。

「髪飾りみたいになつてた。」

「……ありがとう。 十二番隊に連絡を入れて」

「わかりました。 ……こちら、九番隊の檜佐木修兵……」

その間、弓親は虚と向き合う。そして斬魄刀を抜くと、刀は四枚のシヨートルになる。

無言のまま、虚に正面から突っ込んでいく。

「これはっ……」

近くで見て初めて分かる。この虚の正体は、九番隊の隊士にとっては勿論、弓親にとっても掛け替えのない存在。

九番隊の隊花、とその同居花。

弓親の足が重くなる。

「芥子と雛罌粟……」

心なしか虚から発せられる霊圧は、悲痛そつに弓親には思えてならない。

互いの動きが止まる。

弓親の手から刀が滑り落ちた。

今の弓親に、この虚は切れない。十一番隊に永きに渡って属していた弓親にとって、こんな事はある得ないのだが。

「…できない」

再び虚が動き出す。

普通の植物なら自ら動くことはできない。しかし、目の前の花は動いている。それは虚になってしまった証拠だと言える。

ガッ

「何してんだ」

刀がぶつかる音が、修兵の声が聴こえて、弓親は我に帰る。そこには、虚が目の前にまで迫っていた。この副官がいなければ、確実に殺<sup>や</sup>られていた。

「今さら、こんな所で女になってんじゃねえよ」

「……」

「十一番隊に居た頃だったら戸惑いもせず、叩き斬ってたんじゃねえのか？」

「うるさい」

修兵は斬魄刀を振る。そしてその勢いで虚の腕、のような葉のついたものを、を斬り落とす。

そして、2人は虚から距離を取る。

先ほど修兵が斬り落としたはずの虚の腕は、もう再生していた。

「根が地面にある限り、虚の体は再生しそうだね。」

「植物は光合成と地面からの養分や水分によって、体をつくる。」

「あの再生速度は虚だからか。」

そこに、1人の男がやって来た。滅多に隊舎の外を歩いているところを見かけない、1人の男がやって来た。

「なかなか冷静で良い分析じゃねえか」

その口には煙草がくわえられている。

「てめえ等にアレが斬れるのか。誰よりも思入れがあるだろ。」

虚になつていてもアレは隊花の一部なんだから、そう言つて九番隊の2人にニヒルな笑みを向ける。

「うるせえ、さつさと仕事をしやがれ」

「言われなくたってやる。それより、てめえ等にアレが斬れるのか。」

修兵の言葉に返事をし、男は再び同じ質問を繰り返す。

「どんな感情も捨てる、アレを斬れ」

「斬れ」

表情を崩さず、黙る2人を見つめたまま淡々と言葉を続ける。

「虚退治は俺の専門外だ。九番隊の副隊長である修兵は勿論、その横に居る御嬢さんはもつと得意だろ？」

意地の悪い顔で弓親を見る。その男は、十二番隊の隊士。

「うるさい。巻き込まれたんだつたら別に構わないけど」

「おお、恐えなあ。」

「阿近さん、それくらいにしておいたらどうですか」

本当に巻き込まれますよ、と言って修兵は阿近を急かす。

「なら、手伝え。まずは修兵がもう一度斬って来い」

「はあ…」

仕方ねえな、とため息をつきながら修兵はもう一度虚へと向かって行った。

しかし、弓親は動かない。

「……てめえ等の分析はほぼ正解だろうな。」

「……。」

阿近は弓親を見て言うが、弓親は虚を見つめたまままだ。

「俺の外での仕事はこれだけだ」

修兵が戻って来た時、阿近はいつの間にか虚の一部を小瓶に詰め込んでいた。

「ちゃんと始末しとけよ」

じゃあな、と言い残して男は居なくなった。

少し目を離れたすきに、修兵によって斬られた部分は再び再生している。

「たいちよ」

「修兵、下がってて」

修兵の言葉を遮り、弓親は抜刀して前に出る。

「君じゃ相性が悪いだろ？」

そう言っつて、驚いた顔をする修兵に背を向けて虚と向き合う。

その背は、皆が護廷の隊長に抱く印象とはとても異なっていて、儂くて小さく、そして、か弱い。隊長などではなく、ただの女のように。

「裂き狂え、瑠璃色孔雀！」

そんな背とは裏腹な力強い声に瑠璃色の斬魄刀は応え、蔓が虚二体に絡みつく。その蔓に付く無数の蕾が、見る見るうちに膨らみ始める。



『……!!』

言葉にならない悲鳴が修兵にも聴こえる。しかし、虚は一切抵抗しない。

弓親の肩が小さく小刻みに震えている。

「ゴメン。ずっと叫んでたのに、」

無数の白い百合の様な花が、咲き狂う。

『ありがとう』

遂に、虚が裂き狂った。最期の最期に、弓親への感謝の意を述べて。

「ずっとずっと、僕に助けを求めていたのに……」

深くため息をついて言葉を続ける。

「どうしてももっと早く気が付いてやれなかったんだろう。僕が

礼を言われてなんか良いはずがないっ」

「…それは」

修兵が弓親の足もとに落ちた百合を拾い上げ、弓親の頭に飾る。

それはまるで、青き蝶が百合の花に止まっているよう。

「隊長1人だけの責ではありません。あの花たちは、最期に貴

女に救われたのですから」

修兵は弓親の顔を見ずに、先ほどまで虚が居た位置を見て言う。

それを弓親は有難く思った。

今、弓親の頬には涙が伝っていたのだから。

「ちゃんと、貴女はあの花たちにとっても九番隊の隊長だったんですよ。最期の最期に助けを求める、信頼できる、そんな隊長だったから……。」

「修兵、わかったから。……ありがとう。」

温かい風が吹き抜ける。その風はどこか、優しくくて。

地に咲く花たちも　そこに吹く風さえも

彼女の副官と共に

静かに泣く、新米隊長を慰める

ただただ

そつと、優しく

それが例え、相手にとって残酷なことであっても

華麗に屋根から屋根へと飛び移る金と白。

紫稀はしつかりと明衣の手を掴んでいる。

「さっきの話は本当ですか？」

「・・・ごめんなさい」

「かまいませんわ。誰も怒ってなどいません。むしろ、話してくれたことが嬉しく思っているくらいですわ。」

明衣は少女の養父。服部錯を追いかけて走っていた。

「それに、この事によって無駄な死を増やさなくて済むかもしれませんか。」

当初、弓親に言われた通りにしていた明衣だったのだが、紫稀がいきなり話し始めたのだ。

長谷川の事を。

「長谷川先生は良い先生です」

本当に、突然だった。

「この傷も、あの傷も。本当は、全部、家で」

「学校じゃねえのか」

「はい。長谷川先生にはそう言えと言われていました。」

修兵と明衣は顔を合わせる。わからない。

「父上は私を邪魔者扱いしていました。暴力はよくあることでした。それから助けてくれたのは・・・先生なんです。」

「授業中に叩かれていたのは…?」

「先生は誰にでもそうします。正解できるはずの問題で間違えると…。」

期待されている生徒だからこそ、と云う事か。

「そうだったのかよ」

思いもよらぬ真実を突き付けられて、だんだん頭の整理が出来なくなっていく。

此処に居る2人、修兵と明衣、は実際にその現場に居なかったのだから仕方がないと言ってしまえばそれまでだ。

「私は父上が嫌いです。・・・いいえ、今は嘘です」

「どういうことです?」

「関わり合いたくもないのです」

義理とはいえ、服部錯と紫稀は親子だ。娘に此処まで言われる義父もどうなのだろう。

「なので、好き嫌いと言っ感情すら持ちたくありません」

究極だ。

「わかった。」

「先生は父上と以前から交流があったようです。父上はよくお金にものを言わせていました。」

「最近ではそれが院にまで及んでいた、ってことですね、副隊長？」

「そうだな。服部、てめえが正直に話せば長谷川先生は救われる。…来るか。」

「はいっ！ 私は先生を助けます。先生は何も悪くないんです」「良い返事だ」

少女が初めて見せた、力強い言葉だった。

なので、副隊長の指示通り、明衣は紫稀の手を引いて走っている。時期に弓親たちも追いつくはずだと、そう思って。

「あれ…」

「…服部錯。どうやらあの時と一切変わっていない。…相変わらずのようですね。」

明衣は紫稀の手を放す。

「少し離れていてください。」

紫稀が自ら離れたのを確認して、さくら色の斬魄刀を抜く。

「従順に、落花流水！」

刀が150cmの弓に変形する。それを明衣が霊圧を込めて力強く弾くと、何も無い其処から矢が現れる。明衣は強く引つ張り、標的を定める。

ヒュッ・・・パン

その矢は服部錯の足元、地面に深く突き刺さった。

服部錯がこちらを振りかえる。その眼は怯えの色に染まっていた。

「やっと・・・追いつきましたわ。」

言った声は、言った本人でも驚くほど、とても低かった。

簡単に追いついた者 簡単に追いつかれた者

「追いつきましたわ。」

明衣は弓で服部錯を狙ったまま低く言う。その明衣の足元には服部紫稀。

「もう逃げられませんわ、観念なさってはとうですか？」

「くそっ」

再び逃げ出そうとした錯だが、動けない。

錯の周りには明衣の霊圧で満ちていた。地面には無数の矢が突き刺さり、その一本ずつが糸でつながっている。それはまるで、クモの巣の様に。

「…千田の始解は初めてみるな。」

「そうですね。ここ百年以上、人前では始解をせずに生きてまいりましたから。」

「…さっき放った矢は一本だろう」

錯の目は怯えている。しかし、その声は冷静そのもの。

「ええ、見えていたのですか。確かにわたくしが放った矢は一本。ですが、その矢は空中で無数に増えて地面に突き刺さり、互いに結び付く。」

矢がどう変形するのか、全ては千田明衣の意志次第の自由自在。

「逃がしはしませんわ。わたくしは隊長とは違って優しくなどはないのです。」

「あどけない少女の目の前でもか」

明衣は視線だけを一瞬、紫稀へと向ける。

自分の養父が捕えられているにもかかわらず、一切怯えた様子がない。

「・・・それが如何したと云うのです。そのような考えだから、金に頼つてでしか出世できないのです。」

「うるさいお嬢様だ」

「お褒めの言葉、有難く存じますわ。」

にこりと微笑んで言う明衣の立ち姿は凛々しい。

「相変わらず運の良い…。わたくしは一旦、弓を退きましよう。」

明衣はゆっくりと弓を下ろすと、普通の刀に戻る。そして、それを鞘に戻してから、紫稀を自分に引き寄せる。

紫稀は言葉の意味がわからず、明衣を見上げる。

「不安そうな顔をしているのです。わかっているはずですよ、近くに。」





「…」

「そんなに睨みつけられてもねえ…」

言った言葉の意味とは裏腹に、一切困った様子もなく見下ろすのは九番隊の隊長。そして、その横には九番隊の副隊長の姿。

「今の僕は機嫌が悪いんだ。」

その言葉の通り、本当に機嫌が悪そうな弓親は錯の目の前に舞い降りる。

「どうしよっかなー。まず、話を聞かないことには始まらないから…」

眉間にしわを寄せて、修兵を見る。

修兵は頷く。

一瞬目を合わせただけで意思を通わせる、以心伝心。

「…ここから先は管轄外だからね」

弓親がそう言い終わるや否や、修兵は服部錯を連れ去った。

「副隊長は…?」

「明衣、君ならわかってるだろ。二番隊だよ」

ああ、と言ったような表情に明衣はなる。そして、今なお泣き続ける奏恵の元へ行く。

「戻りますわよ」

「…姐さん」

「一旦、隊舎に戻るよ。 ……君たちもだから」

長谷川の方を見ながら言った弓親は紫稀の傍に行き、手をとる。

「二番隊じゃないのかなあ？」

「君は隊長格公認の罪人だから行きたいのであれば行けばいいけど。 ……そんなことをされると僕が困る。」

「？」

「兎に角行くよ。 護廷の死神は暇じゃないんだ」

「隊長、ありがとうございます」

「奏恵、礼を言うのはまだ早いよ。 本当なら君はその教師を叩き斬っているはずだからね。 今回の一件がハッキリするまで、君が隠し通すんだよ」

「はいっ」

九番隊に向けて、只走る。

「礼は言っちゃ駄目だ。 ただ、先延ばしになっているだけだから」

「隊長？ 何か言われましたか？」

「…何でもない」

「今、君は僕たちの手によって生かされているんだ。知っている事は全部話してもらおうよ。」

まだ生きたいでしょ、と弓親は長谷川を見る。長谷川は何も言う気は無い様だ。

場所は九番隊の隊首室。

もうすぐで夏が到来する季節であるだけあって、日は長い。

「君の生徒が、君をしつこく庇うんだ。」

「本当のことを言っているだけですっ」

弓親の言葉に疑い深げな顔の長谷川には表情を見せず、紫稀は叫ぶ。

「先生は私を助けてくれたんだもん。」

「仮に、君に対する行動は僕たちの勘違い、早とちりだったとしても。…じゃあ、奏恵にした事に対する理由は何。どうして、服部錯を庇うような言動をするんだい？」

冷徹な瞳で弓親は紫稀を見る。

明衣は長谷川に視線を移しながら言う。

「本当はどうなのです。霊術院の生徒たちの為にも、話す義務がありますわ。」

「……。」

「何より、今。目の前に居る生徒の為に話してください。」

「錯があんなことをしていたのを知っていて黙っていた。と云

う事は共犯だったと言ってしまったても過言ではないよねえ…。」

「でも、先生の場合、実際に服部と共に行動しいひんかったらバシへんかったんとちゃうの?」

「如月君の意見は最もだと思っよお。でも、錯とは旧知の仲間だよお。今の今まで唯一生き残ってい来た同僚。」

明衣はハツとした顔になる。

「死神になつてしまえば、常に死と隣り合わせ。」

「…共に院で学んだ友は年々消えていく。」

長谷川の言葉を明衣がつなく。彼女は此処に居る者の中で唯一、長谷川の気持ちかわかる者。

「そう。気がつけば、残っていたのは2人だけ。」

共に院を卒業したのは、長谷川大樹と服部錯の2人だけしか残っっていないかった。

「それが何。旧知の仲だからって、庇う相手を間違っちゃ…」

「何もならないよ。でもね、如月君。」

紫稀はずっと黙って、地面を睨み続けている。

「踏み違えた道を修正する事は、ととても難しい事なんだ。

特に、錯の場合はね…」

「?」

「錯は親が居るにも拘らず、愛情を一切受けずに育ってきた。

言いかえれば、幼い頃に修正してくれるはずの親が錯を放置していったんだよお。錯は修正の仕方を知らない。」

時々思い出されたかのように間延びする語尾が、この場の空気をかき乱す。

「気がついた時には、もう手遅れだったんだよ。錯自身が麻薬に体を蝕まれていたのだからねえ。」

「嘘」

「本当だよ、服部君」

バツと紫稀が顔を上げた。すると長谷川と目が合う。その目はとても、紫稀には苦しげに見えた。

「依存が強くなったのはここ数年だからね。…だから、錯は服部君を院に入れたんだ。」

「え？ それは、私の顔を見たくないからではなく・・・？」

「違うよ。彼なりの不器用な愛情表現だよ。良くないものから可愛い娘を遠ざけたい、そんな思いだけだったんだ。」

「ウ、ソ」

紫稀の瞳が大きく揺れる。信じたくないと言ったと全身で訴える。

「これで全部かい？」

ガチン…

弓親が口を開いた瞬間。突然の音に、皆の意識が長谷川から逸れる。

奏恵が抜刀して窓からの侵入者の刀を抑えているが、力の差があり過ぎる。腕が大きく揺れている。

「おい、弓親。罪人を隠して何のつもりだあ？」  
「まだ話の途中なんだ。」

隊長を呼び捨てにするのは、弓親とは旧知の仲の

「邪魔だよ」

十一番隊、第三席にして副官補佐。

「一角」

今の十一番隊を象徴するかの様な男、その名を斑目一角。

奏恵の刀を軽く押し返し、一角は弓親から離れた。

一角は斬魄刀を鞘に仕舞いながら、弓親に話す。

「先に二番隊に差し出した奴が好き勝手にペラペラ喋ってんぞ。」

「そう。だから、君はここに罪人が居る事を知れたんだね。」

何事も無いかのように弓親が言うので、周りに居る者は少し驚く。弓親からすれば、一角の行動の理由は想像がつく。服部錯はさっき掴まったばかりなのだ。こんなに早く、情報が漏れるわけがない。

「隊長…どうしますか」

「そんな事、決まってるじゃないか。今話したことで全部なんだろう？」

上腕を揉みながら問う奏恵には一切視線を向けずに、弓親は淡々と言葉を続ける。

「今聞いた話がすべて正しいのであれば、六十六室の判断も正しい。」

「隊長！ まだ、そうと決まった訳ではありませんわ！」

「イヤイヤイヤ！ 皆の先生を取らないで！」

「君たちは自分勝手だね。奏恵、彼を斬れるの斬れないの？」

「私は…」

うんざりとした表情で弓親は一角を睨みつける。一角の目は弓親だけを見ていた。



一角がこの場にきた理由、それは弓親に決定を急かす為。それを依頼したのは、自身の副官。

そういう事なのだろうと、弓親は一角の目を見て判断する。

「六十六室の決定に従いましょう」

その声は震えている。

しかし、行動は目にもとまらぬ速さ。決めたら、実行までが早い女だ。

「導こう、死丘しのおか!!!!!!」

一角の刀を受け止めた斬魄刀は、およそ2mの巨大な首切り包丁に変形する。

人を処刑する為だけの刀。修兵にも劣らぬ、死を誘う刀。

ゆっくりと、奏恵は処刑されようと云うのにやけに大人しい長谷川の首筋に、刀を宛がう。

「さようなら、我が恩師・長谷川大樹。最期に残す言葉はあるか。」

「死ぬ時間が前後しただけだからねえ。もう何も無いよお、如月君。」

先ほどまで声が震えていたとは思えない程、奏恵から発せられる声は冷たい。

「そうか、潔くて良いぞ。」

「あ、最期にひとつ。」

奏恵は眉を顰めたが、一応待ってやる。これは、奏恵から長谷川

に対する最期の優しさ。

「前言撤回するよお。 本当に、良い死神になったねえ。 九番隊、如月奏恵五席。」

「。。。。。」

その言葉の返事代わりに、奏恵は片手で斬魄刀を振り上げ、重力を味方につけて思いっきり振り下ろす。

「キヤー！ やめてえええええー——————！！！」

紫稀の悲痛な叫び声に、肉が飛び散る音はかき消える。

斬り落とされた首から滴る血液が、隊首室の畳に血だまりをつくった。

弓親は奏恵にだけ聴こえるよう、そっと耳打ちする。

「よくやった。」

「いいえ、これが仕事ですから。」

そういう彼女の目には、いつものおどけた様な、いたずらっ子のよな色は一切無く。 物事を悲観する処刑人の色。

「それでも、ごめんね。」

奏恵の目が大きく見開かれ、弓親を見つめる。

この周囲にいた者は、紫稀を取り囲み去って行った。

「そ、んなこと、貴女が言わないで……。 私が最終決断をしたのですから。」

「どんな意味があったにしろ。」

ここに残っているのは奏恵、弓親、そしてついさっき来た修兵。

「良い死神だよ、君は」

「有り難うございます。」

奏恵は恩師に言えなかった言葉を、代わりに隊長に言う。そして、隊長は、彼が言ったであろう言葉を口にしてくれた。

「何があっても、前を向くんだよ。」

“ 姫からの言葉 ” は鋭く、硬く。 どうしても、 恩師の姿を思い出さずにはいられない。

自分が殺した、恩師の姿を。

時は残酷だ

綻びを修復する暇も与えず  
どンドン過ぎていく

目には見えない傷は大きく深い  
負った傷は深く大きい

「恩師を切れ、なんて部下に命令するなんて…。      彼女は鬼だ。」  
「罪人はどつちだ。      心がない。」  
「命令を守って、切った子は可愛そうだったねえ。」

時は残酷だ

人の心を気にもせず  
足早に過ぎていく

目には見えない傷は治らない  
負った傷は塞がらない

「あれは、隊長として出すべき当然の命だ。・・・馬鹿な奴ら  
を気にする必要はない。好きに言わせておけ」

「私は事実を知っています。貴女に責はない事を」

「私は与えられた任務を遂行したまでです。ですが、もし与えら  
れていなかったとしても私は彼を・・・」

時が経つほど、脱色されるものがある  
時が経つほど、着色されるものがある

それは事実を曲げ始める

弁解する暇さえ与えず

あらぬ方向へ曲がっていく

慰めの言葉も耳に入らぬほどに  
心はズタズタに引き裂かれる・・・

決して、傷はなくならない  
決して、事実曲げられない

時は残酷な程、早く過ぎる

薄暗い研究室。

清潔に保たれてはいるが、どこか居にくい空気が此処には漂っている。

「助けを強く求めるあまり、虚化したものだろう。」

阿近は淡々と続ける。

「植物は俺たち死神や人間が考えてるよりもずっと、心つてのを感じ取り易い。悲しい事も、やましい事も、嬉しい事も。全てそのまま、ありのままに感じ取る。」

「そんな事言うなんてらしくねえな。非現実的だとか言いそうなのに」

「ああ？何か言ったか？」

「いや、何も」

阿近は修兵を睨むが、長年の付き合いの所為で修兵は何とも思わない。

「まあ、他に同じような例が確認されてない。虚化したのはあれだけだったんだろう？よほど、強い信念がなかったら自力で虚化は出来ねえ。いや、そう簡単に出来てたまるか。」

阿近の表情に変化はないが、言葉からは忌々しさが溢れている。

「そうか……。もう出て来ねえだろうな？」

「同じような虚は出て来ねえ。まあ、お前等がちゃんと斬って

いれば、の話だが。一度会った事は再びあると考えるのが自然だが。…あの時、ちゃんと片付けたか？」

「隊長が一瞬で。虚の分子さえも残らない程に裂いた。」

「はあ？ あの調子で良くそこまで出来たな」

「気持ちさえどうにかなれば、何とでも。…それに、あの場合、俺よりも相性は良かったしな。」

「2人とも直接攻撃系だろ。どっちでも」

修兵は椅子から立ち上がりながら言う。

「違えよ」

「どういうことだ？」

「そのままの意味だ。…詳しい事は俺が言って良い事じゃねえし。じゃあ」

不思議そうな阿近を置いて、修兵は十二番隊を後にする。

何時まで経っても良い意味でも悪い意味でも変わらない、自身の上司の元へと急ぐ。

互いの立場が変わった  
今でも尚

自分とあなたは秘密の共有者

言い方を変えよう

あなたと自分は秘密の共犯者

あれから、大分時間が経った。

先ほど、十二番隊にいきなり呼び出され、阿近から前触れもなく話が始まった時、修兵は驚いた。

随分昔の事だと。

そして、同時に思う。なぜこんなにも時間がかかったのか。

答えは簡単だった。

単に阿近が忙しかったから。そして、九番隊が立ち直るまでに時間がかかってしまったから。

「問題」

奏恵による、霊術院講師の処刑が隊首室で執行されたと護廷中に噂が広まるのに時間は要らなかった。

その現場に居て命を出した隊長本人はその後、何事も無かったかのように振舞った。そのせいで十一番隊出身の九番隊の女は非道だとまで噂が経つほど。

それでも気丈に振舞った。だから、誰もが大丈夫なのだと思うていた。

それが振舞っていたただけなのだと気付くのに時間がかかった。だから今、こんなことになっている。

「真まことと偽りの違いはどこでしょう」

修兵が十二番隊から向かった先、それは九番隊では無い。

「ちよつと、聞いている?」

「聞いてますよ。真と偽の違いでしょ」



「そう。君はどう思う？」

四番隊。

あれから数年経った今でも、病んでここに居るのは、誰もが残忍だと言った九番隊の隊長。

「俺の持論は……」

「それで良いから早く。どうせ答えなんか無いんだから」

「……騙し通した所までが真。それがバレたり白状した瞬間にそれは偽りになる。」

「君がそんなことを言うという意味深だね。」

「お互い様だろ。」

「……と云う事は、嘘も通せば真になる？」

「……まあ、そうなりますね」

現在九番隊の隊長は在位してはいるが、居るべき場には姿を現さない。それはあの時と似ているが、違う。会いたいと願えばすぐに会える。

そんな今、修兵は隊長の業務をこなしながら、副隊長業務もこなしている。

「無理してない？」

「え？ ああ、大丈夫」

「そう。なら良かった。」

原因不明の頭痛に眩暈。短時間でも自立している事が難しく、座っていても顔色が悪い。

弓親は、あれからずっと、このような症状に隊長としての業務が出来ない程の症状に悩まされ続けた。

そして、それは今でも同じだ。

あの日から、弓親の笑みを見た者は誰も居ない。否、ここにいる  
修兵以外は見ていない。

「少しなら持ってきてよ。座ったままなら大丈夫だから」

「それで熱が出たのは誰だ」

「ん？ 誰の事かな」

弓親が小さく笑った。

それに修兵は驚く。そして同時に、その笑みに見とれた。

「・・・少しだけですからね」

「大丈夫。君と違って、僕、仕事嫌いだから」

「俺だって別に好きじゃねえよ」

「嘘だあ」

「嘘なんかついてどうする」

「それもそうだね。それに、僕には嘘なんて吐けないでしょ」

「な、・・・？」

そこで、外が騒がしい事に気がつく。

「賑やかだね。今日って何かあるの？」

「・・・」

修兵はベットから離れ、窓を開ける。すると、其処から桜の花が  
風と共に舞ってきた。

「花見？」

「・・・そっか、もう春か。」

弓親は試案するような顔になる。

そして、良い事を思いついたかのように顔が晴れやかになる。

「連れてってよ」

「はいいい!？」

驚く修兵に弓親は続ける。

「君が一緒なら、もし僕がぶっ倒れても問題ないでしょ？ まあ、ぶっ倒れる予定はないけれど」

「…許可が下りれば、の話で……」

「じゃあ、窓際まで連れてって。今、修兵が立ってる下口まで」  
「はいはい」

修兵は弓親を横に抱え窓へ向かい、その場に下ろした。弓親は修兵にもたれかかる様にして、窓の外を覗く。

「やっぱり、あそこに卯ノ花隊長がいるじゃないか。……」

スツと目を細め、何やら呟く。天挺空羅。

「良いつてよ、君が一緒なら。」

「……解りましたよ。着替えろ、その格好じゃ問題だ」  
「わかったよ」

修兵は病室を出た。

久方ぶりに姿を現す

瑠璃色の着物を身に纏い、自身の副官に手をひかれ

その表情は

冷たく硬く、まるで磨かれた玉のよう

温かな風が吹き、桜の花びらが舞い落ちる。

其処ら辺に酒瓶は転がり、すでに顔が赤らんでいる者も少なくはない。

「始まったばかりなのに……。皆ペースが早いのか、それとも酒が弱いんか……」

「まあ、そんな事を言うのではありません。皆浮かれているのですから、ね？」

如月奏恵と千田明衣が話している。

奏恵はあれ以来、二番隊に属することになった。理由は、公私を分け、かつ何事にも動じず任務をこなす冷徹さを認められて。主な仕事は、碎蜂の元で首切り包丁を振う。まるで死刑執行人の如く。

明衣は相変わらず九番隊で第四席として働いている。

奏恵が居なくなり五席が空位になって、以前よりも増して忙しくなった。しかし、デスクワークは白雲に任せて、自分は外部に出ればかりいる。

2人がこうして会って話すのも久しぶりだった。

「副隊長!？」

奏恵の驚く声が響く。それによって注目が奏恵へと向けられたが、本人は別の所を見て動かない。皆もそつちを見る。そして、一人の男が叫ぶ。

「てめえの副隊長は俺だろうが」

「そんな今更やわ。」

男の方を見ずに、以前として奏恵の視線は一点に向けられたまま。

「だいたい、大前田副隊長は『副隊長』って感じとちゃうし」

「どういう意味だよ」

「仕方がないだろうな。如月の言い分も間違っではない」

「隊長まで・・・」

普段では見る事の出来ない和やかな二番隊の会話に、周囲から笑い声が出る。

「って、綾瀬川隊長!？」

もう一度、奏恵の驚いた声が響く。

奏恵は叫んだあと、そちらの方へ走って行った。ここから距離があるのだが、目視できる奏恵は結構視力が良い。

「隊長はちゃんと呼ぶのかよ!」

大前田のツツコミに、今度は笑いは起きず、皆が目を大きく見開い

て固まる。

しかし、そうではない者も混じっている。近年、護廷入りした新米だ。

「先輩…?」

「アレは九番隊の隊長。・・・俺だって生で見るのは初めてだよ」

「…隊長に対してアレとは何ですか。もう一度、指導の必要がありそうですわね?」

明衣は傍に居た入廷して1年目と3年目の隊士と話す。

「いいえ、千田四席! 大丈夫です」

「まあ、そう遠慮なさらずに。」

先ほどから、隊士は明衣と話しているにも拘わらず視線は別の所に向いている。

「…話したいのであれば、挨拶してきなさい。まあ、返事はな

いかもしれませんが」

「良いんですか!?!」

「九番隊の隊士でしょう? 問題などありはしませんわ」

こちらに来るまで、もう少し時間がかかるだろう。

「ですが、もう少し後になさい。色々あるでしょうし」

「「はい」」

隊士はにこにこ嬉しそうに返事した。

「……隊長の表情が強張っているのが気になりますわね。ですが、」

大丈夫だろう、彼が横に居る限り。明衣がそう思えるものが、その光景にはあった。

一歩一歩、ゆっくりと歩く。

「綾瀬川隊長!？」

奏恵の声が響く。　なので皆の注目が集まってしまった。

「…奏恵か」

病室に居た時の表情は何処どこへ。  
今ではすっかり堅くなってしまうている。

「ああ、こっちに来る。　さっそく注目を集めやがって」

「そう。　元気そうだね。」

「…緊張してる?」

修兵がそう言つと、肩がビクッと揺れた。

「凶星か」

「だって…。」

「戻るか」

人が多い事に委縮してしまっているのか、それとも。

「行く」

「…なら、俺から離れるな。」

「わかった」



弓親は修兵の死覇装の裾を強く握る、皺が寄るのも気にせず。そこに、奏恵が駆けてくる。

「綾瀬川隊長っ」

「如月。九番隊の奴らに恨まれるぞ」

「大丈夫ですって」。それでも私は一応、この前まで五席やっ  
たしい。」

表情が変わらない弓親に、奏恵はいきなり抱きついた。

「隊長って、やっぱり私よりほんの少しだけ小さかったんですね」

「うるさい。あと、くるしい」

「やっと喋ってくれはった」

「……。」

これでも驚いている弓親だったが、今度は奏恵を驚かす。いきなり肩を組んだ。そして修兵に会話が聴こえない様な姿勢になる。

「これ」

そう言っつて弓親が奏恵に手渡したのは、透明の液体が入った小瓶。

「……ああ、懐かしいですね。結果も報告せんとアカンし。」

あの子ですよ、と言っつて奏恵は大きな桜の木の下で、こういう場に出ているのは珍しい阿近と話している隊士を指す。

「これを渡したのは。十二番隊の五席、水無月純麗。……  
どうします?」

「君の好きにしたら」



「もちろん」

再び、小さい笑みが修兵に向けられた。それが他の者に向けられるようになるまで、後少し。時間はかからないだろう。

声の方へと向かうと、其処には困ったような表情の明衣と目が合う。

すると、修兵に向かって小さく笑った。

「わたくしは止めたのですが…。あちらに行かれた方がよろしいのではないかと…。」

「誰も怒ったりはしねえだろうよ。久しぶりなんだからな」

「・・・隊長？」

「何」

「あちらに集まっているのは、ここ数年で九番隊に入った者たちですわ。」

「…。」

知らない者たちが多い事に緊張している様。繋がれた手に力が入る。すると、同じくらいの力で握り返す力がある。

「皆、隊長と話したがついていましたわ。」

「どうして」

「・・・ふふつ。綾瀬川隊長は自分が、隊長」と云うことをお

忘れなのでは？」

「え？」

「皆の憧れなのですわ。特に九番隊の綾瀬川隊長は強いだけでなく、美しさの折り紙つき。」

明衣は頭上にある桜の木を見る。

「皆の視線はさっきから隊長に釘付けで、桜も嫉妬するほどですわ。…何と云う顔をしているのですか」

向こうで覇気のない顔になっている新人に言い放ち、明衣はそちらへ行ってしまった。

「あのさあ」

「何だ」

「……。」

「…如月は碎蜂隊長の元で実績を残すようになって、根拠のない噂はほとんど消えた。悩む必要は一切ねえ。」

さらっと言う修兵に、弓親は口角を上げて言う。

「……. . . . . やっぱ言い当てるねえ、君は」

「なんとなく」

「やっぱり、僕は君が嫌いだよ」

「それはどうも。俺も嫌いなんです。」

修兵も同じように口角を上げた。

そんな2人の姿を、部下たちは眩しく、懐かしく見ていた。

近くまで来てみると、皆の顔はほのかに赤かった。

「てめえ等、飲みすぎだろ。まだ明るいぞ」

呆れた声で言う修兵に、隊士はキョトンとした表情になる。

「そんな事はありません。開いている瓶はコレだけですよ」

そう言う隊士の顔は真っ赤で、指された先には酒瓶の山。それを見た修兵の顔が一瞬固まる。

「全員酔ってんじゃないか」

「副隊長もだうぞ、今持ってきました」

「・・・全く舌が回ってないけど、彼って酒弱いのか？」

「俺の知る限りでは、弱い方ではないと・・・。」

ドン

「うわっ」

「檜佐木先輩っ！！」

ぶつかって来たのは阿散井恋次。

「危ねえだろっ」

「君は僕まで潰す気かい」

「へ？ 弓親さん??」

「誰だと思っただい」

素っ頓狂な声で言う恋次に、弓親の声が強張る。

「てつきり檜佐木先輩の彼女かと…。 手も繋いでるし」  
「……」

言いながら恐る恐る恋次が顔を上げると、弓親と目が合う。  
その目には、声ほど感情が籠っておらず、怒っているのか何を考え  
ているのかが読めない。

「弓親さん？ 怒ってます？？」

「阿散井、てめえが悪い。 隊長、どこに座りますか」

「先輩は、この原因となった俺の発言も無視するんスね。」

「何か言ったか」

「イイエ何モ」

「檜佐木、此处に座って。 僕の椅子になつてよ」

「はい!？」

「早く」

「わかりました」

修兵は大人しく弓親の椅子になる為、胡坐をかいて座る。 その上  
に弓親は座った。

「なんか、今日の弓親さんって女王様みたいっすね。 それに、  
そんなことをしていると余計に恋人みたいっすよ」

弓親はキツと恋次を睨む。

「うるさい。 それとも君が椅子になつてくれるのかい？ 動い  
たら……」

「…遠慮します」

「隊長、副隊長。コレをどうぞ！ あ、阿散井副隊長、ちょっと待って下さい。今持ってきます」

「いや、俺は戻る。では失礼しました」

恋次はさっさと戻って行った。

2人は隊士から手渡された飲み物を一気に飲み干す。

「ゲホゲホツ。 てめえ、何を」

「修兵、水だよ」

「有り難うございます。」

修兵は弓親から渡された物も一気に飲んだ。

「……………」

「ちよっと、これは強過ぎるんじゃないかい」

「いや〜。副隊長は強いと聞いているので、これくらいは」

「おい、いくらなんでもこれは駄目だ。」

弓親から手渡されたのも、隊士から手渡されたのも同じもの。 原

酒のストレート。

見る見るうちに修兵の顔が赤くなっていく。

「隊長は大丈夫なのですか？」

元凶である隊士が少し不安そうに問う。

「僕は一口飲んで、修兵にあげちゃったからね。 君、まだ飲めるでしょ？」

「まあ…」

「じゃあ、面白いことじゃようね」

現れたのは、如月奏恵。 さっき逃げたばかりの恋次とそれを引きずるルキア。

恋次は逃げ損ねたようだ。

「阿散井副隊長？ 檜佐木副隊長と阿散井副隊長は、お酒ってどつちが強いんですか？」

「いや、わからないっすよ」

「じゃあ、勝負して下さいよ」

「え、ちよ」

「往生際が悪いな。 はやくしなよ」

どンドン目に見えて元気になっていく弓親に嬉しさを感じながらも、修兵は途方に暮れる。

「では、綾瀬川隊長の許可も出たので」

奏恵は相変わらず表情でさらりと言う。 両手には先ほどの酒が入った大きなコップ。

弓親とルキアに手渡す。

「用意、始め！」

その声と共に、周囲に人が集まって来る。 応援する声、罵倒する声。

楽しげな笑顔が彼らの周りを包み込む。

「はい、修兵。」



無言で弓親に酒を注いでもらう。 修兵の顔が赤く、体温も上がっているようだ。

「楽しんでます？」

「うん。………修兵、」

弓親が、皆の前で笑った。

「ありがとう」

久方ぶりに姿を現す

瑠璃色の着物を身に纏い、自身の副官に手をひかれ

その表情は

咲き誇る桜にも見劣りせぬ程に美しく、まるで磨かれた玉のように

玲瓏

先に手が留まったのは恋次だった。

だが、ルキアに無理やりコップを手渡される。

「なんだ恋次。 もう限界か」

「んなこと言っただってよ…。 もう無理」

恋次はそれだけ言うと、後ろにひっくり返ってしまった。

「おい、恋次!!」

慌てるルキア。

弓親はそれに一切気に留めず、修兵を見る。

「君は大丈夫なの？」

長時間、自分の椅子になり続けている男に弓親は問う。

「もう、わからなくなってきたるんすよ。 酔っているのかなん  
て」

そう言いながら、修兵はチビチビと飲み続けている。

その姿は、先ほどよりも酔っていない様に見えるくらい、普通に見える。

「それはお酒？ それとも自分に酔っているのかい」

「うーん、隊長に酔ってる？」

「なんだい、それ。 まあ、当然だろうね。 僕は」

「美しいから」

真つ直ぐ目を見て言われた弓親は、顔が赤くなつたのを誤魔化すかの如く、奏恵から水の入ったコップを受け取りながら言う。

「もう、おしまい。酔つ払いな君には、お水をどうぞ」

弓親は酒の入ったコップと水の入ったコップとを交換する。そこへやってきたのは十二番隊の…。

「ん？ 阿近さんか。珍しいな」

「美人を膝に座らせて・・・酔つてんじゃねえか」

「美人が椅子になれって言うのを断れって言うんすか」

「そりゃ無理な話だな…飲まねえのか、水」

阿近に言われて、手に持つ水を流し込み、ゆっくりと嚙下する。喉仏が上下する。

「・・・っ」

「？」

「水に何混ぜた」

修兵は下を向いたまま阿近に問う。

「何混ぜたんだ？」

「昔の事過ぎて詳しい事は思いだせないのですが、たしか・・・」

問われた阿近が問うたのは、横に立つ純麗。純麗は人の悪い顔で答える。

「思い出させませんわ」

「純麗、それは、さすがにマズインとちゃう?」

「大丈夫。何かあればご連絡ください。」

「え、ちよっと!」

「そのような事を言っつて、奏恵は信じてくれているのでしょうか?」  
では、これで」

それだけ言っつと、水無月純麗はさっさと去っつて行っつた。  
阿近もそれに続いっつて消える。

「何だっつてんだよ」

「まあ、何もなみみだいだから大丈夫なんぢやないんですか?」

「如月、元凶はてめえか?」

「ちやいますっつて、元はコレを純麗から受け取っつた杜真が悪いんですっつて」

「俺の所為ですか!」

「それ以外やっつたら、誰なんさ」

「……」

ここで反論するつと後で面倒なこつことになるのを経験しっつている杜真は黙る。

「だから、如月だろ?」

「副隊長、杜真の味方しはるんですか? やっつたら、隊長も共犯ですよ。ねえ?」

「僕は中身を知らなかつつたから」

「酷いわ」。私、二番隊に戻りますっつ

「はやくお行きなさい。邪魔ですわ」

「姐さんまで、酷いわあ」

ドーン

突如、遠方で何か、音がした。

「今度はなんだ？」

「あれは……。」

明衣は目を細めてみる。そこには、何かいる事はたしか。

「初めてみますわ。虚？」

「……。」 修兵、行くよ

「隊長？」

弓親は立ちあがり、何処からともなく自身の斬魄刀を取りだした。キョトンとした顔で奏恵が弓親を見る。

「隊長、あれが何か知ってはるんですか」

「あれは間違いなく虚だよ。元は花だけど……今回は桜かな」

大きな体を揺らし、ほんの少しずつではあるがこちらに近づいてきている。

「さあ、行くよ。……離れるなって言ったのは誰だったかな、

早くしなよ。」

「わかりましたよ」

「…手は出さなくていいから」

ふらつく修兵を立たせ、弓親は抜刀する。

すると、酔っているはずの修兵は弓親を抱えて虚の前まで一瞬で移動した。

「今回は大きいね」

「…。解放するののか」

「…するよ。だって僕は」

古木が虚になったようだ。幹が太く、咲く花が他よりもずっと儂げ。

「もう十一番隊の隊士じゃないからね。…これを預かっておいて」

弓親は修兵に鞘を預けて、再び虚と向き合う。

「卍解・孔雀天藍くじゃくてんらん」

低い声に応えて、刀は蔓状になる。しかし、その先には刃物が見える。

その刃が、蔓が、虚に当たるたび、蔓の蕾が膨らみ重くなる。

「ここからじゃ、皆に僕の声は聞こえないだろうね」

「え、ええ。」

弓親の卍解を啞然と見つめる修兵。まさか、卍解をすとも思っていないかったから尚更だ。

「この刃物には触らないでね、毒だから。」

「どうしてそんなことを」

「本当だったら、自分の能力なんて誰にも知られたくないんだ。でも、だって、僕と君は」

弓親は修兵の目を見てハッキリと言った。

「共犯者だから」

見事な真つ赤な大輪の花が咲き狂った。

九番隊の集まる場から遠ざかった所で、阿近は純麗に声をかける。

「おい」

「あら、阿近さん」

「檜佐木に飲ませたあれは何だったんだ？」

「腐らない水。無味無臭かどうかを確かめて欲しかったのでお渡ししたのですが、どうやら成功のようです」

「…。」

「檜佐木副隊長は、一滴でも体に悪いものが水に入っていると吐きだされますからね」

「・・・性格悪いな」

「今さらですよ」

それに、と純麗は続ける。

「何かの踏ん切りになれば良いじゃないですか。たとえば・・・告白とか？」

「薬の所為にしるってことか」

「ええ」

純麗は満足そうに笑った。

ドーン

そこに大きな音が響く。

「向こうで虚がでたようですね。 どうでしょうか」

「…あれは修兵たちか。」

阿近は一層、目を細める。

「大丈夫だろう」

「そうですね。 阿近さんがおっしゃるのなら、大丈夫でしょう」

阿近の言葉通り、見る見るうちに弓親が華麗に虚を仕留めた。

「どういふことか、修兵」

阿近は隣に居る純麗にも聴こえない程の声で言った。



短時間で、見事なまでに虚は退治された。

重たそうに咲いた赤い花が、弓親の足もとに散らばる。

「…今のは」

「僕の二つ目の卍解」

「二つ目？ 始解みたいに？」

「そうだよ。 もう一方は藤を大きくしたような感じ」

「そうか…。」

「君はこれをどういう事だと思う？」

弓親は修兵から鞘を受け取り、刃を仕舞いながら問う。

「卍解が二つあると云うのであれば、藤孔雀も立派な始解。 . .

・ 人格の二面性？」

「そう思うんだ」

「直接聞いた方が早いんじゃない？」

「気が向けばね。 孔雀とは出来る限り顔を合わせたくないんだ。」

座り込んでいる修兵の横に腰を下ろし、弓親は斬魄刀をそつと撫でる。

「どうして卍解なんだろうね」

「どういっ」

「だって、始まりだよ。 どうして、その次が『卍』なの。

じゃあ、終わりはないのかって。 今思った」

「あっても驚かねえよ。 . . . . .ここ数年で、始解が出来る隊士

が急激に増加した。今では始解が出来て当然。そのうち、上位席官は皆、正解が出来るようになっても不思議な事では無い。」  
「まあ、正解が才能みたいな所が多いからね…。でも、始解はその気になればどうにかなるか…。」

難しそうな顔で真面目に考えている弓親を見て、修兵は思わず笑う。

「何」

「いや、元気になって良かったな、って」

返事の代わりに小さく笑った。

「その顔、隊士にも見せてやってくださいよ。…隊長の帰りを、皆待っているんで」

「わかった」

そう言って、皆の元へ帰ろうとしたが、弓親が足をとめた。

「どうしましたか」

「彼ってどうなったの」

「………服部ですか」

修兵の声が一層低くなる。

「今は二番隊の監視の元、牢獄ですよ」

「そっか、ならいい」

「…気にしないのなら、笑顔で居て下さい」

「……君には、そんなことを言われてばかりだね」

弱さを持っていて当然だとか。

人を決して否定せず、受け入れたうえで肯定する優しさ。 その優しさは常に他人へと向けられている。

「ありがとう」

言った弓親の笑みに、修兵も微笑む。

2人の笑みにつられて、桜が舞い散った。

## 花吹雪

桜が

この場を優しく包むように

貴女は

九番隊を優しく包み込む

まるで、桜の花の様に

「霊術院で1日講師!？」

驚きの声が執務室に響く。

皆の視線がそちらに集まるが、すぐに手元の書類へと戻された。

「はい」

「またかよ。」

「ああ」

「だったら今回も同じ奴が行けば良いじゃねーかよ。」

それは無理だ。如月前五席は、二番隊に行ってしまったのだから。

「九番隊からは数人。鬼道の腕がたつ者を、と云う事らしいですよ」

「“から”って何だ？ 他隊も一緒なのか？」

「はい。十一番隊らしいですよ」

2人の声は少し小さくなったが、皆は仕事をこなしつつ、2人の会話を耳を傾けている。

だって気になるじゃないか。

「・・・またか、そんなのよく了承したな」

「そんな事を気にしているのはアンタくらいですよ」

「そうか？ お前も思ってたんじゃないのか？」

「0%では無いですけどね。。。」

九番隊隊士の十一番隊に対する偏見はまだ完全には消えていないようだ。

俺が、ここに来た時の風当たりは酷かった。

しかし、隊長の就任以来、一切そう言う事はなくなったのだが。

「で、九番隊からは誰が行くんだ？」

「これから決める」

「まあ、何があっても、俺はいかねえからな」

「…。」

スパーン

障子が勢い良く開け放たれた。

そこには副隊長。

さっきの会話が聞こえていたのではないのだろうか？ 顔をゆがめて、少し不機嫌そう。

「「「おはようございます」「」」

皆は手を止めて、一斉に挨拶する。

「おはよう…。一体どこから情報が漏れてんだ？」

バツチリ、彼らの会話が外にまで漏れていたようだ。

小さい声で話していたのに聴こえていたと云う事は、結構前から部屋の前に居たと云う事か。

「てめえら、話はわかってんだろ？」

「わかっています。」

「・・・誰か行きたい奴はいねえのか」

皆は黙り込む。

余程、十一番隊と一緒に嫌なのだろうか。

「誰も行かないとおっしゃるなら俺が・・・」

「別に行くのが嫌とかではないんです。」

ここまで言った俺の言葉を遮って聴こえて来たのは、元十一番隊である俺にとって、とてもうれしい発言だった。

「行っても良いんですよ。でもね、十一番隊の隊士って皆そろって、鬼道が下手でしょ？ 生徒が増えるだけじゃ無いですか」

「鬼道がまともにも出来るのと一緒なら行きますよ」

「それなら、大丈夫だ。・・・入れ。」

副隊長に呼ばれてはいつてきたのは、俺の良く知る十一番隊隊士。

「「はじめましてー」」

相変わらずの見事なハモリっぷり。

「十一番隊、谷口滑引」「粗押そおです。」「十一番隊では、飛びぬけて」「鬼道が得意でーっす」

そして、同時に会釈する。

「これまた、どうして十一番隊となんですか？」

俺は思っていた事を素直に口に出す。

「杜真、てめえがソレを気にするのか？」

「いいえ、前はこれと言った理由がなかったから今回は……  
って」

「俺は知らねえ」

「副隊長！？……滑引と粗押は知らないの？」

「「知らない」」

完全なデジャブだ。

「九番隊からは誰が行く？ とりあえず、足立は行け」

「はい」

「あとは……。無しでいいか。今回は十二番隊とも一緒だからな」

副隊長から発せられた新たな情報に、俺は付いていけない。良くないことが起こりそうだ。

「へえ？」

「兎に角、隊首室に行くぞ」

「「はい」」

俺たち3人は副隊長の後を追って歩いた。

副隊長の後に付いて行った先は隊首室。

そこには、十二番隊の水無月純麗五席の姿が。今回、共に行く十二番隊の隊士は彼女の様だ。

俺たちが入った瞬間、隊長はいきなり話し出した。

「話は聞いてるでしょ？ ……今回も色々な死神に来てほしいかなんとかで……」

そこへ、外から黒い蝶が、ひらひらと。

隊長の元へとやってきた。

それと副隊長が慣れた手つきで捕まえ、隊長の指に留まらせる。

普通なら本人が受け取る。しかし、九番隊では見慣れた光景となっていたのだが、今でも続いていたのか。

「……今すぐに来てほしいらしいよ。」

「……ええー！！」「」

杜真と双子が叫ぶ。

「急ですね。」

「そうだね、君たちに任せたよ。いってらっしゃい」

「行ってきます」

俺たちは隊首室を後にした。

前にもこんなことがあった  
でも

今と前とは違うもので

今は今なりに

頑張って行こう、そう思えた

変更すべきところは変更し、残すべきところは残す



そっぢあって、俺たちは生きる  
そしてどこまでも伸びて行くんだ  
ずっど、ずっど

わたくしとした事が、隊長の正解の瞬間を見逃してしまうなんて  
…。

奏恵が撮っておいてくれた写真を見た。

相変わらず、場がどこであろうと、被写体が誰であろうとお構いなしに写真を取る義妹。

その素早さは、年々早くなっていつている。二番隊で認められたのも無理はないが、使う所が間違っている。

隊長が隊へと戻って来られて、まだ日が経っていない。

今から隊首室に行つて帰還の報告だ。

任務で外に出ていたので、あの花見以来合う事が出来ていない。

トントントン

隊首室の扉を叩く。

今ではそのような必要はないのだが、まるであの時の様に。リセ  
ットするかのように。

「どうした」

予想通り、あの時の様に副隊長の返事が返ってきた。

「千田でございます」

「そんな事をせずに、入ってもいいぞ」

「ふふふつ、失礼します」

その言い方に思わず笑みをもらしながら、中に入る。扉を開けると窓からの朝日が眩しい。

以前と同じように窓が開けられていると云うのに、副隊長が纏う雰  
囲気が落ち着いているから、異なつた風景を見ている様な錯覚に陥  
る。

「隊長、四席が帰ってきましたよ」

「んん〜」

副隊長が優しく声をかけながら、誰かを揺すっている。

すると、髪の毛の長い女性が小さく伸びをして、身を起こした。

漆黒の髪には、綺麗な青いの蝶の髪飾りが、ない。持ち主の少女  
の元へと返されたのだ。

「もう時間？」

「違います。千田が帰ってきたんすよ」

「ん？」

隊長は、副隊長に腕をとってもらい立ち上がる。

その様子は、わたくしが抱く十一番隊前五席の印象とはだいぶ異な  
つていて、とても甘えん坊。

もちろん同じ所もあるが、もっとももっとと高飛車だと思ってい  
た。

「君が帰って来て、こうして僕たちと話していられるという事は、  
皆怪我なく帰って来たんだね？」

「はい。無事に任務を遂行して参りました。」

「御苦労さま。ゆっくり休んで」

「ありがとうございます。失礼しました。」

そう言つて、わたくしは隊首室を出ようと2人に背を向ける。

「あのさあ、これって何なの？」  
「ああ、これは・・・」

2人の会話が耳に入る。その声は心なしか楽しそうにも聞こえる。わたくしは、扉に手をかけ、隊首室を後にした。

任務から帰って来てから、ずっと気になっていた事。それは副隊長をはじめとして、皆の表情が明るい。

その答えが今わかった。

彼女の存在があるおかげで皆の不安が少しずつ払拭されているのだ。それはまるであの時のように、綾瀬川弓親という死神が九番隊の隊長に就任した時のように。

認めるべきところは認めなければならない

わたくしがそう思えるようになったのも、今の九番隊の光景があるのも

紛れもなく、全て彼女のおかげ

個人的な憎悪は消し去り

自身が持つ偏見を全て捨て去る

あの時よりも

わたくしは大人になれたのでしょうか

a s  
d e E l  
u n a f i n  
p r i n c e s a 愛しさ故に  
L a s  
p a l a b r

まだ終わらない、終われない。

0 U n a f t e r w o r d

愛しさ故に　　姫からの言葉

第零章 消えぬ偏見

- 《1》 認めざるを得ない
- 《2》 変化と不変

第一章 久しぶりの真央霊術院

- 《3》 久しい
- 《4》 見せる
- 《5》 暴走
- 《6》 案内
- 《7》 駆けつける
- 《8》 平静を失う
- 《9》 謝罪と礼
- 《10》 不甲斐ない
- 《11》 あの時
- 《12》 どういう事？

第二章 九番隊の風景

- 《13》 通信
- 《14》 義姉妹
- 《15》 短い会話
- 《16》 朝早く
- 《17》 気付いていない
- 《18》 雛芥子

第三章 授業参観

- 《19》 早すぎ
- 《20》 授業
- 《21》 見知らぬ

《22》 わからない

《23》 食堂にて

《24》 疑心暗鬼

《25》 意味不明

第四章 何

《26》 泣き出しそうな

《27》 落ちる

《28》 帰る

《29》 どこ？

《30》 間一髪

《31》 研究室

《32》 変わる

《33》 アヘン

《34》 透明

《35》 バレる

《36》 制裁

《37》 叫べない

第五章 封を切る

《38》 引き籠もる

《39》 移動

《40》 昔々

《41》 およそ百二十年前

《42》 笑顔

第六章 暗雲

《43》 おつかい

《44》 厄介

《45》 信頼

《46》 懐かしき

《47》 他人のそら似

《48》 春の嵐

- 《49》 敬愛
- 《50》 つかまる
- 《51》 自由には自己責任が伴う
- 第七章 正しいのは誰か
- 《52》 動乱
- 《53》 真か偽か
- 《54》 語られる
- 《55》 花の化け物
- 《56》 散る
- 《57》 逃走中
- 《58》 蜘蛛の巣
- 《59》 旧友
- 《60》 首切り
- 第八章 時は残酷な程、早く過ぎる
- 《61》 時、心
- 《62》 強い思い
- 《63》 本当の真とは
- 《64》 桜
- 《65》 注目を受ける
- 《66》 飲み比べ
- 《67》 酔っている
- 《68》 復活
- 第九章 消える偏見
- 《69》 不変と変化
- 《70》 素直に認める
- 《0》 あとがき

文章書きはエゴイストでなければならぬ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7367p/>

---

愛しさ故に ~ Las palabras de una princesa ~

2011年10月7日23時14分発行